海外新潮｛朝鮮の國情と將來の運命 / 日本の愛國黨と社會主義者｝

中央公論

第十九年第十一號

內容

○趣味横溢、凡て是れ金玉の文字○

THE CENTRAL REVIEW

｛明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可 / 每月一回一日發行明治卅七年十一月一日｝

反省社編輯

空文年表

菊版約三百頁紙質上等　價金三十五錢　郵稅六錢

（十二月下旬發刊）

本書は世人の常に必要を感じて未だ出版せられざりしものなり、その世に行はるる年表類と異る點は年號紀元等の外には史上の事件を擧る事なく餘白として存したり且つ前後通して十箇年一頁としたれば充分なる餘白を供し得ると共に參照搜索に便利なり

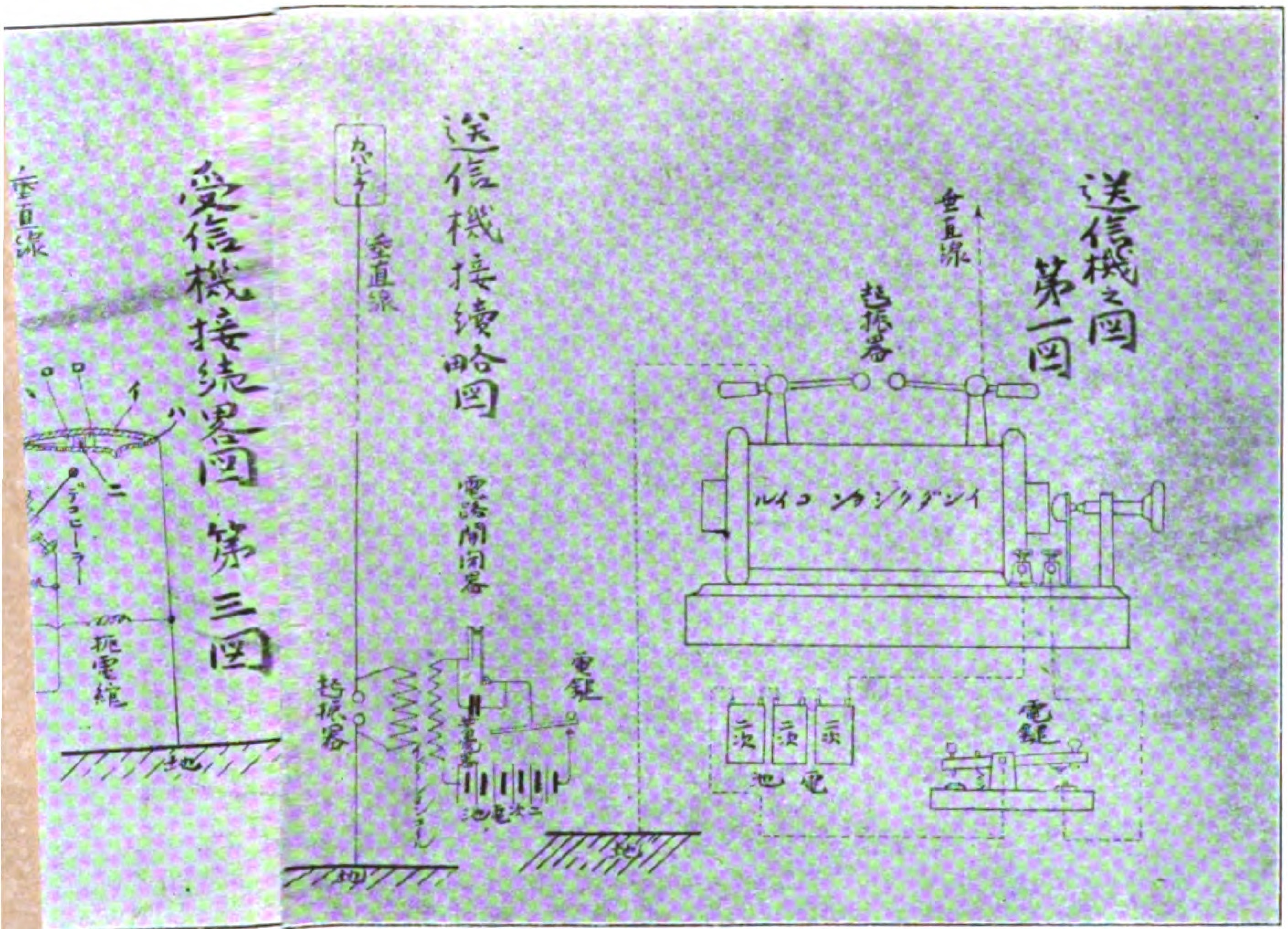
本書は博く世人の需用に應ぜん爲め便利と實用とを主眼とし、なるべく普通年表の陷り易き亂雜の弊を避け其配列には我社は特に意匠を凝し斬新なる方法を用ゐたれば緊要なる事項はすべて漏さず記入したるに係らず極めて簡短に且つ明瞭ならしめたり又各年號に對して索引を設け支那歷代中に於ける小覇王の年號は別表として之を卷末に附したり

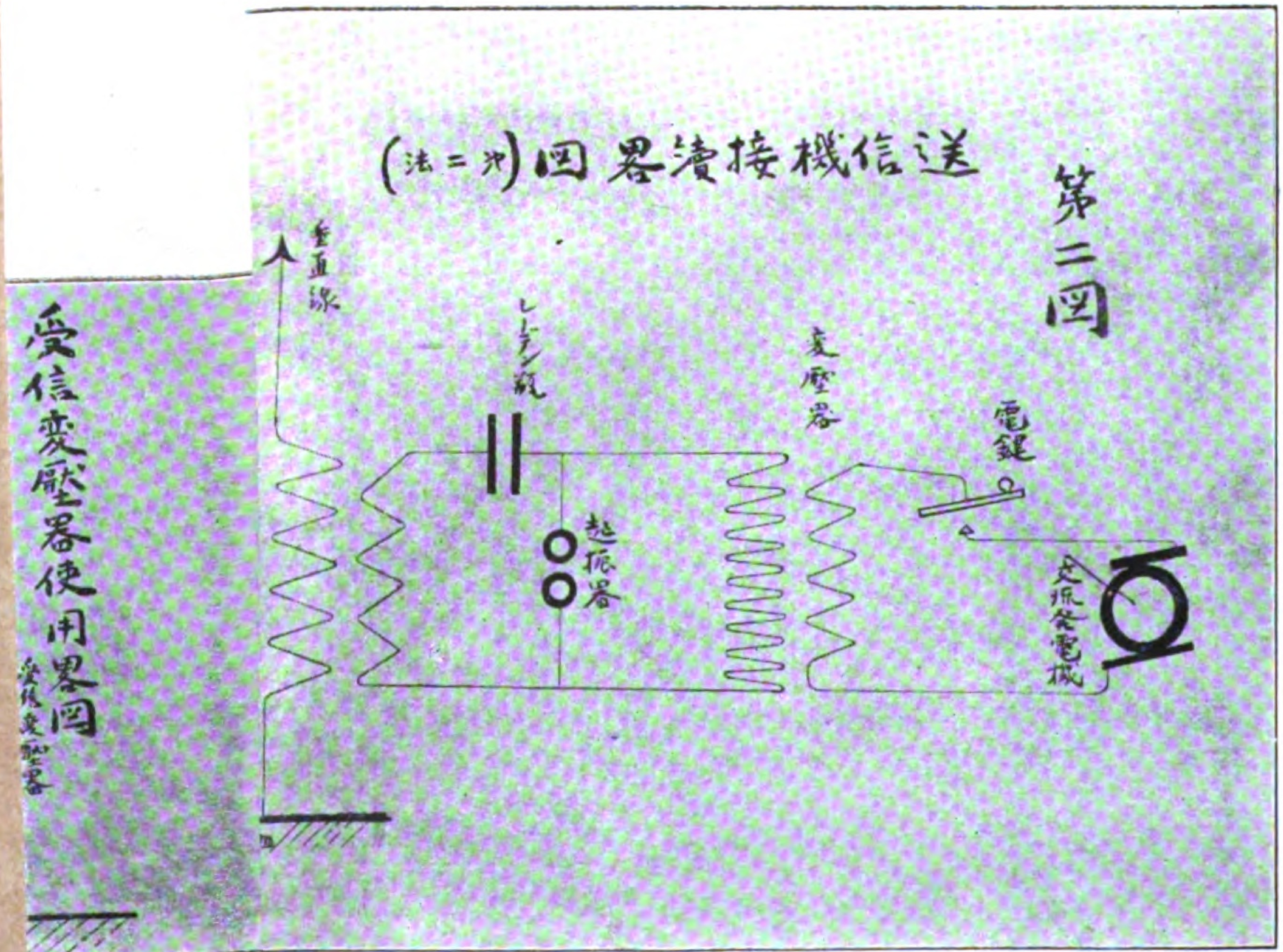
各種學校にありて歷史を練習しつゝある人又は專門的に歷史を研究しつゝある人は此書の出版に由りて今後各自に年表の原本を作製するの勞を省き得へし歷史的研究の旺盛なる今日學者須らく之を座右に備へらるべし

年表は攻學者に限らず世上實務に從事する人にも必要あり我國の舊時に於てすら尙各家庭には必ず一部の年代記を藏したり本書は我新時代の要求に應ずべき文明式の年代記なり、敢て之を江湖に薦む

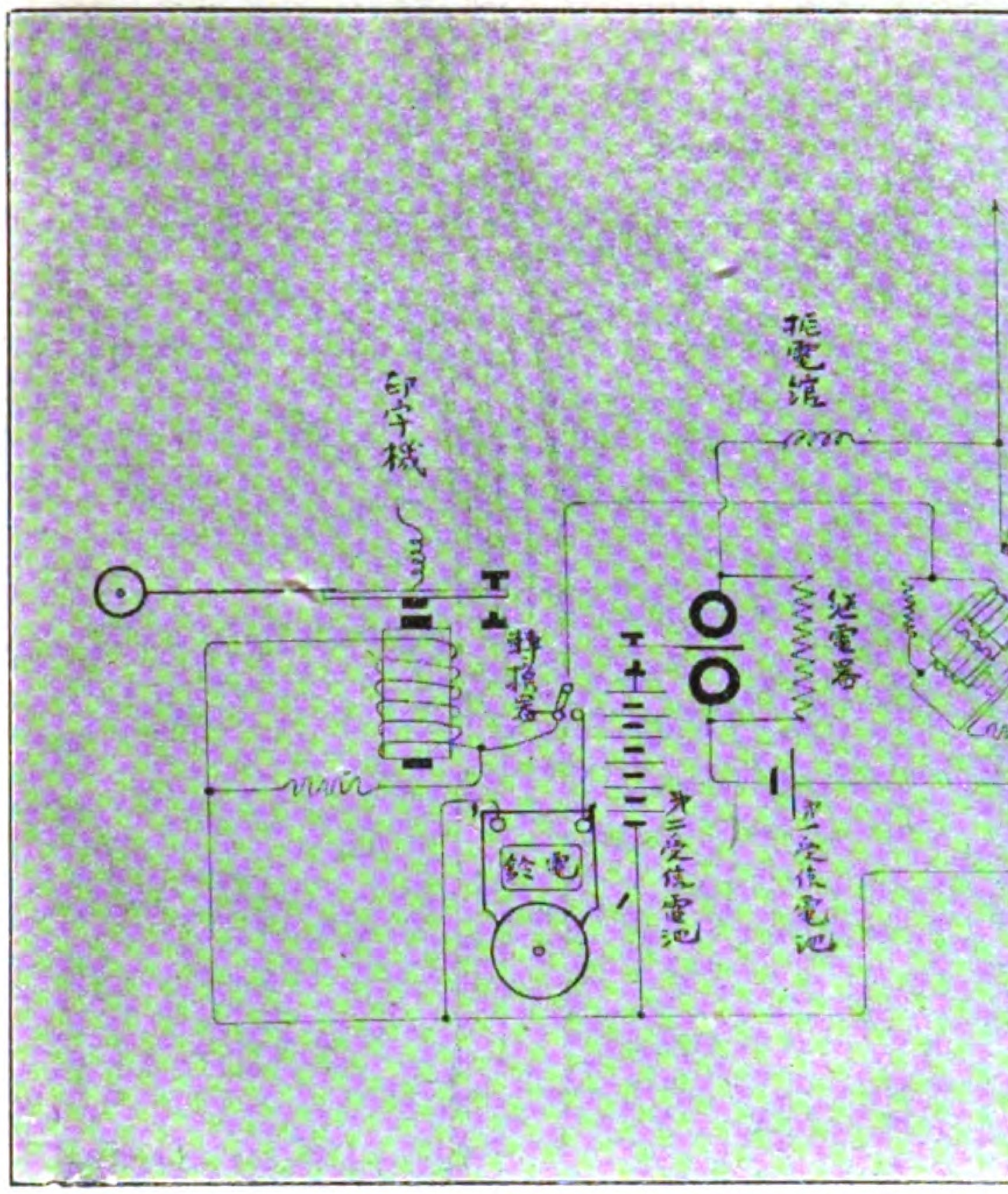
發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地　反省社　電話下谷九百十九番

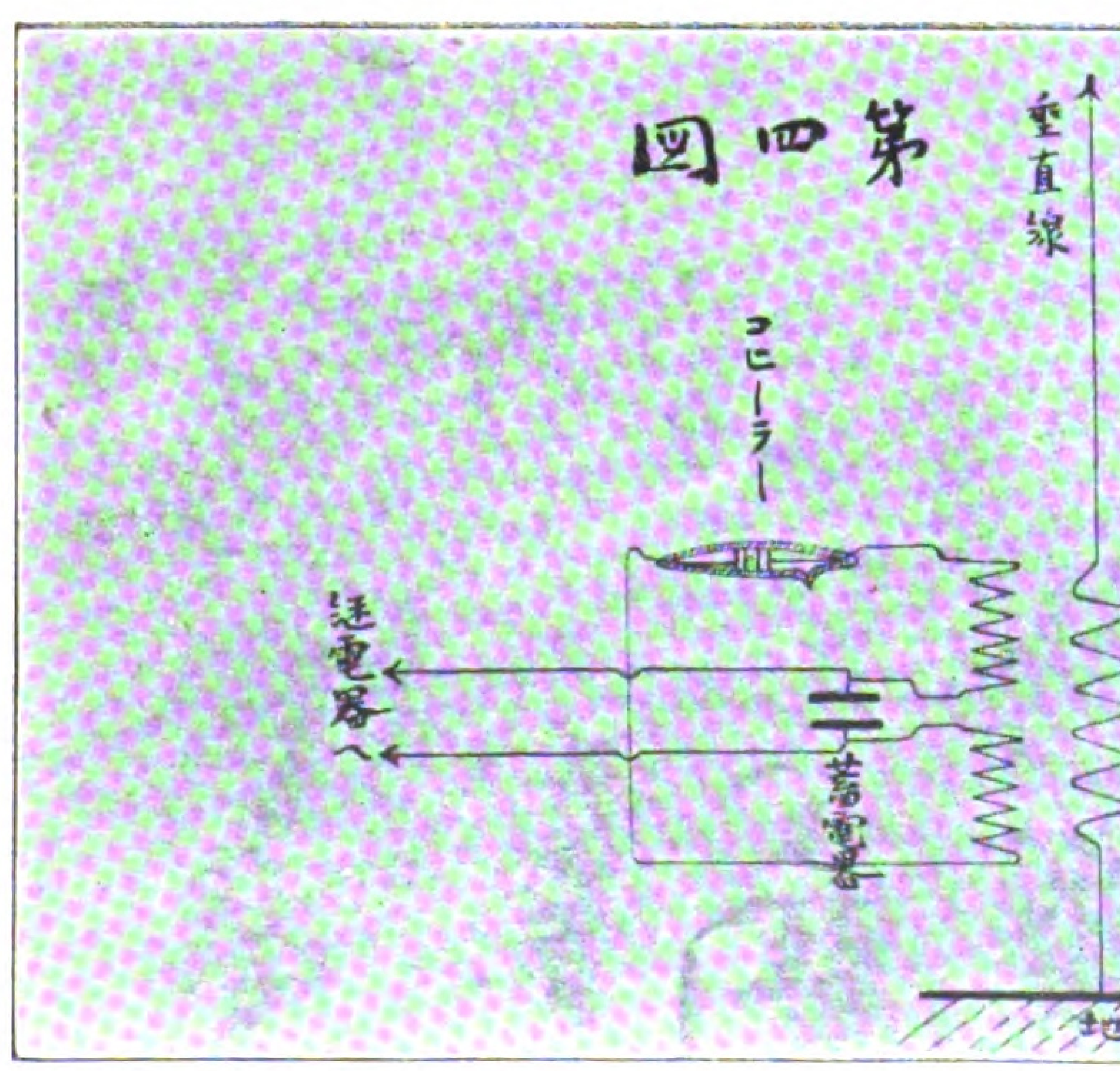
中央公論第十九年第十一號目次


送信機之図
第一図
垂直線
起振器
インダクシヨンコイル
電鍵
二次
二次
二次
電池
地
送信機接續略図
垂直線
電路開閉器
電鍵
起振器
地
受信機接続略図
第三図
垂直線
デコヒーラー
地


送信機接續器図（沖二法）
第二図
垂直線
レーデン瓶
起振器
変壓器
電鍵
交流発電機
受信変壓器使用略図

圖





第四圖

中央公論



第十九年
第十一號

國費負擔の義務

嚴格（シリアス）なる問題は我が四千七百万同胞の上に懸れり。增稅に次ぐに增稅を以てして。今や國民の負擔實に輕からざること是れなり

前期議會には多くの增稅案提出せられ可決せられたり。今また地租所得稅等を始め前に增稅したるものを更に引上げ。且つ一般の稅率を高め。尙ほ絹布稅。鹽專賣。通行稅等の新稅をも課するの案は今期議會に提出せられんとす。國民に取ては決して輕き負擔に非ざるなり

然れども記せよ。此の增稅は總て日露戰爭の結果なることを。而して更に記せよ。日露戰爭は我が國家及び國民の自衛上實に已むを得ざるものなることを

思へ。出征の我が海陸將士は。旣に酷暑極熱と戰へるのみならず。今や更に慄然として恐るべき寒風氷雪と戰へり。居るに家なく、食ふに膏粱なきも。尙ほ銃を捧げ劍を提げて野に立ち山に起てり。而かも砲火の間にありて一死だも惜まず。人生の極苦極慘を甞めて曾て片言隻語だも不平の聲を爲さゞるは何ぞや。其の家族が父を喪ひ。兄を喪ひ。鰥婦孤獨皆怙恃に離れ生活に窮するも曾て顏に不平の色を浮べざるは何ぞや。唯だ我が國家の自衞上已む可らざる戰爭に對する國民の本分たることを信ずるが故ならずや。其の心勳章榮爵を希ふに非ず。何等の報酬を望むにあらずして。窮苦。哀別。損傷。慘死の如き人生最大の不幸を顧みざるは。唯だ國家に盡す國民の本分を完ふせんと欲するがためならずや

國家自衛のため。我が海陸の將士は强露の暴横を取挫がんと欲して斯の如く慘苦を甞めて毫も沮み苦むの意無し。國民則ち獨り增税の負擔に苦むべしと言ふの理ある乎

且つ試みに我が敵たる露國と我が財政及び國民の負擔力を比較せよ。露の人口は其の本國及び屬領のものを合して一億三千百二十一万餘人のみ。我が人口四千七百四十九万餘人に比すれば三倍にも達せざるに。露の平時の歳出は二十二億七千五百四十万圓にして。我が平時歳出二億八千九百三十一万圓に比して正さしく九倍以上なり。其の國債の如きも。開戰前に於て露は六十八億四千五百四万餘圓にして。我が日本の五億五千九百六十二万圓に比すれば殆んど十二倍なり。露の如き甚だしく貧民多き所に在て、我が九倍の政費を負擔し。我が十二倍の國債を負擔す。其の苦痛想ふべし。而して我が國民の負擔の輕きまた多言せずして知るべきのみ

露の戰費は何程なるや未だ確知し得ざるも。今春の末に於て日に二百五十万圓を要したりといへり。爾來其の倍數の大兵を出し。且つバルチック艦隊の東航により。冬季輸送の困難を加へたるにより揣摩するに。戰費は恐らくば春末に二倍せん。即ち日に五百万圓。一ヶ月一億五千万圓にして。一ヶ年實に十八億圓の算なり。蓋し露京莫斯科より奉天に至る兵站線は二千百餘里にして我が宇品より遼陽まで五百里未滿なるに比して實に四倍以上の長距離なるのみならず。露の兵站線は唯だ單線なる一條の西伯利亞鐵道のみ。故に其の戰費のみにても。少くも我が三倍以上に上らんと疑ひなかるべし

夫れ我が敵國たる露人は。日露戰爭の意義をすら解せず。盲昧、貧窮にして專制政府より甚だしき壓制を受くるに拘らず。尙ほ我が三倍の戰費と、九倍の租税と十二倍の國債とを負擔す。露人より文明にして敎育あり。戰爭が國家の自衛上已む可らざる大業たるとを知り。且つ參政權をすら有する我が日本國民にして、今如何ぞ增税の負擔に耐えずと言ひ得んや之に耐えず

といふは敵たる露人に對してすら耻づるヿを知らざるものなり。否。出征の將士に對して口にすら出す可らざる言なり

吾人をして忌憚なくいはしめば。增税及び新税の中。往々議すべきもの少からず。之を修訂して其の宜しきを得せしむるヿ蓋し議會の任にして。而して國民の希望なるべし。然れども政府者を敵視するがため。政略上より之を否決するが如きは。決して國民の本志にあらず、議會に於ける政黨等深く玆に留意せざるべからず

出征の將士は其の勞苦を厭はずして敵に對し。身體を損傷して癒す可らざる不具者となるも敢て辭せず。二ツなき一命を失ふも亦惜む所なく。偏へに國家のために盡さんと欲し其の家族また憐れむべき鰥婦孤獨を出すも。日常生活の資に窮するも亦辭せざらんとす。乃ち國民も區々の增税新税を苦痛なりとせず。快く之を負擔して以て出征軍をして後顧の憂なからしめざる可らず。是れ敵國を擊破し屈伏せしめて。遂に國家の自衛を完ふする所以なり。否。國民の本分なり

歳暮廢止論

俗に歳暮の禮と稱するものあり。交際ある間に年末毎に物品を贈答する是れなり

此の禮のため。一籠の鴨。甲より乙に贈られ。乙より丙に贈られ。丙丁戊己庚辛壬癸に轉贈せられて遂にまた甲に返り。而かも始め餅けかりしもの腐敗し來るの例甚だ多し。然れども交際弘き家に在ては爲めに數千圓數百圓を投せざる可らず。普通中人の間に於ても尙ほ少くも十圓を費すを例とし。所謂裏店社會の家と雖も尙ほ三五十錢を費すもの甚だ多かるべし

是れ實に無用の禮也。否。戰時の今日に於て全然無用也。平生疎濶に過ぐる處。一片の音物によりて交際を溫むるヿ亦必らずしも惡しきに非ず。一年一度物品を贈答するヿ禮に於て必らずしも惡きに非ず。歐米には現にクリスマス祭あり。日本に年始歳暮の禮ある。

强がちに廢す可らざる也。然れども是れ平時に於て然るのみ。今や露と戰ひ。軍人外に苦みて國民內に生業に努め富力を增殖するに急にして。所謂出來得る限り勤儉を爲さんと欲する時に方り。斯の如き禮儀に拘はりて多くの費用を損するは餘りに智惠なきとなり。宜しく斷じて之を廢すべし

若し夫れ此の歲暮に贈答すべき金錢を擧げて恤兵の資に轉ぜんか。妙更に妙也。全國の戶數約八百万。一戶平均一圓の歲暮を費すとせば。其の全資實に八百万圓なり。一戶五十錢とするも尙ほ四百万圓也。假令金額とせざるも。普通歲暮に贈答する手拭。ハンカチーフ、石鹼、紙、書籍、筆墨及び酒類。煙草類。漬物類。菓子類等を轉じて恤兵品とせば。實に好個の恤兵物ならずや。吾人は實に全國各市町村が一致して斯の如くせんとを望む

唯だ此がために普通の年取り。及び年始の禮をも廢すべからず。戶々餅を搗き。雜煮屠蘇を祝ひ。門松を飾る(唯だ馬鹿々々しく虛大にす可らざるのみ)が如き總て例年の如くすべし。之をも廢するは。寧ろ世を擧げて寂寥に過ぎしむるの弊あるが故也

更に一事の注意すべきは。歲暮の禮を廢するを口實として、地方の豪農をして其の小作人を賑恤するを廢するが如きとなからしむるに在り。銀行會社商店等が其の雇人に慰勞賞與を廢するが如き卑吝のとなきに在り。故に吾人は更に重ねていふ。廢して以て恤兵に轉すべきは。唯だ普通に。歲暮の禮として各家互ひに贈答すべき物品のみ。其の物品の代價のみ

佛國の態度

九年前、所謂シエームソン侵寇の阻遏せられて、セシル・ローズの隱謀壞ぶるゝや、獨逸皇帝は大統領クルーゲルに親電を發して其の大危害を脫がれたるを祝賀し、爲に英國の憤怒を買ひしは今尙ほ人の記憶に新なる處也、當時英國は優力なる艦隊をドーバー海峽に集中し、獨逸に對して大に威を輝かし、一時世界をして

英杜の交仗に先ちて英獨間に釁端の啓くるを見るに到る可きやを疑はしめたりしが、獨帝遂に屈して兩國の間、幸に事なきを得たり、而して世は獨逸皇帝の輕擧を嘲笑して止めり。

獨逸皇帝が其の一言一動に愼重を欠ぐは殆ど常事にして、或は『鎧袖演說』を爲して皇弟の東征を送りたる如き、或は『獨國の將來は海洋に在り』を絕叫して英國の戒心を喚起したる如き、將近くは露國聯隊に對して華々しき戰勝を望む旨を演べて我邦の感情を害したる如き、安んぞ輕擧の譏りを免れざらんや、然かも當年クルーゲルに祝電を發したる一事の如きは必ずしも其の輕擧を嗤ふて止む可きに非ず、想ふに其の之れありし所以のもの、一には祖父維廉老帝及び宰相ビスマークと大統領クルーゲルとの間に締せられたる舊交上已むを得ざるものありしに因り、二には是に依りて杜國在住の獨逸國民をして利益と勢力とを占め得せしむるの便宜ありしに因り、三には是に依りて和蘭人の歡心を繫ぎ、彼等をして獨逸恃むべしの念を起さしめ、仍て以て多年の宿望たる獨和聯盟の計畫を實にするに利せんとせしに因れり、况んや當時に於る皇帝の行爲の高明にして堂々たる、幾分其の力を度らざるの譏を免かれざるにせよ、倘ほ歐洲强國の主權者たるに愧ぢず、頗る壯とすべきものありしに於てをや、吾人は當年獨逸皇帝の行動に觀、其の心を諒とし、其の態度の公明にして毫も隱蔽するなきを壯としたりしが、今回日露戰爭起りて後ち交戰國に對する佛國の態度の甚だ曖昧なるを目睹するに及び更らに此の感念を强くせり。

日露の開戰以來、佛國の我に對する行動甚だ其の意を得ざるものあり、乃ち初には、盛んに我邦に向て惡言を放ちツアール及其政府の我に對する誹謗を助け、旣にして我が連戰連勝するを見ては荐りに『黃禍論』を提唱し、以て文明諸國の我に對する惡感を惹起せんことを試み、而も『黃禍論』の妄誕信ずるに足らずとする者の漸く多きを見るも倘ほ其の言を更めず、且つ他方に於ては陰に中立を犯して露國を援助し、斯くて

有形無形に幾多の利便を我敵國に供給して怠らず、殊に近く駐露佛國大使が我日本の漸次疲憊するに反し、露國の益々兵力を極東に集中し、終に最後の勝利を博する疑ひなかる可きを宣言して憚からざる如きは、其の地位と職責とを顧みざる無遠慮の甚しきものにして締盟國の使臣として頗る禮義を失するの言と謂ふ可し、佛國政府が我抗議に對して不得要領の答辯を爲したりと傳ふるに併せて以て、彼れ佛國の態度如何を知る可きに非ずや。

蓋し露佛兩國の交情親密なるは敢て今日に始まれるに非ず、前世紀の初に當り、露帝ポールは即ち奈破崙一世の無二の同盟者にしてポール殂して亞歷山一世位を統き、時に奈破崙と和し、時には戰ひたりしが、尋て神聖同盟の首唱者として聯合軍の牛耳を執り、奈破崙を擊破し、長驅して巴里に前進するや、ブルボン王朝の爲め且は佛蘭西王國の爲め最も多くの利益を圖りたるものは露帝なりし也、是を以てブルボン王統復位の後ち露國は常に交際國中の最も親善なるものにして、降りてポリンヤック公の執政たるに及び、露佛兩國の間に或る利益分配を條件とせる一種の秘密同盟締結せられたりと傳へられしが、爾後『七月革命』爆發し、シャル、十世廢黜せられてポリンヤック内閣倒るゝに及び露佛の關係に多少の異動を來したりとは云へ、一部の有力者はバルカン半島を露國に屬せしめ、埃及西里亞を佛國に屬せしむるを條件として英墺兩國に對する攻守同盟を締結せんとを計畫せり。想ふに此の時に在りて佛國と利害最も多く牴觸せしものは英國にして露國と利害最も多く牴觸せしものも亦英國なりき、故に露佛の間に同盟、少くとも同病相親の關係密なるを見たるは必然の勢と謂ふも不可なかりし也。是に由て觀る可し、露佛の交情親密なりしは百有餘年前に在りて既に著しく、爾來幾十年間常に繼續し、而して最近十數年間に在りては更に其の密を加へたるとを、之を夫の獨國のツヲンスヴアールに對するに較ぶれば其親疎の厚薄本より日を同ふして語る可からざる也。

今日に在ては佛國は露國の同盟國なり、而して其の

既往一百年間に於る交情の常に親密なりしと亦斯の如し、故に若し同盟國の危急を見、其の條約の義務以外に於てまでも之を救援するを要すとせば、須らく公明なる態度を執り、其の言動を正大にして堂々之に赴くを可とすべし、然かも佛國は同時に復た我日本帝國の親交國たり、苟も露佛同盟條約の義務以外に以て露國を救援するの不可能なるを知らば、須らく局外中立を儼守し、其の言動を愼重にし、以て親交國たる我日本帝國の惡感を買はざるに勉む可し、然るに公然起て同盟國の危急を救ふ能はず、將に中立を儼守して其の態度を公正にする能はず、乃ち陰秘に行動して同盟國を助け、時に阿諛的妄言を放ちて我感情を害するを顧みざらんとす、如是きは啻に世界の强國たる佛國の聲譽を損する大なるに止まらず、更に將來に於る佛國の利益に甚大なる影響を及ぼすを免かれざらんとす、吾人は親交國たる佛國の爲め深惜せざるを得ず、乃ち斯言ある所以なり。

武士道は基督教に酷似す

本多庸一

武士道とは抑も何者なるか、そが有する道德上倫理上の位置は如何、その宗教との關係は如何、これ等は今予の云はんと欲するところにあらず、蓋し此の如きは到底一朝一夕のよく盡くすところにあらず、實に一大問題として更に深き考察を要すべきもの也、只予は予が思ひ浮べたる二三武士道に關する談話をなすに止めん、併し玆に一問題あり、即ち武士道と基督教とが或る類似の點を有するてふことこれ也。

タイムス新聞は日本の武士道を論じて、一のフイロソフイーなりと云へり、然り新戸部博士の武士道を讀みし者は必ず此思ひあるべし、何となればそが既に學說的に述べられたればなり、然れども予は武士道を以つて一のプリンシプルとは思惟せざる也、大和魂といへるものがプリンシプルにあらざる如く、武士道といへるプリンシプルありとは思惟する能はず、忠と云ひ、義と云ひ、廉耻といひ、武士道の本領とするとこ

ろは皆悉く君臣の關係より生じ來るものにして、たとへそが百般の社會に應用せらるゝとも、其依つて來るところは則ち君主政體に外ならざるべし。

武士道は日本に限らず、他國にも必ずこれあるに相違なし、而も日本に於ける武士道が何故にしかく發達せるかといへば、即ちその君主政體、而も萬世一系の君主政體なりしが爲め也、人民が自ら臣下としてその君主を尊崇し　國土財貨及び人民を擧げて君主の所有物と見、絶對に之に服從し、其養はれたる恩に酬ひざる可らずとの根本的觀念は　武士道の發達をして甚大ならしめし原因なり。

封建制度の建てらるゝに至つて、君主なるものゝ數多くなり、從つて其威嚴も或意味に以て削減せられしが如きも、事實は反つて之に反し、君主の壓制なるだけ、それだけ臣下も亦服從するに至り、武士道の發達も益々完全に强固となり、或は一のプリンシプルの如き觀を呈せざるにもあらざりし也、武士に取つては武士道は一の宗教也、道德也、教育も亦これより來る、只其君に忠なれと敎ふるこれ也。

或は彼の浪人の如く君なく臣なきものにして、尚且つ武士道を重んじ、義と云ひ名と云ひ廉耻といひ、以つて清廉潔白の行爲をなせしものなきにあらず、此點より見れば武士道てふプリンシプルあるが如く見ゆるも、そは當時の社會の組織と幼時よりの敎訓によりて武士的に作られたる爲めにして、武士道なるものゝ顯現は、君臣の關係に於て最も著しく最も完全に見らるべき事は既に喋々を要せざるところ也。

即ち武士道なるものは由來專制の國に發生し、專制君主の下に發達せるものにして、云はゞ專制封建の遺物也、然り最も美しき、最も光彩ある、最も活動し得る、耻しからぬ立派なる遺物也、吾人は之を以つて大に歐米に向つて誇り得べし、而して其が骨董品の遺物のそれの如くならず、直に取つて應用し得る効果の甚大なるは、日清戰爭に將又今回の日露戰爭に於て證明し得る處なりとす、然れども惜むべし專制封建の制度の中に發達したる武士道は、其儘之を今日の政體の下に適合せしむべからず、其勢力は次第に衰微に傾きつゝあるが如し、昨今武士道の聲漸く盛んなりといふと雖も、一に學者の研究に供せらるゝのみにて之が實行に至つては則ち無からんとす、日露戰爭は其實行の好例證なりと雖も、只戰爭に於てのみ其發現を望まば、今後戰爭なるものゝ減滅せる時——平和の時に於ては

武士道の精神實行は望み得べからざるに似たり、これプリンシプルにあらざるが爲なり、而も此の如き美しき遺物は之を保存し養生し益〻發輝せしめざる可らず。

予は本論を忘れて枝葉に走れり、予は武士道と基督教との類似せる點に就いて言はざるべからず。

然れども前述せる處によりて、武士道が君臣の間に生ずるもの、臣が君に對して行ふ――つゞめていへば所謂忠に由來することを知り得べし、即ち人と人との關係 Personal relation にあることを知り得べし、予の言はんとするは即ち此パーソナル、レレーションなり、ボーロが我生くるも神の爲也、我死するも神の爲也、といへりしは、武士が其身を以つて君主のものとするに齊しからずや、基督教は神といへる君主を頂き、此主の爲めに、此主の愛の爲めに生き而して死することを教ふる也、神と人との相違てそあれ、基督教に於て神を信じ、神を尊崇し、父とし主とし仕ふるは、武士道に於て臣下が君に對すると同樣の精神に基く、予が酷似の點ありといふは、此パーソナル、レレーション、パーソナルインフルエンス Personal influence の等しきを謂ふに外ならざる也、敢て貴問に答へたりと言はんや

以上は氏が青山の邸宅に於て、ストーブの傍にて記者に談ぜられし要領なり、その文責等の全く記者にあること言を俟たず

基督教と言語學佛教と東洋言語の研究

文學博士　上田萬年

言語學は十九世紀に至つて一の科學(サイアンス)となつたものであるが、其科學(サイアンス)となる上には Bopp とか Grimm とか又は Humbolt とかいふやうな豪傑が其基礎を置いたのである。然しながら十九世紀に至るまでには一方ならぬ輔助を基督教から受けて居る。御存じの通り希臘は言葉の研究には極めて冷淡な國であつて、世界の各國語の研究をせず、自國の言葉より外によい言葉はない、他國のものは所謂野蠻人の言葉であるといふ考を持て居た、恰度支那人が中華の言葉を一番よいものと思うて、他國の言語を鴃舌などゝいうて卑しみしと同一の事である。羅甸人も希臘人と同じく、基督教の入るまでは言語の研究には重きを措かず、只羅馬人は自

分の先蹤國たる希臘の言葉のみを勤めて研究した。然るに基督教が一度歐羅巴に入り、特に羅馬人に其根據を得るに至つては古代の希臘人及羅馬人などの思想を根底から一變して、世界の各國民は等しく神の子孫から出た、世界の各國民の話す所の言葉も等しく神の子孫の語り傳へたものである、即ち人類の同一の起源を有し、人性の同一の發展をなすべきこと、及び人權の同一の享有あるべきこと等を盛んに說くに至つたのである、夫れで今迄希臘人や羅馬人よりは野蠻人といはれた人民も基督教國となつては等しく同胞として扱はる丶樣になり、これと同時に此新信仰は種々の宣教師によつて世界の各地に傳へられ、其人民は此教を奉ずると同時に其言語を以て聖書を理解せんとした。斯くして基督教が世界の言語に自分の宗旨を飜譯させて進めて行くと同時に、其聖書も各地に弘がつていろ〳〵の言葉を知らしむるの媒となつた。此基督教の布教の方法は漸々進んで一三一一年頃には法皇 Clement V が歐羅巴の四大學即ち Paris, Salamanca, Bologne, Oxford の大學に命じて必ず二人の希伯來語の教師、二人の亞剌比亞語の教師、二人のカルデア語の教師を置いて此等の言語を練習せしむることを定めた。又た其後羅馬の Glegory XV や Ulban VIII の如きも十六世紀より十七世紀にかけて宗旨を弘めることを心掛け、各國の言語を以て、其言葉によつて宗教を布くことを奬勵した。即ち其方便として世界の各方面に宣教師を派遣した、恰度日本の天草に來た基督教徒の如きも此時分の一潮流である。即ち其宣教師等は日本の文法を作り、日本の辭書を作り、日本の讀本を作つた、か丶る羅馬法王の刺激の下に西班牙の宣教師即ち Zesuit 派の宣教師 Lorenzo Hervas (1735-1809) は殊に言語を集めるに熱心で、世界の中の三百以上の國語の摸範を集め、又四十以上の國語の文法を編纂した。又此人は言語の方便によつて人種の起源、人種の系統的連絡を作らんと試みた、此等は基督教の言語學に貢献した最も著しき例であるされど亦基督教が希臘羅馬の古典學に對して貢献した所も實に非常に多いのである。箇樣に基督教が言語學の上に及ぼした影響は極めて多いので學術界は基督教に對して大に感謝せねばならぬことである。

此基督教と言語學との關係を見た後私は東洋今日の言語學の現狀を見ると感ずる所少くはない。勿論東洋言語學は學者が専問に研究すべきものであることはいふまでもないが、學者の研究をはなれて、佛教の如き

東洋否な世界の一大宗教なる其佛教が布教の上に言語の大切なることを認め、此上にいろ〳〵の施設をすることが十九世紀の基督教にも及ばざる恨みがあることを見ては、少しく意見を述べて見たく思ふのである。

佛教は我日本に最も固い基礎を有する宗旨であるに拘らず、未だ日本語に書きあらはしたお經を持たぬのである、これが言語學者として國語學者として立つ私より見れば甚だ訝かしいことである。眞言秘密の體を以て佛教の假面とする時代は已に過ぎ去つた。かゝる外面的の秘密で今日佛教の有難味を感ずる人は極めて少ない。さらば佛教に於ける眞の經典を日本の俗語を以て書きあらはすと恰度ルーサーの聖書の飜譯の如くすることが出來ぬのであるか。何故日本國の佛教語は日本國の國語を以て布教し得ざるのであるか、これ先づ門外漢たる私の疑問とする所である。夫れから又國外に出て丶朝鮮なり、滿州なり、蒙古なり、日本の眞正なる佛教を布教するに當つて日本語を以て之を布教するといふことも必要であらうし、又同時に其等の國々の言語を以てお經を飜譯して容易く引く人々に説教すると必要てあらう。何故に佛教の所謂當事者は其側の事業に手を染めぬのであるか、其事業の完成して東洋に弘く行はる丶時が所謂日本に其正體を傳へた佛教の世界に於ける地位の定まる時であらうと思ふ、勿論是れをするには言語學上の智識が必要である。然しさうかといふて言語學者が直ちに之を成し遂げ得られぬ、つまり佛教に通じ、而して言語學に通じた學者の輩出を求めなければならぬ、又其資格を持た人が各國に移住して、よく各國の人民に接して夫等の人民と共同生活をなすことが出來るやうでなければならぬ、恰度例を取れば日本のアイヌ語は英人 Bachelor といふ人によつて文典も字引も作られたが此人は四十年も北海道に住んて居る人であるといふ。又朝鮮語の研究は今日までに重もに佛國の宣教師によつてせられた、佛國の宣教師の編纂した朝鮮語の文法、辭書は今日も學界のオーソリティである、そして佛國の宣教師は今は已に第二の朝鮮人となつて根據を固く其地に占めて居る、つまりかういふ固い信仰を以て其信仰を國も違ひ人種も違ふものに鼓吹するといふ覺悟て其地に行き、其言語を研究し、其國の言語で著述する人が出なければならぬ。此言語學上の研究は佛教にとつて甚だ必要であつて此れが出來上る時は佛教の一新時代を形成するであらうと私は信ずるが、然し私の特に希望する所

は此言語學的の事業が佛敎の力によつて大いなる補助を與へられんとする上にある、此度の戰爭に關しても北支那の俗語や、蒙古、滿州、等の俗語が充分に研究され、文典、字引、讀本等夫々の著書が出來てあつたならば、非常に我國の陸軍の爲めになつたのであらうと思ふのである然しながら學術の研究は國勢の進歩に伴はず、却て戰後に是等の研究を始める樣になつた、これは國家の上よりいふも學術の上よりいふも甚だ遺憾のことゝいはねばならぬ。されど今日の樣な政治家が學術を見る事の緩調の場合には其必要を認めても之に當るに其人なく、其人があつても其費用がない爲めに遂に國家的の施設をする事が出來なかつたのである又今後も容易に出來なからうと思ふ。若し此場合に佛敎家の如き宗敎家の手によつて此等の事業が出來たらば、佛敎は間接に國家に對して非常の貢献をなすものであらうと思ふ、政治上前に云つたやうな狀况は前にもいふ通り今後も必ず引續くだらうと思ふ從て私は東洋各國の言語の研究を佛敎家の力に待つことを切に希望するのである。

筆は劍よりも大也

山縣五十雄

今回の戰爭の因て起りたる所以は、直接に將た間接に、二三にして止まらざるべけれど、其間接の主なる源因の一は、敵國が我國の眞價を知らざりしにあると疑なし。露國は我國が四十年以前迄はいまだ半開の域を脱せずして、維新急速に泰西の文明を採用したりとはいへ、我國の文明を以て猶ほ皮相の者に止ると誤解し、我國民が低く小さき木造の家に住居し、寛濶柔惰なる衣服を着け、其身體は矮少にして其體格は薄弱に見ゆるを見て、よしや陸に百萬の大兵を有し、海に二十萬噸の戰艦を浮ぶとても、其實は支那人に少しく優るも多く秀づる所なき一東洋國民にして、到底歐洲の大強國の敵に非ずと推測し、強大なる兵力を以て臨まば、我國は直ちに畏縮して露國の爲す所に異議を挾まざるに至るべしと判斷し、こゝに於てか我國の正當穩和なる要求に耳を假すことをなさずして、強て我意を行はんとしたればこそ、遂に今回の露國にとりては一大不幸なる戰爭の開かれしなれ。若しも露國にして我國の質撲なる小さき家の中には愛國の熱情燃ゆるが如き家族

住み、寛濶柔惰なる衣服を着け矮少にして薄弱に見ゆる我國人の身體には確固不拔なる勇氣と義心の宿れることを知り、其陸軍は木偶に非ず、其戰艦は飾裝品に非らざることを了解し居たらんには、露國は決して今回の無謀なる戰爭を企てずして、大に我國に讓歩し、二國の間に蟠りし困難は、平和に局を結びしなるべし蓋し今回の戰爭が露國の我國の眞相を知らず、眞價を見分くること能はざりしに因るもの多きは多言を費さずして明ならん。

一方に於て日英同盟――今回の戰爭に於て我國をして後顧の憂なからしめ、日清戰爭の終尾に當りて我國の受けたりし如き不利を豫防し、敵國をして深く憂慮せしめ、我國をして大に安心せしめつゝある、其價の誇張し得べからざる日英同盟の彼の如く容易に締結されし主なる源因の一は比較的英國民が我國の眞相眞價を諒知し居れるに在ること疑なく、又よしや條約上の同盟は成り立ち居らざるも實際に於て深厚なる同情を我國に寄せつゝある事實上の同盟國たる米國の態度の因て來る主なる理由も亦、同國民が英國民と同じく比較的よく我國の眞相眞價を諒知し居れるに在ること亦疑なし。かく英米兩國民が比較的よく我國を解する所以は我國人が早くより英語を學び、最も多く英語を以て書かれたる書籍新聞を讀み、西洋の文明を採用するに主として此語の便に依頼したる結果の一にして、彼等二國の民も我國を知ること深く、從て我國民を親愛すること大なれば、今回の戰爭に於て最も強き同情を我國に寄するなるなり。

蓋し殆ど總ての爭ひは誤解より起る、個人と個人との間に於ても然り、國家と國家との間との間に於ても亦然り。よく我を知る者は我友にして、我れを誤解する者は我敵なり。英米二國はよく我を知る、即ち我友國なり、露國はよく我を知らずして、大に我を誤解せり、こゝに於てか彼は我敵國となれり。

これにつきて思ふは我國の眞相眞價を世界殊に英米二國に紹介したる内外文士の功なり。最初に最も弘く我國の風俗民情を傳へたる「みかどの帝國」著者グリッフィス氏、該博なる智識を以て我國の文學を紹介したるチエムバレン氏、及びアストン氏、深く精き智識と公平にして明晰なる判斷とを以て我國の歴史を著はしたるマードック氏、愛すべく頌すべき迷魂的詩文を以て我國の美はしき風景山水を寫したる故エドウイン、アーノルド氏、流麗典雅美はしく清き詩的文章を以

て理想化し我國を贊したる故小泉八雲、其の他フレーザー夫人、ブリンクリー氏の如きいづれも我國を英米二國民に紹介して、彼等をして我國民を了解せしめ親愛せしめ、且つ尊敬せしむるに至らしめたるに與りて大に力ある人々にして、我國民が此等の諸文士に負ふ所は頗る大なるなり、若しも露國にして此等の諸氏の如くよく我國を知れる文士を有したらんには、今回の戰爭は斷じて起らざりしなるべく、日露兩國民は互に親友として交はりしなるべし。之を思ふて余は「筆は劍よりも大なり」との格言の眞理をいへるものなることを今更の如く感ぜざるを得ざるなり。

拒否す可らざる神の思想（續）

黒岩周六

然らは其絶對とはどう云ふものであるか、まだ是丈ては絶對が何てあるかゞ更に分りませぬから、其絶對は何かと斯う云ふやうに考へて見ますると、是もどうも言葉に依つて説明することは誠にむつかしいのでございます、けれども無理に説明することの出來ない譯でもない、是は人々が自分の心に於て思ひ到るのが絶對を知るの本當の仕方であるから、諸君に於ても是は十分能く考へて下さらねばなりませぬ、若し私をして言はしむれば外に云ひやうはないのでありますが、吾々の絶對と接着して居る所の物、或は時間であるとか或は空間であるとか、或は物の數であるとか云ふやうな空漠な思想に依つて推して行くのが先づ極く手短かであらうと考へます、例へて申しますると此時間或は空間と云ふのは何處まで行きましても其限りの無いものであるからして、若し絶對と云ふものに絶對無限の性質があるとすれば、其無限と云ふことを考へるには、私の云つた無限即ち時間の無限空間の無限と云ふことに依つてそして其類似に依つて考へる外はない、吾々の見る所に於て大變長い數限りの無いと云ふものは何んであるかと斯う云ひますると、此空間の廣さである、或は何千年來續いて居る又是から後何萬年續くか分らぬ所の此時間の長さである、或は此時間空間よりモー一層人間に接して居る所を申しますると、吾々の口に唱へる數である、數と云ふものはどこまであるものであるか更に認めの付かない、或は千萬億まてありまする

か、億兆まで其上の種々様々の文字に依つて現はれて居りますが、實際數の際限はどこてであるか、此時の長さ所の廣さ數の際限此三つは極まりのないものてある。

けれども是は詰り吾々の思想の上にあるものでございまして、此極まりの無い物が果して宇宙に在ると吾々が思ふ所の絶對無窮の如く無窮であるかと斯う考へますると、實に吾々の思想で考へる所の無窮と云ふものは極めて不完全なる無窮である、例へば數の如きものでも之を宇宙の本當の數と較べて見ると、丁度此人間が知ると云ふ其知り方とそれから絶對が知ると云ふ其知り方とは同じ知ると云ふ言葉でありながら違つて居る如く、同じ無窮でありながら吾々の考へる數と此宇宙に實在して居る數と大變の違がある、其性質に於て非常な違がある、どう云ふ違ひがあるかと申しますると、吾々の云ふ數は極めて不十分である、此數に依つて宇宙に在る物を完全に現はすことはどうしても出來ないのである宇宙の實際の物の多いと云ふことは云ふまでもなく吾々の考へるよりもモー一層澤山ある、空氣の一吋立方の中にどれほど塵があるかと云ひますると、先づ此塵と名付けられる物が四千萬あると云ひますが、其四千萬たるや中には生きて居るものもある、生きて居るものは吾々の呼吸と共に腹中へ這入つて或病氣になるものもありまする、空氣の一吋立方にすらそれ位の物があるとすれば、其數たるやどうしても人間の數の上に現はるべきものではない、例へば今日雨の降りまする如きにしても能く考へて見ると、雨は水氣が空氣の冷めたい氣に遭つて落ちて來ると斯う云ふのでありますが、それならば此空中の水氣が空の冷めたい空氣に遭つた時に何故に切れとなつて固つて落ちて來ないか何故にあのやうに小さい粒になつて落ちて來るか、あの間に又小さい粒があつて、殆ど霧の如く入亂れて居る、あれは何かと考へますと、あれは空中に在る其粒の一粒々々を水氣が捉めて其小さい一吋四方に四千萬もある塵と水氣とが取組合をして一つ一つになつて落ちて來るのである、それてありますから雨の一粒の中には所謂マイクローブと云ひます、其マイクローブが一千あるのも五千あるのも一萬あるのもありますが、兎に角雨の一粒々々が空中に在る塵を水氣が捉めて、丁度木の葉へ露の溜る如く捉まつて其重さて落ちて來る、斯う云ふやうに考へますると、それては此空中に在る所の塵の數はどれほどであるか、どうしても

數字の上に現はすことは出來ませぬ、のみならず吾々の心の中に還入ることが出來ない、モー一の後とへ零をどれほど付けて其零が地球を取卷く位付けてもどうしても數字に現はせないのでありますから、是は數字に現はせない數と斯うするより仕方がない、人間の拵らへた數字ですら其樣な不完全なものであります、それて天文學者が光線の走る速度などを計算しまするには、光線が一年走しつて達するのを一つの尺度にして居る、或星は五百年にして地球へ光が屆く、或星は三百年にして初めて光が地球へ屆くとか、其光の走る早さは大砲の彈が其筒口を離れた早さに何倍するか知れぬ、一秒時間に十五六萬哩も走ると云ふのでありますから吾々の數字ではとても現はすことは出來ない、此の如く吾々が無限として居る數字ですらも、實際の宇宙に在る分量の無限に對しては實に幼稚極まるものである、其違ひたるやどれほど甚しいか殆ど言葉に絕しまするので、何の考とてもそれであります、

吾々から考へまするど無限と云ふことが畧ぼ分るやうでありますが、併し實際の無限なるものに至つては吾々の想像よりどれほど澤山あるかも知れない、けれども不思議のことには此天然なるものはそれ丈の限ない數をば悉く夫々知つて居る、マア知つて居るか知つて居ないか知りませぬけれども、それ丈の或數それ丈の粒の小さいもの煙のやうな塵等が一つ一つ天然の事實となつて居る、此天然の事實であると云ふことは何かと云へば、是が即ち絕對の一つの有樣であると斯う云ふより外ないのであります、或はさうでない時のことから考へても矢張其通りで、吾々が時を考へるとどこまで昔のあつたものか、是からどこまで長いものかそれは分りませぬけれども、其限りなしとする吾々の思想よりも又更に限の無いものであると云ふことは吾々が限りなしとする其數よりもまだ限りなき數が宇宙の實際に籠つて居るのと同じである、それてありますから若し此絕對と云ふことをどう考へてよいかと斯う云ふ時になりまするど時と云ふ考とそれから所と云ふ考と數と云ふ考と吾々の斯樣な考に制限せられるものてはない、時をも超絕し所の廣さも超絕しそれから數の算へ方をも超絕したものと云ふより外ないのでございます、先づ此三つを超絕したものとして考へるとどう云ふことになるてあらうか、或は人間の生涯でも歷史上の事實でも、總て此時に支配されて出て來て居りますが、（先づ所或は數と云ふものは暫く措きまして）

此時と云ふこと丈を抜きにして考へて見ますると、人間の生涯は先づ五十年として、明治元年に生れた人は明治五十年には亡くなつて仕舞ふ、明治元年には赤ン坊であつて明治三十年には働き盛りて、明治五十年には最早老朽である、斯様になりますが、此者が生れた時にあつては時の思想の上から申しますれば、此赤ン坊は三十年になつて非常に働く者になる、今の所では母親の乳を飲んで何の役にも立たぬが、三十年先は非常に働く者になる、又三十年の時に考へると、是から後二十年経て五十年になればモー俺れは亡くなる、斯う考が分かれて來て、それで一年々々と過去つた前の事はモー消えたかの如く考へられる、吾々も諸君も或時は小さい子供でありましたけれども、今になつて考へて見ると子供たることはモー過去の事實である、或は又吾々も諸君も是から後にどのやうな大事業を爲すか或はどのやうな大困難に陷るかそれは少しも分つたことではありませぬけれども、それは未來の事實として未だ來ないのである、斯う分つて居りますけれども、是は吾々が時と云ふ流に從つて移つて行くから分るのであつて、若も時と云ふ考なくして之を云ふことになれば、吾々が子供である時は子供と云ふ一つの事實である、二十年である時は二十年と云ふ事實であつて、總て生涯が間斷なき繋りであつて見れば、此五十年の間のどこが誠であるかと云へば、是は云ふことは出來ない、人の立場から申しまするど、現在今自分が見て居ることが事實て、過去つたことは過去、未來は是から先出來るのであると云ふ考は出來ますけれども、併ながらさう未來現在も何も違つたことはない、現在が直ちに過去になつて仕舞ふ、其代り未來が直ちに現在になつて仕舞ふ、時と云ふものは吾々の思想には間斷なく流れるやうに感ぜられますが、何も過去未來現在と云ふ區別はあるものではない、總ての時が現在になつて過去になる、どうしても現在と云ふ時が世の中にあるものではない、又將來と云ふ其時が實際世の中にある筈がない、將來の時今の時と少しも區別はない、區別なしに續いていつて將來が今になつて仕舞ふ、今と云ふ言葉を云ひ切らぬ内に過去になつて仕舞ふ、私が此演壇に登つて來た時は事實でありますが、今考へるとズット初めてあつて今から私の次に或辯士の出まするのは將來の事實でありますが、それが僅かの間に今となつて仕舞つて、諸君が御歸りの時は既に先のことゝなつて仕舞ふ、其前の時と今の時とどう違ふ、若

し世の中に今現在で過去にならない時があればそれは非常に不思議な時でありますが、此時でも直ちに後の時になつて仕舞ふとすれば、過去の時と未來の時と現在の時と何も違つたことはない、若し是が違つたことがないと致しますれば、どうも私は今此所で此樣な事をして居ても後良い事をするからと云ふさう云ふ考も誠に空漠のものである、なぜならば人間の生涯五十年と致しますれば恰も此五十年と云ふものは歷史を書くべき白紙の如き物である、詰り此五十ページの白紙を吾々は與へられて居る、其最初のページへ何を書くかと云ふと先づ子供の極くいたづらの時の有樣を書付ける、次のページは何を書くかと云ふと又違つた事を書いて段々違つた事を一年二年と書いて來るのでありますから、前のページに書いた事柄も事實に違ひない後のページに書いたのも事實に違ひない、さうして見ますれば人生と云ふ一つの歷史が出來上つた上で之を見れば、初めのページは實に馬鹿氣た事ばかりである、それから中年になつて三十年時代のページが然らば果して立派かと云ふと幾らか立派でありますけれども、大して立派のものではない、さうして其一ページ一ページがトウ〳〵五十ページの終まで行つて餘りどうも好い歷史が出來なかつたと斯うした時には、此詰らない歷史はどうして之を訂正することが出來るか、どうも時と云ふものは今云ふた如く流れ流れて行くやうに吾々に感ぜられますからどうも是は訂正する時がない、能く宗教などでは懺悔て罪が滅びると斯う申します、どう云ふことをしても眞に後悔すれば罪が滅びて仕舞ふのだと斯う申しますが、それではまだ絶對の思想が足りないので、成るほど宗教として人を説くには一度罪を犯したら幾ら後悔しても其事實は滅びないと斯う一言に說くことは出來ませぬが、併し有體に考へる時は、吾々が十八歲と云ふ血氣盛んの頃は隨分女狂ひをしたと云ふことが一つ書付けてある、それから其次には親の脛を噛つて非常に失策したと云ふことが書付けてある、其次のページには家を勘當されたと書いてある、其次には友人に不義理をしたなどと云ふ事柄が書付けてある、段々進んで行つた所で、此者は其後大に後悔して非常な善人になつて大變世の中の爲をした、斯う云ふ事柄が續々ページの上に現はれて來たと致しました所が、詰り善人になつたと云ふのは三十年になつて善人になつたか四十年になつて善人になつたか知れませぬけれども、善人になつたと云ふのは其四

十年目に刻付けた文字であつて惰け者であつたとか不義理をしたとか云ふことが前のページにあるから、どうも後のページで前のページを消すことは出來ない、詰り前のページに一を書いてある、是は十と云ふ字に書直さなければならぬとして縦に棒を引きますと離れて仕舞つて、一の字があつて縦に棒があるとしかならぬ。

是は常に吾々が時と云ふ考に妨げられて居るからそこらの關係であるから分りませぬけれども、若し時と云ふ其限ある考を撤却して仕舞つて本當の絶對の上に於て考へまするると、或は物が消滅訂正することが出來る、さう云ふ筈のものでない、絶對は詰り時間とても殆んど空間と同じやうなものでございまして、例へば一つの山がありますと爰は麓である爰は頂上である爰は又麓である、詰り麓と嶺と向ふの麓が是丈の場所を充たして居る、それと同して吾々の生涯も年の或長さを占めて居る、爰が子供で爰が盛りで爰は老人であると云ふのと同して、決して此山は嶺があるから他に低い所はないと云ふことは出來ない、嶺は爰にある谷は爰にある、谷のある所と嶺のある所と場所が違つて居ると云ふに止つて居つて、空間の考なしに一つの山として絶對の上から見まする時は、此山は高い所もあり低い所もあると云ふのが當然であつて、人間の生涯でも絶對の上に立つて見る時は此男には善い所もあり惡るい所もある、過去の何處は善い、現在はどう後の何處はどうであると云ふことはチャンと區別が付きまするので、過去が現在を償つて居るのでも將來が現在を償ふのでもない、モー既に五十ページを書いて仕舞つた以上は奈何とも仕様がない、吾々の與へられた時と云ふ白紙が無くなつて仕舞ふのでありますからして、また如何とも仕様がない、先づ此時と云ふ考を除いて云ふと斯様なものでございます、

此考からして吾々はどのやうな眞理を得るであらうかと斯う思ひまするると、此時と云ふことが斯様な工合に互に相償ふものでないと同じく、吾々の所と云ふ考も亦少しく違つて參ります、先づ此時と云ふことが吾々が實驗し得る範圍に於きましては、何んでも今である、吾々が直接に感ずる時は今と云ふ時よりは何もない、昨日と云ふ時はありましたけれども、それは昨日直接に感じて居たので、今昨日と云ふ時を感じやうとしても感じやうがない、或は明日と云ふ時を今感じやうとしても感じやうがないのでありますから、時と云

ふものは自分に感ずる時は何時も今であると云ふのが一の眞理であると同じく、又どのやうな長い年月でも其時になつて見れば今のやうな考を爲すが當り前で、神武天皇の即位の時を今から考へると、紀元二千六百年前に於ての其時を見たら、其時の時も矢張今の時である、是より十万年先になつても、其十万年先に記付ける時の事實はどのやうな事か知れませぬけれども其時は矢張今である、それと同じく所と云ふことでございましても私の立つて居る所と諸君の立つて居る所とは異なるのみならず、更に遠くなれば、亞米利加と此處との違ひは非常な差であります、又英吉利との差は非常なことでありまするけれども、併し所と云ふことが人間に感ずる其感じは何かと云ふと、此處と云ふより外はない、私が今此處と云ふて居る間に此地球は限無く飛んで居るから現に此處と云ふことは絶對の上から云ふと大變違つて居る、先刻私が云つたのと今云ふのと何万里隔つて居るか知れぬ、けれども絶對に此處と云へば今の此處より外はない、是から横丁へ行くと非常に淋しい所があると云ふと其處が此處と云ふ感じを爲す、だから人間の感じに付て所の違ひは此處と云ふ感じより何も持來さない、時は即ち總て人間に對して今と云ふ感じを爲さしめ、所は總て人間に對して此處と云ふ感を爲さしむる、と斯う考へました時は、此時の大切なのはどこが一番大切であるかと云ひますれば詰り同じのべつの時でありますから吾々が今捉へて居る其時が一番大切である、又所に於てどこが一番大切かと云ふと吾々が今居る其所が一番大切である、其以外の所は如何に捉へたくも仕方ない、兎に角自分が現在立つて居る所が自分の支配して居る所でありますからそれより大切の所はない、又時でも吾々は後に大なる仕事を爲す積りだと云つても、併ながら直ぐ今になるのでありますから其時を大事にするより外はない、

先づ宇宙に存する所の時はどれほど長くもあれ又此宇宙の廣さはどれほど廣くもあれ、何も廣い狹いの區別は吾々に感ずることもなし、又時の長短も吾々に感じない、吾々は唯是今此處と云ふことを本據として、是で總ての物が這入ると云ふ所に考付きますれば、それで絶對の考が自ら分るだらうと思ひます、が吾々が今まで神などと云ふ或絶對の全部又は一部分を表した思想を考へて見ますると云ふと、時或は所と云ふ其不十分の考に支配されて居りまして大變吾々と隔りの遠

いと云ふやうな感じが出來て參ります、私は天人論にもチヨット書いて置きましたが、人の思想と云ふ者は決して滅びるものでない、詰り人が一つの事を考へるには其考へる丈頭の中に極めて小さい分子がある、其分子が行き方をするのであるからして、其分子が動けば分子の隣りにある所の或ものが動く、詰り科學的に云へばイーザーでございませうが吾々の腦髓の一分子が動く爲にイーザーが他に次から次へ段々動いて行く有樣が、丁度池の中へ一個の石を投込めば其石の落ちた所の水が動くと共に其響が傳つて環が段々擴がると同じやうに、人の考が段々輪を成して擴つて行きつゝある、でありますから、今より何千年前に釋迦如來が考へたことでも基督の考へたことでも孔子の考へたことでも今に到つて泯して居ない、泯して居ないのみならず年一年と波及して行くので、輪が擴くなつて宇宙のどれほど廣い所に傳はりつゝあるか知れぬが、兎に角彼の考は大いなる池の輪となつて傳りつゝ居ると云ふことは事實であります、さうして其輪が何所までも達するかと云ふと、此達する所は限り無い端まで達して行くのであります、是は勿論學者の說く事實でありますが、斯う申しますると何んだか宇宙のズツト遠い所に神樣でもあつて、其神樣が釋迦の考でも基督の考でも誰の考でも遠い所で見て御座るかの如く感ずるのでございますけれども、それに對しての斷定を私はモー一つ加へて云つて置くことがあります、それはホンの中へ挾んで置きたいと思ひますが、此に音響學と云ふものがございます、音響學とは此人間の音覺の響きが何の響と何の響と能く調和するとかと云ふやうなことであります、其音響學者のやることで金の鐃の上へ砂を載せまして胡弓を彈く馬の毛を以て鐃の緣を擦る、勿論是で空氣に振動を與へるのでありますから或音が出ますが、詰り馬の毛で擦る其響きの爲に平らの鐃の上に置いてある砂が散る其砂の散り方が非常に不思議である、唯動かして散るのと違ひまして砂の一粒々々が總て規則を以て他の或位置に或は渦旋になるのもあり種々樣々に奇麗な模樣になるのであります、それでありますからして此聲と云ふものは吾々が耳に聞くより外に仕方のないものであると斯う思つて居ると、豈圖らんや今日の音響學から云ふと、聲を耳で聽かずして目で見る如くしてある、此聲は砂が此樣になつたから何の聲であると云ふて目で聲を見ることが出來るやうになつて居る、此考をば今の基督の考でも誰

の考ても空氣に波動して居ると云ふ所に當篏めて考へますると、此世の中の爲に種々樣々の美しい事を考へて居る所の、或は人の爲に身を犧牲にするとか云ふやうに非常なエライ事を考へて居る所の思想はどのやうな波動を及ぼして居るか、又誠に汚ない事ばかり考へて居る所の汚ない思想が此宇宙のイーザーにどのやうな波動を起して居るか、それは未だに分りませぬが、若も此遠い所に絶對の神があつてそれを見た時は、丁度吾々が鏡の上に散る所の砂の模樣を見た如く是は美しい聲である、是は誠に破鉦の如き聲であると云ふ區別が付くと同じく、其空氣の波動の仕方に依つて、是は實に美しい心から出て來た、是は慾張つた金の欲しいと云ふ心から來た醜い波動であると區別が付くに違ひない、若し基督が十字架にかゝつて神は吾れを見捨てたかと叫んだ其時の心は若し是が事實とすれば、人間の歷史上に於けるモー極度でございますが、其極度は定めて大いなる波動を此宇宙に及ぼしたに違ひない、或は釋迦が難業苦業をして居る間の種々樣々の心の波動と云ふものは吾々俗人の心から認めることの出來ないやうな非常に奇妙な波動が宇宙に及んで居たに違ひありませぬ、

處て更に吾々の云ふ絶對論に立返つて考へますると、成るほど吾々の心は宇宙の端の端までも及んで行く、さうして見るとナカナカ此心の中の秘密に於てすら決して絶對的に秘密のものでない、惡るい事を考へても人は知るまいが何物にか恥かしいと云ふ考は誰にも起らなければならぬ、實に自分の心の中で企む惡企みは宇宙のどこまで及んで行くかと云ふことは人は知りませぬが、何物が知るか知れぬ、すると、自分の心を制禦するにすら人は責任の重きを考へなければならぬと斯うなります、併しまだそれは絶對の考には遠いのである、若此絶對の考を以て時の區別を無いものとし、それから所の區別を無いものとして、時は總て數年後ても今である、千里の所でも此處であるとしますると、何も吾々の心の考は遠く宇宙の外にまて及ぼして行くには及ばない、今吾々が考へたと云ふ其事實は宇宙の外の萬里先てあると同じに此處が之を知るのである、或は或人に依りまするど、名を竹帛に垂るなどゝ云つて千歲先までを樂んで居りますが、自分の名が千歲の後まて傳つて行つて、千歲後の人にまて批評されたりするには及ばぬ、現在目の前に在る人とても後の人も同じてあるから、今の人に直ちに批評され直ち

に判斷されるのである、或は今の人は知らないにしても、自分の心の中に或は善い考が起つたとか惡るい考が起つたとか云ふ、其事實は誰が知らないにしても、それは絕對が知つて居る、丁度谷の底に落ちた兵士の行衛は誰も知らないが、是は絕對に知れないではない、絕對は之を知つて居ると同じて、自分の心中にある一つの考でも絕對其ものは之を知つて居るのである、と斯う考へる時は人間はどのやうな場合に於ても決して獨りと云ふことはない、成るほど人と人との關係を云ふと一人でありますけれども、人と絕對との關係を云ひますると、どのやうな場合でも人間は絕對と離れて居ることはありませぬから、獨立などゝ云ふ考は非常な間違である、又時から云ふても、今は惰けて居るが後大に奮發するからよいと云ふは非常に間違つた考で、又惰けるは今の事實、後の事實と今の事實と其事實の上に於て絕對の上から何も相違ありませぬからして、決して後からするから今どうでもよいとか云ふ考になつてはならぬ、

斯う考へると形容詞の如く思はれますけれど之を一つの名詞として考へた時は、此絕對と云ふものは事實よりも尙ほ確かな事實であつて、吾々はどうしても之を尊敬しなければならぬ、モー吾々が與へられて居る時間と云ふものは僅かに五十年である、此五十年が無くなつた以上はどうにもすることは出來ないのである、此五十年の絕對に包まれて居る間は、總て吾々は絕對の懷ろにあるのである、昔から神と云ふ思想の極くの元は此絕對にあるのであります、孔子が天と云ふのは何んてある、天とは決して遠い所の天ではない、遠い所も此處も同じであつて、彼所が天であれば自分の身體のある此處も天である、自分の心中も天である、決して天より人間は離れて居ないのであるから、孔子の趣意に隨つて天を敬すると云つても詰り此處を敬するので、時間から云へば今を敬するので、或は佛敎の方で或一派の云ふ彌陀如來とか佛けは何んてあるかと云へば所謂此絕對たるに外ならぬ、佛敎の方から云へば人は絕對に包まれて居て、所謂彌陀の懷ろに居て、腦髓に分るやうに說明することは出來ないことであります、故に古來の人は種々樣々の言葉を以て現はさうとして居る、之を絕對と云ひましたり或は乾坤或はインフイニチーと云ひましたり又天と云ひ神と云ひ種々

様々の言葉を付けるのでありますが、奈何せん其言葉たるや吾々の有限なる考から出るのでありますから、其無限の大いなる絶對を意味することがどうしても出來ない、それが爲に神と云ふ思想は誠に人の頭に入り難いのでありまする、併ながら神と云ふものは何んであるか、何んであるか知らない、けれども兎に角絶對無限吾々の知らないアブソリユートである、吾々は知らないけれども彼は知る、左樣なものであると斯う致しまするとに實に私は絶對の中にあるのでありまするから、其考の爲に隨分艱難の場合にも慰藉を得ることが出來る、失望した場合にも奬勵を得ることが出來る、或は又自分一人でどうも人が何んとも云ふて吳れないのは殘念だと云ふ場合にも大變に張合になるのであります、孔子の言に人不知而不慍不亦君子乎と斯うあります、若し絶對と云ふものが本當の神であつて、吾々は其神の中に包まれて居ると考へる時は自分が善事を爲す以上は他人が知らうが知るまいが、そんなことは極く些細のことで、善を爲しても惡を爲しても五十年の中の五十ページのどこかへ持つて行つて善を爲した惡を爲したと云ふ事實が千萬年滅びない事實でありますから、實に是ほど怖いことはない、絶對の上から申しますると事實には古き新しきはない、一樣に事實は事實でありますから、神の感念と云ふことをこゝへ置いたならば旅順口が幾ら堅いと云ふても此感念ほど堅固の感念はない此感念は本當に難攻不落であつて、今よりどの位學術が進んでもどうしても變らないのでありますから、若し世の中に拒否す可らざる神があるかと申しまするど、拒否す可らざる神は此絶對の思想であると是丈のことを諸君の前に叫びまして此壇を下ります。

近時の言論界

久津見蕨村

（一）

近時の言論界に於て、特に奇異に感ぜらるゝもの二三之あるを見る。而して余は其何にが故に爾かく狹量偏僻なるやを疑ふものなり。

問題は非戰論と戰死論と非擧國一致論となり。是等の問題に關して國民は必ず團子の粒の如く、皆悉く同じならざる可らずと云ふの理由果して何れにかある。國内五千萬の人民一として同じ容貌なるはなし。其

亦決して一にあらず。戰爭を好まざるものある可く戰死を非常に有難がるものもある可く、戰爭の如き如何にても可なりと爲すものもある可し。誠に其個人性を觀別し來らば、惟ふに五千萬人は五千萬色ならん。而かも之を强ひて悉く主戰論者とし、名譽戰死論者たらしめずんば已まざらんとし、若し然らざる時は亂臣なり賊子なりと爲さんとするは、人の個性を沒却し、異端を害なりとして悉く壓伏し終らんとする暴政的思想なり。戰爭の熱に浮されて冷靜の判斷力と廣濶の雅量とを失ひ、狹量偏僻に陷れる徒なり。

如何なる時にも寬容の精神は大國民の有せざる可らざる所、如何に强敵と戰ひ大國と爭ふ時と云ふと雖、決して之を忘る可らず。況んや論者等は常に敵國を罵りて必ずや其我に勝つ能はず、其國內亦動亂の兆ありて亡國に瀕すと云ひつゝあるをや。何ぞ我國內に二三の異を唱へ殊を立つるものあるを神系に罹るを要せんや。

（二）

余は世界人生を以て總て是れ戰鬪を見るものなり。ニイチエがザラトストラに王をして問はしめたるが如く、『吾人は新戰の方法としての平和を愛す可し。其長きよりも却て短きを愛すべしと說くものに聽かざる可らず』と云ふを以て肯綮に當れりとする徒なり。故に非戰論を唱ふる人を見るや其見識の迂を笑へり、而かも一方より觀察すれば、人はパスカルの云へるが如く『撞着の怪物なり』。一面に於ては日夜同性異類と戰ひて其肉に飽き其血に渴しながら、他面に於ては平和圓滿の烏有鄕を空想に描きて、之を現實にせんことを欲望せり。而かも如何なる世にも斯かる平和圓滿の烏有鄕を實現したることなし。億萬歲の後は知らず今古幾千年泰平を唱へたる世ありきと雖、然れども人の手の鳥獸の血に汚れざる時なく、又同性をして決して首足所を異にせしめざりし時なし。而して亦未だ曾て新戰の準備を撤したることあらざるを見る。故に夫の平和圓滿は唯夫れ人間の慾望のみ。到底現實たる可らざる慾望のみ。而かも此慾望に懸戀して終生平和圓滿の夢を見るもの、亦古今に珍しからず。今の非戰論者と云ふは之を分類すれは必ずしも一動機に生せざるべきも、其純粹なるものは即ち此類の人なり。平和圓滿の空想家なり。烏有鄕の夢を見つゝある徒なり。トルストイ翁の如きは其領袖の一人なるべし。

然れども此慾望は人間の如何なる方面を表せるもの

なるべき乎。禽獸的方面を現せるものにあらざるや論を俟たざる可し。果然是れ之と異なれる方面を表せるものにあらざらんや。世に神なるものあり、神は平和圓滿なるものなりとせば、夫の慾望は即ち人間の神性的方面を現せるものにあらざるなき乎。一方に獸性的方面、他方に神性的方面あり、此二つの方面の不規則なる混成即ち人と名付くべき動物なりとせば、夫の慾望を以て非戰論を唱ふるの徒は、殊勝にも神に接近せんことを欲して其神性的方面のみを發揮せる人なり。今日の如く擧世獸性的方面の發達に偏せる時にありては、誠に尊貴珍重すべきものにあらずや、斯かる貴品珍物は二三國内に存ずるあるも亦國家の光榮にあらざるなき乎、現にトルストイ翁は露國の貴品珍物にして慥に其光榮の一に算せらるゝにあらずや。我國に此類の論者を見ば亦是れ我國の貴品珍物にあらずと云ふことなし。何ぞや之を神系に羅けて亂臣賊子視することを要せん。大國民と自稱するものは須らく之を寛容す可し。

（三）

或は非戰論の蔓延を恐ると云ふ乎。是れ眞に杞憂なり。人間は爾かく獸性的方面と神性的方面との混成なりと雖、其混成や甚だ不規則なり。而して一般の人間文明と野蠻とを問はず、今の人と云ふは獸性的方面のみ發達して、僅かに之を塗飾するに神性的方面を以てするもの、而かも其塗飾は甚だ薄く動もすれば剝落し去るを常とす。故に平和圓滿を云ふ一般に於ては虛僞のみ。夫の珍物にありては即ち夢のみ。世界人類の實際は或は人道、或は正義、或は仁、或は愛、種々體裁を修飾する言語を用ひて而して自他一般を欺き、以て個人は唯己の利、國家は又國家の利の爲に力を以て相爭ふなり。唯其或るものは或るものよりは人道仁義の理想に比較的近似せるを見る耳。今回の戰役と雖、露國は露國にて自から設けたる名聞あるべきも、我國の主張の夫れよりも遙かに道理に適へるあるなり。而かも其道理や利權の思想を中心とす。利權とは唯國家の利權なり。個人の利益、絕對の理想とは同じからず。

擧世斯の如く戰性的方面の發達を見る。此時にありて二三の珍品トルストイ翁の如きあるも、未だ實生活の辛酸を解せず、空想の夢に日を送るの青年は知らず一般の世界人類は必ずしも化せられて非戰論者となる可らず。天下に戰雲の起るなきを得るが如きは、百年河清を俟つと一般、到底期待せらるべきにあらず。二

三の非戰論者ある何ぞ今日の妨ならんや。乃ち寧ろ彼等の國家の珍品として存することを稱揚して可なり。

（四）

今日軍人の潔く戰場に倒る。之を義務の爲めと云ふか、抑も亦名譽の爲めに死せざる可らざるか。個々に就て其動機を尋ね行かば、各自必ずしも一ならざるべきを知る。或は家鄕に妻子あり老父母あり。而して一人の之を養ふものなし。一身を顧みれば萬里懸軍、退きて家鄕を問ふ能はず。區々憂思に進退の度を失すれば忽ちに上官の譴責を受く。遙かに故國を想へば一家餓死に瀕したらん。玆に想到して絶望し寧ろ進んで敵砲の食餌となり、以て所謂忠君愛國の爲にせんとするの狂勇必ずしも絶無にあらざるべき乎。日本帝國の軍人は斯の如きもの一人もなしと云ふは當座の高言、事實は別に軍人胸中の悲慘を語るものある可し。

余をして忌憚なく云はしむれば、義務の爲に死すべしと云ひ、名譽の爲めに死せざる可らずと云ふ、迂愚なる言語の爭ひ也。人生長く生きたりとて七十年をすら古來稀れなりとするにあらずや。近來は亦老人の威張る世の中となりたらんが如くなれば、假に七十歳を人間の定命とせん乎。一歳にして死せば六十九年の損毛なり。二十三四歳にして戰死する四十六七年の損毛なり。而かも世界の長き年齡に比す。斯の如きは誠に瞬間のみ。算するに足る所にあらず。況んや七十歳滿足に生きたりとて、一生戰鬪の世なり。同性異類の血に渇し肉に飽かざるを得ざる生存競爭の激甚なる世なり。七十年間漸々然として這般の戰鬪に疲倦せんよりも、一擧に修羅の戰鬪を試み、勝たば即ち勳章年金、死すれば即ち名譽の戰死、何れにしても己れを顯はす所以たることを期す。亦甚だ妙ならずや。況んや軍人となる、既に銃砲の食餌たることを豫定したるをや。玆に覺悟する所ありて奮然として戰ふ。即ち一六勝負を試むるなり。這般の覺悟、這般の奮戰、這般の戰死今惟ふに果して之なからずや。

余は新聞紙に依りて屢ば出征軍人か家鄕に遺せる壯烈の言なるものを見たり。而して其多くは——幾んど總ては義務の爲めにとも名譽の爲めにとも語らずして『金鵄勳章然らずんば戰死』を說き、更に又報ひらるゝ所なき『犬死』を恐れ、己れの顯はれて死せんを希ひ、功の隱れて賞せらるゝことなきを憂ふるの意瞭然たり。

國民の義務の爲に死するものならば、義務だに全う

せは足るべく、軍隊の名譽の爲に死するものならば其名譽だに揚らば足るべく、己れの顯はるゝと否と報ひらるゝと然らざるとは問はざるべき筈なるに、事實は方に斯の如し。余は忌憚なく斷言す、人は大切の生命を己れの爲めに犧牲とする不思議の動物なりと。更に亦斷言す、義務の爲に死せと說き、否な名譽の爲めに死せざる可らずと語り、一を腐儒と罵り他を好將軍の言となすは共に當らず。同じく是れ言語上のみの爭ひにして事實――人心の機微には觸れざるの迂論なりと蓋し軍人も尙ほ論功行賞に不平なきを得ず、戰死者を賞し、其遺族に報ゆるの厚薄に因て、士氣の如何に關すと云ふことを記す可し。是れ人心の機微其ある所を明に語る所以ならずや。

（五）

擧國一致と云ふ、其名誠に美なり。雷同附和と云ふ決して美なる名にあらず。今日旣に誠に確定せりと聞へたる學問上の眞理すら、往々にして誤謬なることを發見するあり。絕對完全――天下一人の異存をも容るゝことを許さすと云ふの道理は世界狹からずと雖、天上地下は知らず地上に於ては決して之ある可らず。況んや政治上國際上の事態をや。政府の爲す所は必ずしも絕對完全にあらず國民の輿論亦然り。征露の擧は今日にては條理明かに利害亦容易に知るを得べしと雖、而かも別に最好の方法ありしやも知る可らず。又今現に他に執るべきの手段あるやも測る可らず。絕對完全の良擧とは云ふ可らずして、唯誠に時勢に鑑て已むことを得ざるの擧なりと云ふの外なけん。隨て自から玆に別個の意見の成立せられ得べき餘地を有す可し。

旣に其餘地あり。別個の意見を立てゝ、主戰論者の爲す所を見、或は其輕擧に失するを戒め、或は情勢に驅らるゝを警しむ。却て甚た佳ならずや。馬を御する騎手は一人なりと雖、進むるの用たる拍車と止むるの用たる制勒とを要し、而して走る時と雖、制勒を廢せざるにあらずや。況んや多くの人民を盛る國家なり、悉くをして悉く一方向にあらしむる蓋し不可能事なるべきをや。擧國一致の美名に戻るの故を以て異論者を亂臣賊子視するは這個の消息に通せざる褊狹漢なり。然らずんば戰熱に罹りて胸中の雅量を燒盡したる病者なり。

病者は其疾病を治療せよ、褊狹漢は其胸懷を廣くせよ。非擧國一致論ありとも國家の中心に立つもの、命脉たるものだに此巳むことを得ざるの擧に全力を傾

け、永久の耐忍を以て戰ふの決心あらば、軍國の事は進捗すべきなり。余は戰前に於ては自から別の意見ありき。今日にては吾人の爲にも戰爭に勝たんことを欲するものなりと雖、非戰論あり非擧國一致論あるを怒りて之を亂臣賊子視し、甚だしきは露探てふ奇異の名を命せんとする褊狹漢と病者とを笑はずんばあらず。大國民を以て居る日本帝國の人民は今少しく雅量濶懷を養ふことを要す可し。

本誌は武士道に關する諸大家の高見を叩き聊か思想外に貢献するところあらんことを期す

△時局より見たる武士道　井上哲次郎氏
△武士道と今度の敎育　戸水寛人氏
△武士道に就いて　渡邊子爵
△武士道の懷古　根本通明氏
△武士道は基督敎に酷似す　本多庸一氏

等は既に掲載せり、次號に於ては綱島梁川氏の卓見を紹介すべし

海外新潮

海外大勢

朝鮮の國情と將來の運命

「スタンダード」

一國の形勢狀態を詳かにせずして、濫りにこれが管理統御の道を講ずるも、遂に空論虛談として了らざるもの稀なり、此文よく朝鮮の國情を明かにし、延いて將來の運命をトし、實際的の議論として大いに見るべきものあり、依て玆に譯出して讀者諸彥の參考に供す。（記者）

地上何れの國と雖も朝鮮の如く天與の惠福を受け、而かも人間の手を以てこれが改善進步を計らざるものあるなし、朝鮮が將來自ら起て自國の經營に從事すべきか、又は極東の開拓者日本人の手に其管理を委ぬべきか、これ未決の問題なり、されど今日と雖も日本人は巳に朝鮮國內に入りて其管理に當らんとするの意向あるは最も明白なる事實なり、少し

く繁華なる都市の街衢に至り、悪臭を放つ泥路を横ぎりて大通りに出てんとする善良の場所は殆んど皆渡韓せし日本商人の占むる所となり、日本の店舗は漸々朝鮮のそれを驅逐しつゝあるを見るべし、又都市に入りて宿泊を求めんとすれば、吾人の不便を感ぜざる如き旅館は皆日本人の有する茶屋にして、其主人なるものは彼地に永住せんとする渡韓者なり、吾人は此茶屋に於て初めて愉快、清潔、良食、及び給侍人等を見出すべく、汚穢なる朝鮮國内に於ては恰かも砂漠中のオアシスに著したるの感あるなり、日本人が徐々として而かも着々として國内の經營を初め、以て朝鮮の商業及び貿易の權を奪ふが如き觀あるは素より彼等朝鮮人の喜ばざる所なりと雖も、彼等の遲鈍なる只其現狀を悲觀するに止り、己れの國力及び神學を信ずるの念慮は未だ一毫も減ぜざるなり、かるが故に彼等は已れの、無智に就て悟る處なく、又將來の運命に就て憂ふる所なし、努力奮鬪國勢の挽回に勤めんとするが如き未だ彼等の腦中に見出すべからざるなり、彼等はかゝる氣樂なる精神にて生活しつゝあり、他國より來りて此形勢を瞥見するものには彼等が如何にして生存しつゝあるやを悟ること殆んど不可能の事なり、人民の多數は全く職業を有せず、終日市街を遊歩し、又は其泥舍に坐臥するなり、予はかゝる方法を以て如何にして生活し得べきかを疑ひ、十五年間朝鮮に居住し、よく國情を明かにしたる米國宣教師に其理由を尋ねたるに彼亦之に就て滿足なる解決をなすことを得ずといひ、是れ恐らく土地の豐饒なること無比にして極めて僅少なる勞働を以て多大なる收穫を得るが故なるべしと答へぬ、此解決にして正確なりとすれば朝鮮人をして饑餓の危險を免れ、且つ世界に於ける最も強壯にして顏色よき人種たらしむるは全く土地の豐饒なるによらずんばあらず。

又朝鮮は極めて灌漑に便なる國にして、多くの大河は最も耕作に適する沃野を生じ、此懶惰にして逸樂なる人民は勞せずして巨大なる收穫を得るの天惠あり、米、豆、燕麥、甘藷、桃、杏、及び其他の果實蔬菜の栽培實に其土地に適し、野に出づれば人夫が此等の栽植に從事するを見るべし、朝鮮の勞働者は其態度實に緩慢にして一定の時間内に歐洲のそれの四分の一位の仕事をなし得るに過ぎず、されど此人夫等は多少の勞働をなすを以て猶其上層社會よりは幸福なるべし、何となれば上流社會の人々に至りては全く何の仕事もなく、目的もなく市街を逍遙し、人夫の耕作したるものによりて其生存を續けつゝあり、又朝鮮に於ては此農作物の豐富なるに加へて鑛山事業の隆盛となるべき機運に向ひたり、朝鮮北部に於て二つの金礦採掘せられ、一は英人、他は米人の支配の下に其事業を經續せり、又石炭礦も發見せられ多額の產出を見ると雖も其質柔かにして未だ善良なる者を產出せず、此柔かき石炭は採掘後船舶に積まれ、直ちに鎭南浦に送られ、佛人の管理の下にある工場に於て多少の製煉を加へらる　此事業は僅かに八箇月前に著手せられたるも、着々として其効果を收め、益々隆盛にならんとするの兆あり、要するに朝鮮の鑛業は今漸く其產聲を擧げたるに過ぎずして今後之に藉すに時と資本と、適當なる管理を以てすれば其未來の發達甚だ大なるものあるべきは論を待たざる所なり、然れども朝鮮人にして今日の如き態度を一變するにあらざれば、漸次國の一隅に追はれ、一層强固にして敢爲なる國民によりて其事業を占有せらるゝに至るべきなり。

今支那、日本、朝鮮の三國民を比較するに生理上に於ては朝鮮人最も優等の地位にあり、其丈けは高くして、肉附きよく、又概れ美貌を供ふ彼の周圍は不潔にして非常に汚穢なるも人其者は頗る美麗なり、彼等は若し之をなすことを得ば清潔なる住宅を建つることを知らざるにあらず、されど少しく富有なるの模樣あれば官吏又は收稅者など來りて商人

を脅かし、公債の形となして其金を借り受け、決して之を返濟することなし、かるが故に朝鮮人は富有なることを示すが如きことは決してなすことを得ず、從て企業心も薄らぎ、富者も貧者も共に泥舍に住み狹巷に居り、汚き井の濁れる水を飲用するなり、これ皆漢城政府の施政其宜しきを得ざるの罪なり、朝鮮人は皆平和を好みて戰爭を忌避す、國人の性情固より然るにはあらざりしも長き年月の壓制政治は全く爭を好まざる人民と變化せしめたり、古に遡ればよく日本と支那との間に介立して獨立を保ちたることなきにあらざりしなり、若し訓練宜しきを得、教育正しかりし時は確かに他國民に劣らざる軍隊を有したるべきも奈何せん、今日迄の管理全く其法を誤り、遂に現今の如き狀態に至りたるなり、又朝鮮には其國勢に就て憂慮する人物も全くなきには非ず、中流社會には現狀に不平を抱き、多少の改革を計りしものありしも大に勢力を振うに至らず、現今に至りては商業者間に日本人が彼等の權利を侵害するもの多きを慨し、大いに之を排斥せんと企つるものあり、此日本人排斥の感情は殆んど朝鮮全國に漲れる如き觀あるなり、又基督教の傳播は世界に比なき程速かにして、其改宗者の多數なる、宣教師の不足、教會堂の狹隘を告ぐること甚しく、今後益々强大なる勢力を得べきに至るや必せり。

ヘラルド紙所載



"Come on to the peace congress, boys!"

平和の主唱者武装して立てり

今此基督教の朝鮮人に及ぼせる影響を記せんに、彼等が此宗教を知るに至りしより、清潔を尊ぶべきこと又は自己の人格を認識すべきこと等を悟るに至り、多くの困難を排して此新信仰に隨喜するもの益々增加せり、彼等は玆に於て始めて眼を開いて自國の歷史を省み眞正なる一國の幸福は自力によりて生存經營するの外なきを覺悟するに至るべきなり。

然れども今後日本人が朝鮮に入りて自ら其管理に當らんとするの野心あることは掩ふべからざるの事實なり、只不幸にして日本移住民の性情彼等朝鮮人に喜ばれず、常に嫌惡の念を以て迎へられつゝあるは注意すべしとなす、殆んど總ての開拓者が然りし如く日本人も、朝鮮に入りて自國の風に從て生活せんとし、絕えて朝鮮の國情を察し、其民風と調和するの方途を考へず、或は妾を蓄へ或は土人と取引をなすに不正なる等兎角彼等の歡心を失ふが如き擧動をなすなり、かゝる國情と不調和なる行動は日本人の先天的剛慢なる氣風と相待て益々朝鮮人の意向を失ひつゝあり、現今日本政治家の最も憂慮する所は朝鮮の將來に關する管理如何にあることは疑ふべからざる事實なり、此問題に關する意見は種々に分るゝが如きも多數人の意見は日本

は過去に於けるが如く朝鮮をして自ら其管理に當らしめ、只軍事上、又は外交上に於て多少の干渉をなし、又日本商人の特殊の利益を保護するの外、內治には全く無關係なるべしといふにあるが如し、若し斯の如くなりとすれば朝鮮の形勢は其腐敗政府の下にあつて日に益々あしく、遂に日本人を歡迎し、世界も又之に反對の理由を呈出する能はざる中に朝鮮は日本の支配する所となるべきなり。

又日本政府が執るべき他の方針は朝鮮政府をして絕對に服從せしむるにあり、日本は適當なる支配者を指名して、之が管理に當らしめ、朝鮮人にも自國と同等なる權利を與へ、商業又は其他の職業に關しても同等なる保護を與ふべし、而して斯くの如くするも朝鮮人が漸々國の一隅に退けられ、日本人が大いに其權力を振ふことあらば之れ朝鮮人が到底日本人と兩立して生存する資格なきことを示したるものにして、日本人は之によつて世界の誹謗を免るゝの口實を得べきなり、朝鮮人がかゝる境遇に至ることなく、自國の體面を保たんと欲すれば、今日に於て當然覺悟する所あり、以て自ら管理するの决心なかるべからず、然らずんば彼等の將來は遂に亞米利加に於ける赤人の運命に等しかるべきなり。

和の望なきにあらず

「ニューカッスル」

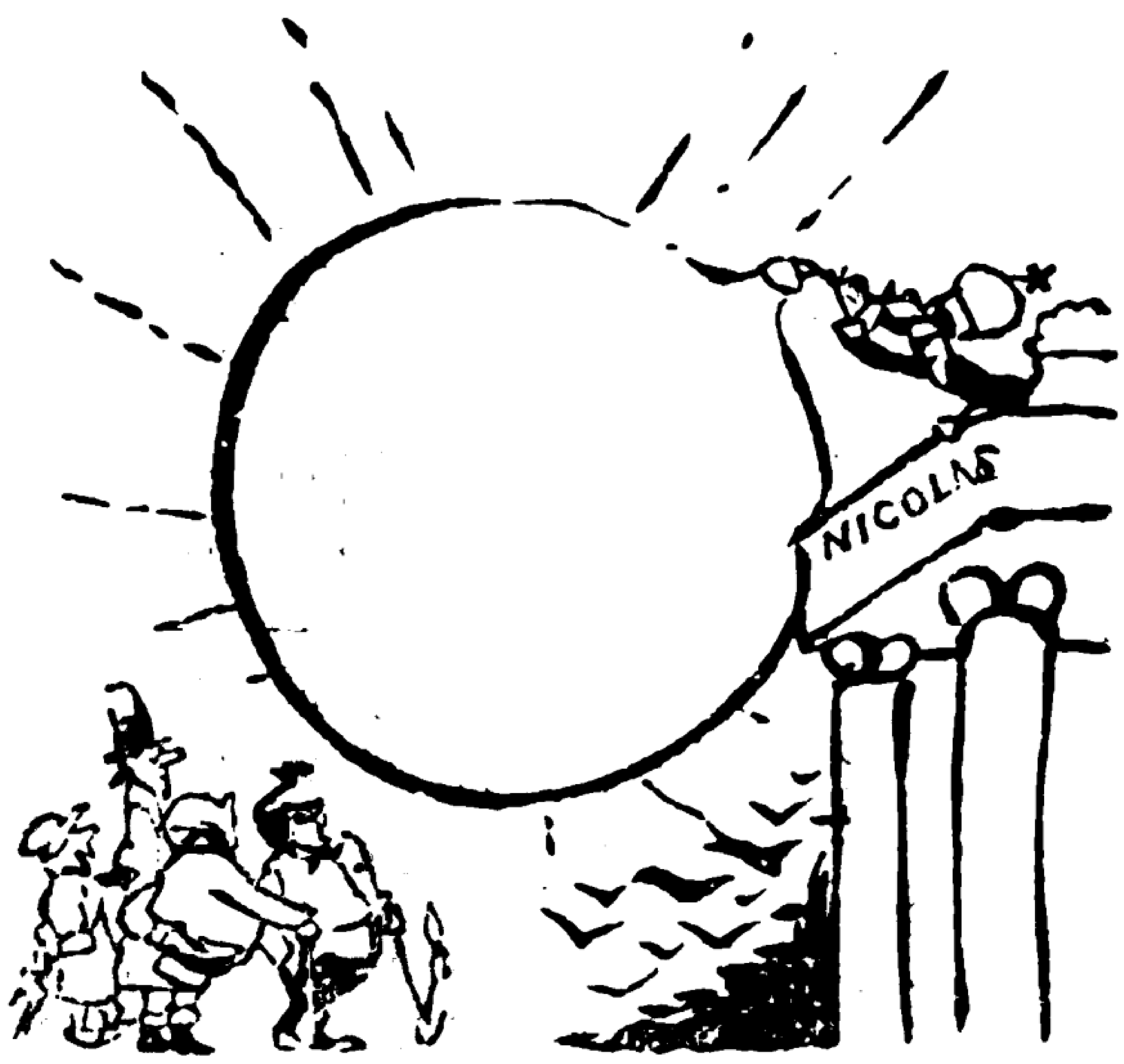
日露兩國人民の性情を考察すれば今直ちに講和の豫望ありとは見るべからずと雖も、予輩は或一派の人が唱ふるが如く徹頭徹尾講和の望なしといふ見解とは一致すること能はざるなり。若し兩國が戰爭を繼續するも今日と何等異りたる効果を收むることなく、偶々以て其損害を大いにし、延いて國民の困難危險を釀するの恐れあることを認むるに至れば、兩國共講和の道を望むに至るべき必然の勢なり、戰爭の開始に當りて互の感情激昂し、其狂熱に驅られて猛進突擊すべきも狂熱は久しく繼き得べきものにあらず、必らずや精神の常態に復し、以て早晩反省回顧すべきの機運に至らざるを得ず、予輩が講和の豫望ありと唱ふるは即ち日露兩國が互に反省回顧の位置に近き、互に其敵を全く降服せしむるは不可能ならずとするも最も困難にして非常の長年月を要すべきものなるを自覺し始めたる事實の上に其基礎を置くものなり。當初開戰の時に於て彼等は互に自己の優勝なることを信じ、直ちに其敵國を敗亡せしめ得べきを思ひたるが如し、露國人の日本を輕侮したるべきはいふまでもなく、日本人も又自己の準備熟練及び愛國的精神に餘りに多き依賴をなしたるが如し、彼等は今に至つて始めて互に相輕侮すること能はず、又自己の描ける豫想の殆んど夢の如くなりしを知悉するに至りたるなり、迅速にして終結的戰爭は到底望むべからずして耐久持長の策は現今の最も必要なることを了解するに至りたるなり。

今之を兩國の形勢に照して考ふるに、全露西亞帝國の征服てふことは如何なる突飛なる日本人と雖も夢想せざる所なるべし、日本人の多數は今回の戰爭を以て全く攻擊的態度に出でたることを揚言すと雖も予輩の見る所によれば實は防禦的形勢にあることを斷言するに憚らず、露國は例令戰爭毎に退却しつゝありと雖も露國に取りては今回の戰爭か確かに膨脹の戰爭なり、日本の目的は露軍の力を減殺し、以て朝鮮を保ち支那海の港灣を占有せんとするに過ぎず、露國の野心は决してかゝる小なるものにあらず、悉く極東の天地を維持し、日本の海軍力を海上より掃蕩し、以て島帝國をも横領せんとの企てなり、日本にして其目的を達せば獨り旅順を陷落し、露國艦隊を全滅せしむるのみならず、又よく露軍の西比利亞の曠野にまで擊退すべし、されど彼の漠々たる西比利亞の野を

横断して進行するは彼等にとつて非常なる難事なりといはざるべからず又露國は常に敗戦して退却し、又城郭は敵に圍まれ、甚だしき不面目なる狀態にあり、されど今後其勢力を回復して其損失を償ひ得べきやも知るべからず、例令日本は漸々進軍したりと雖も其勝利によつて得たる効果は比較的僅少に、今後の勝利如何も亦數月前豫想したる程確實にして偉大ならざるべきは彼等と雖も氣附きたる所なり、かるが故に彼等があらゆる費用と、あらゆる艱難を甞して第二大戦の効果を收めんことに熱冲しつゝあるなり。

今より冬期に亘りて起るべき戦爭を豫想するは決して不法の事にあらざるべきを信ず、若し偶然又は不慮の事件の起らざる限りは此間に於て遼陽よりも一層大なる戦闘の開始せらるべきは何等の疑なかるべし、其戦場は奉天なるべきや又其以北なるべきやは確かに定め能はずとするも恐らくは奉天を距る遠からざる地なるべきは論なし、其準備其計畫其規模益々宏大にして其戦闘も遼陽の大戦よりも一層激烈なるに相違なかるべきも予輩の見る所にして誤らずんば其結果は又遼陽の其と仝一にして兩國に非常なる差異優劣を認むること能はざるべしと信ず、吾人の算する所によれば日本の軍隊は未だ露國よりも多數にして前進しつゝあるもの凡そ三十万なり、其砲兵は優勝にして且つ其他の兵皆勇敢なれば彼等は恐らく撃退せらるゝが如きことなかるべし、又黒鳩公の下にあつて戦ふに勝ふる兵数凡そ二十五万、其騎兵は卓絶にして其兵亦劣弱にあらざれば彼等も亦最後まで戦ふべきこと論を待たず、黒鳩公は遼陽に於けるが如く再び横撃せらるゝことあらば彼はよく其の軍を收めて鐵嶺まで退却すべし、若し又万一彼が奮戦して日本軍を撃退し、遼陽の地を取り返すことあらば、日本の不利は實に非常なるものにして旅順の圍みを解き鴨緑江以南に退がざるべからざるの運命に陥るべし、然れども現今の形勢より推せばかゝることは決してなかるべしと信ず、奉天に於ける黒鳩公の成効は直ちに露國の成効を意味すと雖も、然らざれば戦爭は未だ結末に至れりと斷すべからず、然れども黒鳩公は遂に鐵嶺に退き、以て次て來るべき戦爭を待たざるべからざるに至るは最も誤りなき想像なるべし、此間に旅順の陥落を見、遂に兩國の反省回顧は講和の途に就くに至るべきなり、其講和の條件は勿論日本の利益と定るべきも、日本は今後戦爭を繼續するの不利なるを考へて適宜なる態度を取る方其利益なるべく、露國も亦之に對して賛同の意を表すること其宜しきを得たるものなるべしと考ふ、兎に角兩國講和の際

ヌーレ、ヤコブ紙所載



露帝が皇子の誕生に就て宣言したる所は畢竟小兒の弄ぶ石鹸丸の如く空なり

想は全くなきにあらずといふべく、否な極めて近くの地まで來れりといふも決して速斷にあらずと信ずるなり。

ルーズヴエルトの平和會議に對する短評

「リテラリー、ダイセスト誌」

ルーズヴエルトの平和會議に對して多數の新聞の論ずる所を見るに大抵贊同の意を表したるが如しと雖も、中には又種々なる疑問を提出して之を非難するものなきにあらざるなり、セント、ピーターースバルグに於ける政府黨の機關紙は之を攻撃して、「今日はかゝる問題を議すべき好時期にあらず、中立國の利益のみ過重せられ、戰鬪國の權利を制限するが如き會合に向て贊同の意を表する能はず」といひ、代表者を出席せしむべしとの噂あり、又紐育タイムスは「露國も日本も出席せずとあらば此會合の無用なること素より論なく寧ろ滑稽に類する感なきにあらず、而して日露が今日の如き激烈なる戰鬪をなしつゝある時、かゝる新平和會議に出席すべきの理なきは明かなる事實にあらずや、又最初露帝によつて發議せられたる平和會議なるものが、其發議者の出席なくして開會せらるべきも又奇妙なるものにあらずや、第一平和會議が閉止せられしとき議決せられずして殘され、尙ほ次會に於て解決を下さんと豫定せられたる問題の重要なるものは實に中立國の權利及び義務、公海に於ける使用の自由、及び陸海軍豫算案の制限等に外ならざりき、然るに此等の諸問題を最も緊切なる關係に立てる日露兩國の出席なくして是等の問題を議するとも何の効果あるべきや、實に笑ふべきの至りなり」といへり。

又或他の新聞はルーズヴエルトの人格より論して此提議を批評したるものあり、紐育ワールドは彼が平和會議を開きて、世界の國民をして「互に他人の權利を正當に認識せしむる」が如くにせんとすることは彼の眞意より出でたるかと疑ひ、尙ほ進んで「彼の充分なる戰鬪力を養へよと唱へたるルーズヴエルトと又平和會議を提出したるルーズヴエルトとは何れか眞のルーズヴエルトなるべき、又工業上政治上に於て熟練を以て處理し得るにあらざれば合衆國の干涉を免れざるべしと南亞米利加共和國を却かしたるルーズヴエルトと互に他人の權利を認識することを勸むるルーズヴエルト氏とは孰れか誠のルーズヴエルトなるべき、彼の此問題を提出したるは單に今回の戰爭にのみ對する一時的の政策か、又は僞善的心意より生ぜしものか、予等は彼が自ら省みて昔日の非を悟り、眞に世界的平和を望むの誠意より起りし企圖ならんことを祈るものなり」と論ぜり、

ブルークリン、イーグルも殆んど同一なる意見を發表して曰く、「ルーズヴエルト氏は各國に陸海軍の準備なく、兵士を徵集することなく、軍艦を建造することなきも安心し得るに至らざればかゝる會議の有名無實に畢るべきことを知るべし、軍備の擴張を唱へたる氏にしてかゝる問題を提出するに至りたるは果して何の心ぞや」と

ブルークリン、シチズンは此れ必ずルーズヴエルトの政策なるべしと疑ひ、「かくの如き突然なる改宗に對して確信を措くことは予等の容易になし能はざる所なり、南亞米利加の共和國に對して揮ひたる鞭撻の聲未だ耳を離れざる今日に於てこの提議を見る、意外の感なきを得ざるなり若し今回の擧にして彼の眞摯より出でたるものとするも予等は大に其時期を失したるものなることを思はずんばあらず、即ち彼がかゝる仁惠ある問題を提出せんとならば今少しく待ちて戰爭の了りたる後になしたる

方適當なるべし、何となれば四年間の平和的なる政策を示したる後かゝることを提議せば恐らく彼の動機を疑ふものなかるべく、又若し彼が當選せられざることあるも、此發議は彼の懺悔の心情より起りしものとして受納せられたるべしと信ぜらるゝなり」と論じぬ。

日本の愛國黨と社會主義者

「レヴユー、オブ、レヴユース誌」

コロネル、エメルソンは日本の愛國黨を評して一種の狂熱者なりといひ、日本の一詩人は國民の感情を歌ひて「何處にあるも、何時にても、我最愛の日本國、わが血も、肉も、魂も、額に出づる汗さへも、たゞ汝のみに注がん」といひたることを記せり、而して此愛國熱なるものは英雄及び祖先崇拜なる國民宗教、神道及び皇室無上尊敬の念と密接なる關係あるが如し、歐洲の通信員が日本人の戰爭に對する態度は比較的冷淡なりと考へしは甚だしき誤解なり、彼等は決して騷々しき叫びをなさゞるも其愛國熱は減じたるに非ず、否な此沈默は却て深き熱度にあるとを示せるなり、小童に至るまで其小使を節して軍費に獻ぜんことを求め、皇后は自ら其寶玉を日本銀行に送りて國内に摸範を示し、之に倣はざる二婦人の如き甚だしき擯斥に遇へりといふを以て見るも國民の意向如何を察するに餘りあるべし、されども日本人は決して戰爭にのみ狂して其他を忘るゝものにあらず、今其日常の業務を執りて軍人の後援たらんことを勤めつゝあり、只かゝる愛國熱に浮かさるゝ人民なれば開戰の當時或は爆烈彈を投げ、又は不人望なる人物を暗殺するが如き擧を戒めざるべからざるなり。

「日本に於ける社會主義」の著者ジアン、ロンギユー氏は日本に於ける暗潮の流れが長しへに笑む此國の光明を曇らさんとする趣あることを記せり、日本の製造業は進歩せり、されど之と共に社會主義は勃興せり、社會主義と日本人民多數の困難は製造業の進歩伴うて起れり、日本の下民は之が爲めに甚だしき貧窮の狀態に立ち恰も倫敦東街又は其他の都市の賤民町に比すべき有樣となれる者少からざるなり、日本の賃銀は低廉にして一日十一時間又は十時間の勞働に向て極て僅少の賃銀を得るに過ぎざるなり、又日本には勞働者保護條令あるなく、又婦人及小兒の勞働に關して制限的規約あるなし、而して婦人の賃銀は男子に比して低廉な

ニューヨルク、ワールド所載



ルーズヴェルト平和の女神を招げども翼を擴げて蒼皇として天外に逃れんとす

ることいふまでもなし、東京砲兵工廠に於ては其職工一萬三千人にして其中二千人は婦人の占むる所、而かも一日十二時間乃至十六時間の勞働に對して其賃銀甚だ廉價に哀れむべき狀態にありといふ。

一千八百八十二年以來日本に於ける社會主義の氣運漸く盛んとなり、ヘンリー、ジョールズの「進步と貧民」は飜譯せられたり、一千八百九十八年以來片山氏によつて創められたる純社會主義の雜誌發行せられ、一千九百一年に至りては社會主義の黨派を組成し、其宣言として陸海軍の廢止、富の平分配當、參政權の平等等凡そ廿八箇條の規定を稱導せり、此宣言は略ぼ他國に於ける社會黨の宣言に等しく、鐵道の民有を唱へ、十六歲未滿が糊口の資を得る爲めの勞働を禁じ、又日曜の休業又一日八時間の制限等を示さんことを示したり。

依て桂首相は此黨派を鎭壓せんとし、印刷物を沒收し、其宣言を記せる新聞紙の發行を停止し、公會を禁じ、以て百方社會黨の勢力を減殺せんとせり、されどこれが爲めに社會主義の勢力は決して減ぜず、片山氏はアームステルダムの社會主義大會に出席し、以て日本社會主義者の代表たるべしといふ、ロンギユー氏は社會主義を以て日本に於ける眞正なる思潮にして今后の勢力一層强大なるべしと論ぜり

海外雜纂

露國陸海軍兩將の性格

「リテラリー、ダイゼスト誌」

其一、陸將クロパトキン

クロパトキン將軍の崇拜者中には、彼を以てホーマー詩中の英雄に似たりとなし、露國空前の良將なりと賞するもの少なからず、今伯林ウナヒの記する所を引用せんに「クロパトキンは總て華美にして人目を眩惑するが如き外觀を裝ふことを嫌ひ、常に意を軍隊の道德的訓練に注ぎつゝあり、彼思へらく、軍隊を統率するの任にあるものは、先づ自ら其行爲を愼み、身以て全軍の模範とならざるべからずと、即ち身を持すること殿に其擧措總て宜しきを得、毫も人の非難を受くるが如きことをなさず露國は未だ嘗て其指揮に於て、其智謀に於て、クロパトキンに比すべき良將を得たることなし、彼若し今回の戰爭に於て勝利を得るも、自ら誇り慢ぶることなく、其功を以て全く己れの部下に歸すべく、又不幸にして敗を取るが如きことあらば、其責を一身に負ふべきや必せり、然れども彼は決して最後に勝利を得べしとの信念を失はず、如何なる不幸の位置に立つも常に「忍耐せよ」と叫びつゝあり」

されど又顧りて彼を誹謗する者の言を聞くに或は己れの爲すべきことを悟らざるものなりとなし、或は己れの意志を行間に實現する能はざる者なりと嘲るあり、或批評家の如きは其口を見れば精力の乏しきを示し其頤を見れば其意志の弱きをあらはせりと罵れり。伯林フオルウエルツに於て一獨逸休職士官の記する所を見るに、「クロパトキンは實に嘲笑の的也、彼れが若し露國人にあらず、英人又は佛人なりせば恐らくは一國の非難を受けて到底其地位を保つこと能はざるべし、彼は一時退却するとも必ず日本軍を擊破すべきを誓ひたるに拘らず、戰を交へて己に數閱月、而かも尙ほ未だ常に退却を繼續しつゝあるは何事ぞや」

又倫敦スペクテートルは之と好一對の對照をなす所の觀察を揭げて日く、

露國は將軍クロパトキンに於て實に軍事上最も優等にして稀有なる天才を得たり、遼陽附近の大戰及び之に先だつ二箇月間の行動に於て彼は

世の感嘆を博すべき將軍の資格を顯はしたり、當時に於ける彼の周圍の事情を察し、而して其擧作如何を省みれば、以て彼が決して平々凡々の將軍にあらざることを知るに足る、彼が戰場にあらはれしは、已に戰爭の開始せられし後にして、陸海軍の指揮、又はあらゆる軍隊の資給は全く副將アレキシーフの手によつてなされたりしにあらずや、而してアレキシーフは素より智略ある人にあらざるは明白の事なり、クロパトキン將軍はかゝる地位に立ち、而かも其遼陽より退却するに當つて天晴名將たるの技倆を示したり、後ろには激烈なる敵の追撃あり、前には難澁なる泥の惡路あり、然るによく砲銃及び捕虜等を敵に委すること極めて少く、殆んど數ふるに足らざる程なりしは嘆するに餘りありといふべし、兎に角吾人はかゝる名將の露國にあることを忘るべからざるなり。」と

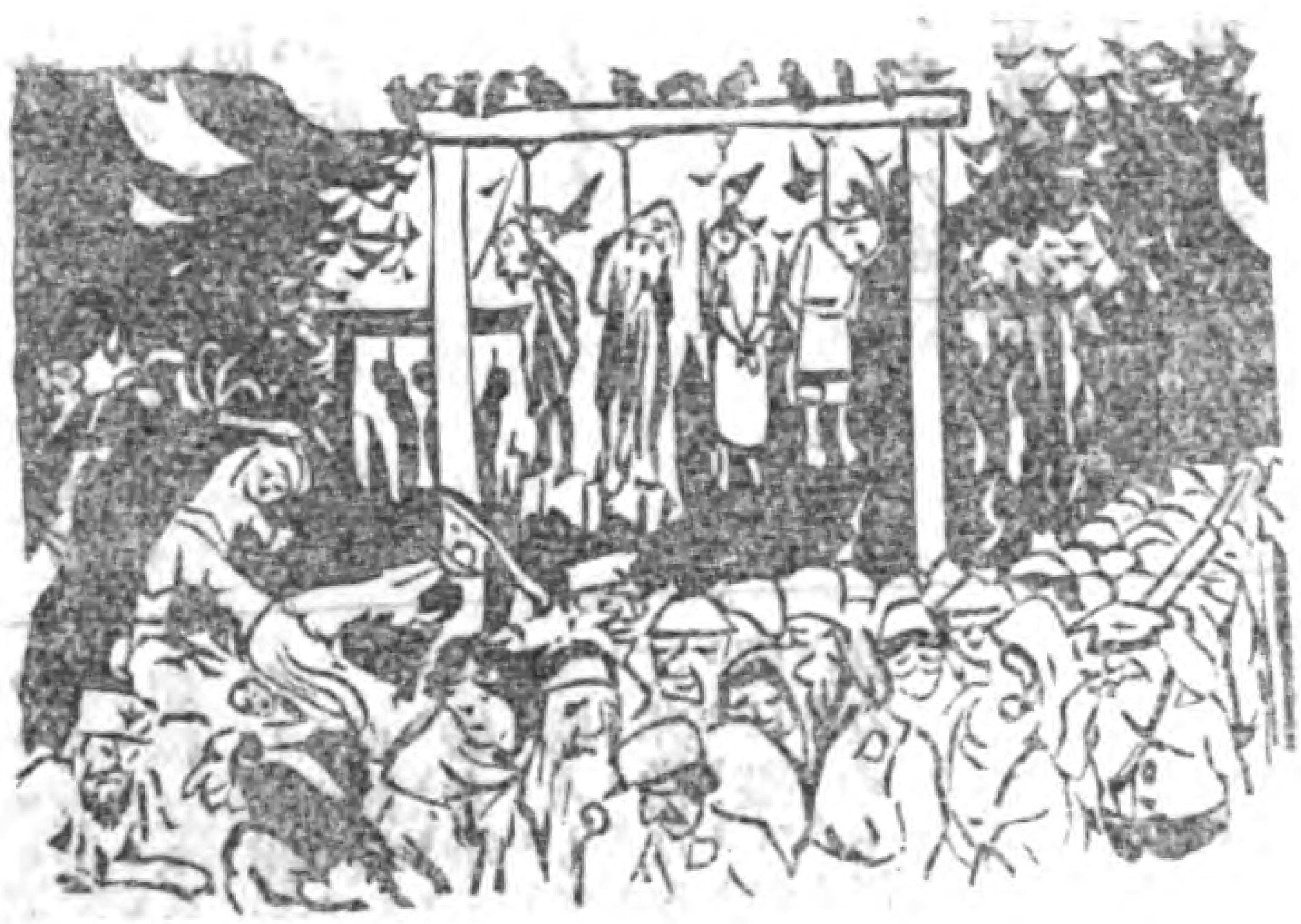
其二、新海將ロバート、ワイレン

「デーリー、クロニクル」

旅順敗殘の艦隊を指揮せんことを命ぜられたる露國新海將ロバート、ワイレン氏は最も注目すべき人物にして、露國水兵は彼を以てネルソンが露國に再生せるものなりとまで崇拜しつゝありといふ。

彼の爲人は丈低く、形よからず、薄き鬚と、縮れたる髪とを有し、一見甚だ平凡なるが如し、されど其最も特徴をあらはせるは其目にして常に笑へるが如き滑稽なる藍色の眼は、一旦事あるに望めば如何なる橫暴なる水夫と雖も子供の如く柔順に、且つ信服せしむるの威嚴を供ふ、如何なる人をも信服せしめ、如何なる人をも歸依せしむるは實に彼の人物の特色なり、若し露國艦隊の今日の難局より救助し今日の危嶮より脫却せしめ得べき人ありとせば、そは實に先日まで後進の位置にありし新海將バート、ワイレン氏の外にあらざるべし、彼が跳躍して今日の位置を占むるに至りたるが故に種々なる非難の聲聞えざるにあらずと雖も露國水兵は全く彼に信賴するが如く見ゆるは確かなる事實なり、戰爭の開始するや、彼の名はたゞ一巡洋艦パヤンの艦長として世に知られたるのみ、されど當時巳に戰鬪準備の整頓したるは此パヤンのみなりしを以て見ても、彼が非凡の人物なることを知悉すべきなり、彼は夙に其部下よりは非常の信賴せられたりと雖も其同輩よりの尊敬を受けたるは戰爭開始後の事に屬す、彼の日本の戰鬪艦初瀨が擊沈せられしは實に此ロバート、ワイレンの効なりといはる、彼の事件は浮泳水雷にかゝりたるにあらずして全く水雷の爆沈する所となれるなり、ロバート、ワイレン氏は實に水雷專門家なり、彼が近き未來に於

ワール、ヤコプ紙所載



內亂蜂起せば露帝專制の威光も始めて此の如くに顯るべし

て再び此特技をあらはすべきは疑を容れず、他の事は措て論ぜざるも彼の必ず爲すべきは實に一大決戰にして、從來の開戰をして全く一小兒戯と見えしむるが如き目醒しきことをなすべし、何となれば彼は自己の艦隊を全滅せしむるか、又は全勝を得べきやの決戰を試むべきことは怪しむを要せざる所なればなり、彼は决して中間の途を歩まず、常に最も極端なる動作によつて其効を收めんとす、予は彼に就て書かんと欲するを多くありと雖も、個人として彼と相知れる予の筆は或は彼に諛辭を呈するものと誤解せられ、或は色眼鏡を以て彼を見たるものと罵詈せらるゝの恐れあるを思ひ、之に筆を擱かんとす、兎に角世界の耳目を聳動し、ロバート、ワイレン氏の名が口毎に呼ばるゝの日必ず近きにあるべきは予の信じて疑はざる所なり。

日本の赤十字社

「グラフヰック誌」

日本の赤十字社は現今最も隆盛の狀況にあり、又其事業の効果頗る顯著なるものありと雖も、當初此れが建設の時期に於ては多大なる困難に遭遇したるものなりしなり、歐米に於ては尼又は其他の宗教界の婦人早くより此等の事業に努力し、其の其功蹟最も大いなるものあるを以て、日本亦之を學ばんとの念切なりしも、直ちに之に倣ふこと能はざるの事情ありしなり、元來赤十字社の事業は基督の敎理に基き人民相互の愛情より起りしものあるも、日本の風習に從へば婦人が其家を出てゝ男子に接近し又之を看護するが如きことは大いに非難すべきことなりしなり、毒に婦人は全く軍事用などに容喙すべからざる日本の風習なれば此男子が軍人なる時は殊更接近又は看護などすること困難なるの事情ありしなり、實に日本に於ては婦人の最も近くべからざるは軍人なりき、さればかゝる事情に從はんとするものは極めて下等なる社會の婦人連の外になく、此風俗を根本的に改良せんとすれば高貴なる婦人が自ら奮て積習を打破し、以て身自ら其模範とならざるべからざる位置にありき、依て有栖川宮妃殿下は自ら一千八百八十七年五月あらゆる妃殿下及び大臣貴族等の妻室を集められ、軍醫及び官醫等と協議の上直ちに立派なる會合を組織せられたり、此高貴なる人々より成れる會合は每月二三回の集會をなし、醫士の指導に從ひて熱心に看護の法を研究せり、

此高貴なる婦人の大膽なる行動は直ちに其善良なる影響を起し、國內の婦女爭て之を摸するに至り、忽ちにして非常の盛況を呈するに至り、依て國人も又婦人の男子を看護するは毫も恥辱にあらざるのみならず、却て非常なる名譽の事業なることを了解し、かゝる職に從ふは實に婦人が國に盡すの義務なることを知るに至り、扨てこそ今日の如き顯著なる効果をあらはすに至りたるなれ。

中央公論の海外新潮は他に比類なしとの世評あり、本欄は更らに明年度より多方面に之が材料を取り來らんとす

次號豫告

次號とは即ち一月一日の初刊をいふ也、本誌はこゝ數月來大に其面目を進め來り、今や讀者の多方面なる、編輯材料の豊富なる、確に自ら誇り得るを信ずるに至れり、於是更に一月元旦の本誌に於て少くとも我理想の一部を發表し、讀者と共に此戰捷國の新年を祝賀せんと欲す、本號締切迄に寄稿の快諾を與へられし諸家は左の如し（順序不同）

徳富猪一郎氏　福本日南氏
網島梁川氏　登張竹風氏
寺田勇吉氏　和田垣謙三氏
幸田露伴氏　松井柏軒氏
上田敏氏　巖谷小波氏

雜錄



金工傳

上田敏

（五）

父は予に笛吹くわざ、或は譜に因て歌うたふことを敎へ始めぬ。おほかたの兒童ならば、呼子笛などの玩具を喜ぶ年頃なるを、何故か予は甚だこの敎を嫌ひて、只父の意に逆らはぬため、笛吹き歌うたひたるのみ。そのころ父は木製の笛じかけにて珍らしき風琴を造り、また當時には類稀れなる善美の洋琴、完全にして精巧なる提琴、横笛等を製したり。また土木の術にも暗か

らねば、吊橋水車の類を工夫し給ひぬ。象牙の細工につきては、蓋しはじめての名人なる可し。されどわが母なる人を見染めてより、横笛のすさびが緣のかけ橋たりしが故かふさはしからぬまでも、此笛の道に深入りして、宮廷の伶人に招がるゝやうになり、乞はるゝまゝに、始のうちこそ只慰みがてらにとて之に交はりしが、懇請默だし難く、終に其班に加はりぬ。されど父が寵遇を蒙りし。ロレンゾ・デ・メディチ及び其子。ピエロは後に至りてわが父があまりに吹笛のわざに耽りて、土木の方もかの妙藝も荒びむとするを見、此伶人の職より移したり。父はいたく、之を心に病みて、甚だ面目を損ぜし如く思ひしが、やがて本の業に復へりて、こたびは直經一骨尺ばかりの鏡を骨と象牙とにて造り、精巧の意匠を凝らしたる人物樹葉もて之を飾り、全體を車輪の形にしあげたり。其中央に鏡面を据え、周圍には象牙と黑骨とにて刻り繋ぎたる七箇の輪を七の德に象りて添へたり。鏡全體は七德と共に一種の均勢をもたせたれば、輪の廻轉につれて、七德も共に動けども、其下方に重みを付けたる故、常に直立の姿勢を失はぬやうに仕掛けたり。父は聊か羅甸の語に通じたれば此姿見のめぐりに羅甸語して銘を題すらく

Rota Sum: Semper, quoquo me verto, stat Virtus.

『運命の輪いづれに廻るとも、德はかたく足を失せず』

との意なり。程無うして父は伶人の班に復歸せり。是等は多くわが出生前の事件なれど、あまりよく記憶したれば、こゝに書いつけぬ。當時宮廷の伶人たる者は概ね皆上業の諸組合に屬し、多く絹、毛織物商の員なりければ、父が樂人の職をもて賤しとせざりしも怪むに足らず、予が後來につきて父の一大冀望といふは、ゆくゆく予を笛の名人たらしめむとするに在りき。されど、予はまた此計畫を話に聞かされ、父が予の上達を見て、これならば心次第にて天晴一代の上手と仰がれなむといはるゝばかり、心苦るしき事は無かりき。

(六)

既に述ぶる如く、父はメディチ家の忠やかなる方人なりしが、ピエロの國を逐はるに際して、重大なる件を依托されたり。後かのピエロ・ソルデリニの選ばるゝに至り、此時なほまだ伶人の職に從ひたるわが父の才能を重く用ゐて土木の官たらしめ、多くの大任を托しぬ。さればソルデリこのフィレンゼに在りし間は非常の殊遇を蒙りたり。其頃予はまだ幼けなきほどの事なりければ、人に負はれて、宮廷にまう上ぼり笛吹きて

聞えまつりぬ。謌につきて伶人と合せものなどしける時は、常に高音を受けもちしが、これも舍人の肩に負はれて彈奏したり。大總督即ち上述のソルデッニはわがをさな言の噂に興じ給ひて、菓子などを下され、父に對ひては『マエストロ・ジオヴンニよ、音樂の道もさることながら、卿の世に尊ばるゝ所以の他の技藝をも此子に敎へずや』とつねに言はれしに、父は『彈奏作曲のほかは此兒に習はせたくあらず、かれ命あらば、この道にかけて天下の名人と生ほしたてむ』と答へしかば、老議官の一人『噫、ジオワンニ殿、大總督の仰に從ひ給へ。音樂ならぬ餘の道を勵みて惡しき事やある』と口添へたり。

かゝる程に幾も無くしてメディチ一家の歸り來るや、後に法王シオと呼ばれたる僧正の君は殊のほか予が父を愛し給ひけり。メディチ家追放の間、邸宅の前面に揭げたる紋章のうちより其球を剝奪して、共和政府の章なる大赤十字を畫きたれど、歸來直に之を拭ひて、金地に赤球の徽章を舊に倍して鮮やかに塗り上げたるが、予が父はもとより稍詩才ありて、且つげに大授なるか、未來を預知する性を具へたれば、上記メディチ家紋章除幕の際其下に左の四行の句をものしぬ。

Quest, arme che sepolta è stata tanto
Sotto la santa croce mansueta
Mostra or la faccia gloriosa e lieta
Aspettando di Pietro il sacro ammanto

聖き十字におほはれて
永く潛みしこのしるし、
今ぞ譽れのおもあげて
彼得(ペテロ)の御衣(おんぞ)まちわたる。

此短詩滿城に唱へられたり。數日にして法王ユリウス二世崩し、僧正の君は羅馬に上ぼり給ひしに、意外にも法王の職に選ばれぬ。寛仁大度のきこえ高きレオ十世とは此君なり。此時予が父は四行の預言歌を奏進せり。法王は屢使を以て父の羅馬に來らむことを勸め、身の爲よきに謀らはむと云ひ越し給ひしが、固く辭して、往かざりしかば、終に恩賞に與ること能はず、ヤコポ・サルヴヰヤティの大總督に選ばるゝや、宮廷の職も免ぜられたり。以上を予が金工を職とするに至りし所以とす。其後、時の一半を此技藝の研鑽に使用し、他の一半は意ならずも音樂にさゝげぬ。…………

（七）

上に述べたる如く父は予に望みたれど、予もまたひ

たすら懇願して、一日一定の時間を予が自由に委かしなば、其餘を全く音樂に捧げて、御意にかなふやうにす可しと告げしに、父は予に向ひて『さては御身は笛吹く業をつゆ面白しと思はざるか』とうら問ふ。『まことに然り、今心に思ふ所と比べて、其術は甚だしく卑しと覺ゆ』と答へけるに、父もわがかく思ひ込だる一念にあぐみて、カプリエレ・バンディネルロが父の細工場に入門せしめぬ。此人はピンチ・ディ・モンテ生れの金工にして、名をミケル・アニォロといひ、斯道の名人なりき。毫も門地の矜る可きなく。元は炭燒の子なりといふ。されどこはかのバンディネルロの名を少しも傷くるに足らず、却て彼が身を立て家を興したるを多とすべきも、唯其手段の正しからましかばと思はるゝのみ。されど予は今此人につきて云々すべきいはれもなければ默だし已みなむ。止まること數日、父は予をこのミケル・アニォロの許よりひきとりぬ。そは何分にも膝下を離れて手放しおくに忍びざればなりけり。かくて予は意ならずも音樂を修めて十五歳に達しせしが、其時までに起りし種々の奇談、又は命も危かりし様々の災難さはあれど、一々之を述べたてむには、さだめし讀者を驚殺することとならむ。されどなほほかに云ひたき事も多くあれば、こゝには冗漫を避けて、凡べて畧しぬ。

十五の歳、父の意に背きて、自らサンドロの子アントニォの許につきて金工の技を習ふ。此人通稱を金工マルコォネといふ。技藝世に優れたるのみか、何事も隱しだてなき壯快の人物なりき。父は此人に乞ひて、他の弟子の如く、予に賃銀を與へしめず、そは元來物好にて始めたる藝の事なればとて、思ふざま予をして圖畫の道に耽らしめむと計り給ひしなり。予素より異議あるべきもあらず師匠もわが製作を見ていたく喜びぬ。折々はわが勞を欲りて其ひとり子なる庶子に業を代らせけり、わが擇て好める道なればにや、あるは眞に天稟の才ありしにや、兎に角めき〳〵と上達して、まだ數月を歷ざるうち、斯道に達者なる工人否一流の者は拔きんでゝ製作を以て利を收むるに至りぬ。されど此間をり〳〵横笛竪笛を吹きて父の心を悦ばすことを忘れず、父は之を聽き給ふ毎にはら〳〵と落涙して、滿足の吐息を洩し給ひけり。かくて孝養の心よりして、父には此安心を捧げまつり、予またみづから音樂を嗜む如く見せかけたり。

（八）

其頃予には二ッ年下なる弟ありき。極めて膽太とく心猛けき少年にして、後年コジモ侯の父なる大勇將ジオヴンニノ・デ・メディチに仕へて、天晴の武士となりし者なるが、この時僅かに十四歳ばかりにて予は之に二年の長なりき。ある日曜日の夕、日暮れむとするころ、サン・ガルロ門とボルタ・ア・ピンティとの間を歩みて廿歳前後の一少年と爭をしいてたるに、双方ともに劔を帶びたれば、予が弟は奮闘して、敵に重傷を負はせ、更に此勝に乘ぜむとする時、傍觀の群集中に敵の身内の者ども數多交じり居て、味方の者の利無きを見、投石器を用ゐければ、其石の一に頭を打たれて、予が弟は悶絶したり。予も曾ゝ其處に來合せたれど何分一人にて素手なりければ、早く弟に爭を止めさせむとて、「疾くゆきね、もはや充分なり」と叫び居たる折しも、あれ、かくは不幸にも弟の倒るゝを見て、直に驅け寄り、劔を奪て、其前に立ち塞がり、白刃の下礫の雨の中につと立ちぬ。かくて兵士等がサン・ガルロ門の方より驅けつけ來りて、怒れる群集の內より予を救ひくれしまで、一歩も傍を去らざりければ、かゝる少年に珍らしき勇氣かなと兵士等も歎稱しあへり。

そこより予は死したる如き弟を荷つき歸へりしが辛うして、彼は甦へりぬ。病癒へて後、八人會の人々は敵手の者を數年間の追放に處し予等兄弟にもフィレンゼ外、十里の地に六個月間の追放を命じたり。「いざ共に徃かむ」と弟に語りて、父に暇を告げしに、父は與ふべき金なければ、單に祝福を授け給ひぬ。まづシエナを指して行きけるはマエストロ・フランチェスコ・カストロといふ人を賴よりてなりき。これより前、父の許より走りし時も、此人の家にゆきて暫らく足を駐め、金工を修行したりしが、程無く父に呼び戻されし事ありき。こたびもカストロ氏の家を訪ひしに、直に見知りくれて、色々の仕事を授けシエナ逗留中、一軒の家を貸與して、自由に任せたれば、弟も此處に移り住みて、職に從ふ事數月なりき。

（完）

無線電信之話

松代松之助

中

○次に受信機の構造作用は如何、是れ前に述べた送信機に次いで來る最後の問題である、扨て送信機て電

氣波を送り出すと、それが空間に傳はつて四方八方に傳播することは既に說明した通りであるが若し中途にして電氣波が受信垂直線に邂逅すると、其の垂直線には非常に急調な振動的電流が誘發されるのである、而して此振動的電流に遇つて物理的或は電氣的に其性狀を變化する所のものが種々知られて居るので、其何れを捕へても無線電信の受信機となすことが出來る、故に其方式も一樣でない、今最も廣く用ひられて居るものをいへば、それは

○所謂コヒーラー　である、是は最初ブランリー氏の發明になつたのをロッヂ氏がコヒーラーと命名したのであるが、それを實用通信に適する如く、感じよく改良したのは全くマルコニー氏の力である、其後各國人にて色々研究改良し、我海軍に用ふるものも矢張り之に改良を施して多くの特色を有するものになつて居る、此コヒーラーの構造は略第三圖に示す通りであつて其大さは長さ二寸、徑二分位(イ)が硝子管(ロ)が銀の棒で其面は平滑である(ハ)は白金(ニ)は金屬の鑢粉で其鑢粉は如何なる金屬にても出來るが、マルコニー氏はニッケル粉九十六、銀粉四の割合に調合せるものを用ひて居る、又此硝子管の中の空氣は鑢粉の酸化を防ぐ爲め排氣してある、此處に白金線を用ひたのは硝子と線との接觸を完全ならしむる爲めで、畢竟排氣の便を計つたものである、そこで此コヒーラーを圖の如く受信垂直線と地線との間に插入して置くと、平常は此の銀棒と銀棒との間に在る鑢粉の電氣抵抗が殆んど無限大で、此回線中には電池と繼電器とがあるけれども、恰も此處で道が切れて居ると同じことで、此繼電器は働かないのである、然るに送信機より電氣波が來て之れが爲めに此垂直線に振動的電流が起るや否や、此コヒーラーの電氣抵抗が減じて全然兩銀棒を引付けたと同じことになり、それが爲め此繼電器が始めて働き得るやうになるのである、所で先づ

○電信機　の事に就いて豫め說明して置く必要があるから念の爲め通常電信の事を說明して置かう、通常電信機は護謨か又は絹木綿の如きもので被護した針金を鐵棒に卷着け其針金に電氣を通ずると其鐵棒が磁石になつて他の鐵片を引き寄せる、其電氣が止めば又元の通常の鐵になるといふのを利用し、之を機械に組立て時計仕掛て紙を送り出すことにすれば、送信局て電氣を送る間は紙へ捧をもて墨黑々と描き出すことも出來る筈て、送信局て電氣を送るに長短をすれば同じく受

信局の現字紙へも長短の線が出る、其長短の線を隨意に組合せたのが即ちモールス符號と稱し、短點一つは(ヘ)の字、長點一つは(ム)の字、短點の次に長點が來れば(イ)の字、長點の次に短點が來れば(タ)の字を示すが如きものとなる、又長距離の通信に、送信局から送り出す電氣で其儘受信機を働かせるのは經濟上不利であるから、

○そこで**繼電器を使ふ必要**が起る、普通受信機では感じ易いといふことの外に符合を印出するとか音響を發せしむるとか云ふ必要があるが、繼電器に至つては只感じが鋭敏であるといふ事のみを專らとする、繼電器が鋭敏に感じさへすれば受信局内に於て恰も送信手の働を爲し受信電池を以つて印字機を働かせるのである、通常電信なればコヒーラー及び垂直線の代りに送信局より電線が來て繼電器の働作は送信局の送信機に支配されるのであるが、無線電信では此處に在るコヒーラーに據つて支配される、而して其コヒーラーも亦一種の繼電器になるので、つまり電波式無線電信では、通常電信に比べて此の

○**特別繼電裝置だけが增設**される譯になるのである、所で此コヒーラーは一度電氣波に據つて其電氣抵抗が減ずると、其儘にして置いては急に之に復することとをしない、即ち是では通信用とはならない、何うしても之を打擊するとか何んとかせねばならぬ、そこで復元器と云ふものを使用する、復元器にも色々仕方はあるが普通使ふのは室內電鈴と同じ理屈で出來て居るもので、鈴を鳴らす代りにコヒーーラーを叩くやうにする、此復元器は印字機と一所に入て置くからコヒラーが感じて繼電氣が働くと同時に印字機も復元器も働くことになる、故に送信局から電氣波を送り始めると印字機は印字をする復元器はコヒーラーを叩き始めるといふ譯になる、て送信局で電鍵を押へて居る間はそれらかそれへと連續電氣波が送り出されるから、何時復元器がコヒーラーを叩いても原狀に復しても忽ち又感動する、又受信局の印字機も連續する捧を出して居る、送信局で電鍵を押へる長短によつて受信局にも長短の**捧が印字機**に現はれるから、之を組合はして

○**モールス符合**で通信する事が出來るのである、併し是は極大體の話で、實際には未だ是丈では出來ない、此圖にも畧圖があるが此處へ皆一種の分電器を用ゐねばならぬ、これはコヒーラーが餘り鋭敏なる爲め此邊から出る極めて、小さい、火花の爲めに感動して通信

を邪魔される其害を防ぐのと、今一つは、印字機に出る印字の具合をよくする爲めである、以上述べたのはほんの原始の形であつて、此頃は之に

○振動捲線といふものを加へ　て用ふる、それは一種の變壓器類似のもので、いはゞテスラコイルの變形である、是は小さなもので硝子管に細い絹捲銅線二本が二重に捲いてあるので、其接續は第四圖の通りになつて居る、第三圖と比較して見ると尙明瞭である、此捲線は見た所何でも無いものであるが、

○通信の良否は大に之に關係する　ので又至つて面倒なもので、これには我々も非常に苦められた程である、此外無線電信には種々の方法があつて、以上述べたのは印字機へ記號を出す方法であつたが、玆にまた電話器を耳に當てゝ送信局で送るパチ〳〵といふ音を聞き別ける方法がある、此方法にも種類が中々多い、五百海里千海里の距離になると、今日では此耳で聞く方を使つて居る、實は印字機で記號を出す事が出來又電鈴を鳴らすことが出來れば其方が便利なことはいふ迄も無いが、耳に聞く方が感じが宜く出來るものであるから餘儀なく其不便を忍んで居らねばならぬ。

下

先づ無線電信の構造は此邊で止めて、現今の實用上の程度が何れの邊まで進んで居るか、又利用の見込が何處まで達して居るかを述べて置きたい、大體現今の無線電信法には

○三ツの大なる弱點がある　其一つは送信局で送信すると其電氣波は四方八方へ傳播して行くといふことである、是は使用勢力の不經濟を意味するは勿論何處でも通信を盜まれる危險がある、尤も此場合には送信の方向を一方に集めるといふ事も出來ないではない、併し實用的でない、又通信を盜まれることを防ぐ爲めには自分の目的とする受信機にのみ感じさせ其他には感じさせないといふ事も出來ないではない、それは能くいふ共鳴の理屈を應用する同調法などゝいふ方法があつて此方から同時に二つの異なる送信機で送信しても受信局では各別の受信機に現出させるといふ具合に出來るが、これは未だ不完全のもので左樣無限に澤山の別回線を拵へる事は出來ないのみならず、餘り強く送信を受けると、どれもこれも矢張一所に感ずるやうな事になる、例へば横濱から同時に小笠原島に二通の送信

をすれば小笠原島では別々に之を受信するといふ事は出來るが横濱で受て居る最中に同時に横濱より小笠原島へ別の通信をする事は出來ない、故に假りに今横濱小笠原島間の通信を開始しても音信が多くなると倚ほ一回線を増さねばならず、而も頗る不便なる制限を受けねばならぬ、若し横濱小笠原島線の外に横濱布哇線といふものを造るといふ事になれば全く非實用的のものになつて了はざるを得ない、故に無線電信は通常の商用として當分有線電信に代るべき見込がない、次に**第二の弱點**は

○**通信速度が低い**　事である、尤も電氣波の傳播速度は一秒間三十萬キロメートル即ち大約我七萬里で隨分遲くはないが、玆にいふ速度とは一分間に何程の文字が送れるか一本の電報は約そ何分間で返信し得るかといふのである、或は有線電信に比して無線電信の速度は二分の一、三分の二等云ふがそれは不穩當の比較て此場合にいふ有線電信の通信速度は實は機械の極限でなくて通信技手の手の極限で、之に對する無線電信機の通信速度は機械其物の極限速度を取つたものである、有線電信機の通信速度は一分間約八十字から百字といふが、これも通信手の腕の極限で機械の方では倚多くを出すことが出來る、而るに無線電信の方では今日の處

○**一分間四十字乃至六十字が機械の極限**　て此上通信手が働き得るとしても機械の方が働かない、尤も是は機械の改良と共に增進するのは勿論であるが目下の處では電波式には色々あつても之を起す方法は電氣火花を飛す所の發信法より外にないので、獨逸のスラビー敎授の如きは無線電信といふよりも電光電信といふ方が適當であるといつた位、此發信方法が根底から改革されぬ以上は速度の進歩は大概極限の知れたものである、而も此根本的改革は頗る大問題で再び物理的研究に立ち戻らねばならぬから今の處一寸その見込がない、即ち有線電信と此點に於て競爭する見込がないと云はねばならぬ、それから

○**第三の弱點**は　通常の電信に比して機械の複雜な事である、そして之を使用するには少からぬ熟練を要するのである、如何なる機械でも最初は皆人の力を多く要する、進歩するに從つて人の力を使ふ事も少くなる、最初は機械一分人力九分であるものが終には其反對になるのである、故に發明者技術家は如何にせば機械力のみで全部を働かせ得るかを目的として研究する、即

ち結局は經濟問題になるのである、所て今日の無線電信はどの位の程度迄進んて居るかといへば、實は未だ機械力六分人力四分位の處に止まつて居る、普通の電信機に比して非常な差てある、故に長距離の海底線を要する場合、海底線は一浬約一千餘圓も入るから其代りとして無線電信を敷設するとか、何か種々の事情がなくては不便なる無線電信を設計する必要はない、長距離とても通信多忙の商業用として未だ實用に適する や否や考へものである、嘗てマルコニー氏が大西洋横斷の無線電信を成効したとて海底電信を有て居る會社の株劵が下つたといふ事を聞いたが、そんな簡單な理由て下つた株なら買込めば儲かるてあらう、かくの如く無線電信は確かに實用界に入つて居るのは事實てあるが之が爲めに有線電信の領分を蠶食するといふ憂は徃々は知らず近き將來に於てはない、然らば

○如何な場合に必要であるか　といへば船と船との間、船と陸との間、其他島と陸との間にして海底線を引く程頻繁な通信もなく、さりとて全く通信のないてはないといふが如き場合て、多少の制限があつても忍んて之を計畫するには適當てある、而も船と船、船と陸との間には最も妙て、此場合には之れに優る通信の方法は他にないのてある、我海軍ても旣に明治卅三年二月から着手すると同時に、部內に其腦髓を作ることの方針を採り、今日では有力なる兵器として活用されて居る、それて自分の希望は爾後之を

○あらゆる商船と陸上各望樓各燈臺　に裝置するに至らんことてある、常陸丸佐渡丸の如きも若し無線電信があつたら如何てあらうか、又水難救助も何程か便利を得るかも知れぬ、且つ航海者の便利と愉快とが何れ程增すか知れぬ、今日の處てはたとへ缺點があり制限があつても、其必要が增して來るに從つて又進歩するに相違ないと信ずるのてある。

（完）

こは十月發行の第九號より續くものにして本紙に掲載せる說明圖は第九號及び本號の本文と參照すべきものなり

社交私見

巖谷小波

其三、訪問時間

已に人間が社交的動物てある以上、訪問應接の必要なる事は、勢ひの免れ難い所てある。

但し訪問にも二種あつて、一を用件の訪問と云ひ、他を交誼の訪問と云ふ、彼の留守見舞、病氣慰問、乃至不幸の弔慰の如きも、大方後者に屬すべきもので、茲に用件の訪問とは、全く何かの用務を帶び、その談合にのみ要する訪問を云ふので、これにはまた、その懇意の間柄なると、初對面たるを論じない。

　また用件ともつかず、交誼とも付かず、而も社交上止むを得ぬ事として、互ひに交換せねば成らぬ訪問もある。彼の大臣、公使等が、特に『受日』なるものを定めて、自邸に訪問を待ち受け、また他の受日には、此方からも訪問せねば成らぬと、殆んど一種の職務の樣にして居るが、此等を別に義務の訪問と云ふべきもので、彼年始、歳暮、中元などには、多く此類が行はれる。

　所で此訪問なるものが、我が日本の社會に於て、如何なる工合に行はれて居るかと云ふと、不規律、不秩序、將た不作法極る有樣では無いか、

　今顏洗つた斗りて、まだ新聞さへ讀まぬ所、甚しいのはまで寐て居る間から踏み込んで、下だらぬ長話に、朝飯の時間を奪つてしまつたり、今出やうと云ふ矢先に入つて來て、あたら汽車に乗り後れさせたり、食事の間際に訪づれて、序に自分も食倒しに掛つたり、その他、疲れて餘所から歸つて來て、ゆつくり休息しやうと云ふ所や、急ぎの取調などに追はれて、一心不亂に仕事をして居る所へ、平氣で座り込んで喋り立てるなど、相手の都合は一切關はず、只その氣の向き次第に、濫りに人を訪問するのは、眞に不作法の甚しいものである。

　尤も此種の不作法は、受方の不心得にも罪があるのて、その人間の在宅と不在とが、初からよく知れて居らぬから勢ひ此方の都合にのみ依り、行き當りバッタリ出た所勝負に訪問する樣に成り、よく〳〵會はねば成らぬ時には、寐込に行くのが一番確だと、さてこそ朝飯も食はぬ前から、その玄關を驚かす事に成るのだ。

　若し此際に、受方に訪問の受日を定め或は一日の間にても、客に接する時間を定めて、必ず宅に居る樣にすれば、訪問者も餘計な無駄足もせず、只の一度て用が便じてしまふ筈だ。

　然しこの時間を定める事が、今日の社會の有樣では、實は甚だむづかしい事て、よしんば自分丈定めても、他が同じ樣に心得てくれぬと、矢張り何の役にも立たないが、その皆が打ち揃つて、訪問時間と應接時間受

日とを、互ひに定めておくと云ふ事が、蓋し容易な事て無いのだ。

と云つて、誰もこれを初めなければ、何時迄經つても行はれぬ事に成るから、此所は一番奮發して、さう思付いた者から、まづその魁と成るがよい。そしてこれを定めた以上は、當初の不便は辛抱して、是非、勵行せねば成らぬ。さうして誰は何う云ふ規定と、世間の通り者に成つて、しまへば、（少くとも交際範圍に知れ渡れば）人もその心得に成つてくれ、やがてはこれに倣ふ樣に成つて、互ひに便利を感ずる事に成らう。

要するに、世が段々進んで、人が增々忙しく成つて來る時節に、この不規律な訪問て、貴重な時間を費やすのは、實に馬鹿々々しい次第である、何とかして此際に、社會改良の一歩として、訪問時間を定める事をお互ひに勵行したいものだ。

序ながらも云つて置くが、この訪問時間を定める事に成ると、種々な方面の來客が、一度に一堂に集まる事と成る。語を換へて云つて見ると、諸種の用向を帶びた者より、同時に同所て落ち合つて、相手變れど主變らぬ、主人に話をせねば成らぬ事に成る。

これは今までにもよくある事だが、其場合多くの人は、さほど秘密ても無い用事までを變にはにかみ、妙に勿體ぶつて、他人の居る間は、決してその用を話し出さず、他人の方でもまたその通り、此男が歸つてから、用談に取り掛くると云ふので、わざと他の世間話に時を移し、互ひに睨み合ひの體て居るから、つまり双方とも要領を得ず、主人は尚更迷惑をする、實に此位つまらぬ事はあるまい。

どうか此場合には、先客から先に口を切りて、どし〳〵用向を形付ける樣にしては如何に、それもよくよく秘密の事なら、一寸席を別にしてもらふも可し。また眞の重要な、且つ秘密の用事ならば、是は例外として、臨機に他の時間を定め、特別の會談とするも差支無い。況んや至急を要する場合は、元より遠慮には及ぶまい。

それから今一つ、特別の用向があつて、規定時間以外に會見を要する場合には、電話若くは葉書を以て、豫め照會しておくがよい。

又訪問の場合には、如何なる懇意の間ても、成るべく名刺を出す事にしたいもので、只口頭て姓を云つた斗りては、時として思はぬ間違を釀す。況んや世間には、隨分同姓異人のあるものを。――初對面や馴染

の淺い者が名刺も出さずに會見を求める如きは、蓋し不用意の甚しいものだ。

其四、手紙の事

手紙は筆頭の對話である。さればこれも訪問と同じく、社交上必要條件の一つでそれに用件的と交誼的と將た交際上の義務的とある事、少しも訪問に變りは無い。

然るに世間には、訪問の際居留守を使ふ事は無くても、手紙を貰つて返事をせぬ事は幾人もある。是亦不禮の一つであらう。

苟も人に話を仕掛けられて、返答を與へずに居られやうか。受けた手紙に返事を出さぬは、話かけられて返答せぬと、何の變る事があらう。實に片便りと云ふものほど氣色の惡いものはあるまい。

されば如何に忙しい場合でも、ほんの葉書一枚でよいから、返事は必ず出す樣にして、少しでも相手に不快の念を與へぬのが、眞の社交家と云ふべきである。

尤も手紙の方は、訪問とはちがつて、如何に長たらしく書いても、それほど時間を要するもので無いから、是はまた訪問の樣に、時日を定める必要は無いが、その代り最も注意すべきは、その文字の明瞭なると、辭句の簡明なる點にある。

なまじ筆意を見せびらかしたり、文章氣取つたりした手紙は、相手も不用の首をひねらせるので、手紙本來の趣意を達するには、却つて妨に成るものだ。

又手紙と云ふものは、用事の他には書くに及ばぬものと心得、用事の無い限りは、半年が一年でも、無沙汰で通す人もあるが、これも感心は出來ぬ話で、用が無ければ融の道、決して人を訪づれぬのと同じく、甚だ現金な話では無いか。

已にその人と交る以上、たとひ用事は無いにせよ、時には手紙で安否を問ひ、また自分の起居を報ずるのは、その交際を續ける上に、甚だ大切な事である。が、兎角手紙と云ふ奴は、用の無い時には書きにくいもので、つひ其爲めに無沙汰するが、この弊を矯めるのは、必しも難い事は無いと思ふ。

即ち一週に或る一日を、手紙を書く日と定めておいて、その日の一時間なり二時間なりを、此の爲めに特に費やす事と、今一つは、返事は必ず手紙を受けた時に、直ちに書くと云ふ習慣を付けるのだ、尤も熟考を要する事件、取調を經ねば出せぬ返事は、元より此限

りて無いが、さも無い以上、手紙の返事は直ぐに書く事に極めると、案外億劫でも無いものだ、

所詮面倒だの億劫だの云ふのは、自分勝手から割り出した話だ。然るにその自分勝手のみては、社交界は決して素直に通れぬとすれば、宜しくその惡弊を矯め、代るに善習を以つてする樣に、我、人共心を用ゆるのが、蓋し社交的勤物としての、相互の義務てはあるまいか

從軍餘談

○○生

僕は英國の戰時通信員某氏と同行したので、可成事の外國記者に關したものを書いて見やうと思ふて、其結果或は丸て戰爭に關係のない所謂「餘談」になるかも知れぬから夫は豫め斷つて置く、のみならず初めから順序を立てないから事が前後するかも知れぬ、其邊も承知して貰らいたい、

吾々英國民が中立地帶を通過するに日本政府の干渉は亨けぬ

遼陽の戰が濟んで、イザ、戰死打電の一段になると相變らず面倒な悶着が起つた、それは軍事郵便に依つて外國記者が打電し得る字數は僅かに五十字である、所で五十字の電報は各自に夫れ〲打つたが扨て個程の大戰、普佛戰爭以來の大戰たる此の遼陽の戰を報ずるには五十字は餘りに少數であるで營口から自由に打電をさしてくれと打揃ふて出願をした所が、それは却下されて其代り平壤（朝鮮の）からならば許すとの事てある、されど茲遼陽から平壤へは百幾里、如何に馬を驅つても道路が險惡であるから十日以上は費ゝらう、そんな事なら寧そ日本へ歸へつて打電しよふと、外國記者の三分の二は（壹軍、二軍を通じて、）歸國に決した、而して僕が同伴した記者も其一人てあつた、尤も二軍に配屬された外國記者の殆んど凡ては觀戰を自由に許さなかつたと云つて不平たら〲てあつたのて（其苦情は一軍にもチラホラあつたが二軍に殊に甚しく何んでも遼陽迄來ずに海城から歸つた者が六七名もあつたと云ふ）、之を機會に歸國に決したらしい、遼陽は戰鬪中から我軍の戰利を豫期して誰も彼れも少なくとも二千字位の電文を草して居たのである、それに記者自身が營口或は天津に行く事を許さないのみならず、通譯を遣す事も許さない、兎に角打電は平壤の局

以外には許ぬとなつたのであるから、其失望落膽の容は傍の見る目も氣の毒の樣であつた、

正直に言へば此時遼陽を出立した連中は凡て我軍に對して惡感情を懷いて居つたので、其内にも倫敦タイムスのジェームス氏とデーリー、テレグラフのバーレー氏の如きは（共に有名の軍時通信員）酷く怒つて居つた樣であつた（一時英國の新聞紙の論調が變つた抔と云つたのもこんな下らぬ事が原因であつたかも知れぬ）が兎も角も吾々は大石橋迄來て、之れから營口の方へ切れ樣と云ふので兵站部へ行つて問合せると「イヤ營口へ行く事は一切許さぬ、歸國するならダルニーの方へ行け」との事であつたから其旨を僕が通ずるとイヤ怒つたの怒らぬのではない、さなきだに不平滿々であつた彼等の癇癪玉は玆に破裂した眞末になつて憤り出した、中にも氣早い連中は荒川領事の證明書を取出して吾々は立派な英國民である、其英國民が中立地帶である支那の内地を旅行するに日本政府の干渉は亨けぬ、營口へ行くことならぬとは何事ぞ、吾々は露探でもなければ、馬賊でもない、御覽あれ吾々は日本陸軍省の從軍許可證も持つて居る、加之のみならず出立の砌藤井參謀長より營口へ行つて何の便船でも勝手に取れと言はれた、今更營口へ遣ぬとは何事ぞと、頗る鼻息が荒らい、兵站司令官は上官の命令であるから何ふあつても許さぬと云ふ、許すも許さぬもあるものかと外國記者は敦圍く、中間に這入つた僕の通譯こそ好い面の皮さ、

司令官は頑として許さぬの一點張り、外國記者は營口へ行くには不思議はない、勝手に行く、それを日本の軍隊で留めることが出來るなら留めて見ろ、拘引するなと、發砲するなと勝手に召されと頗る議論が激裂にそして極端になつて來た、初めの中こそ實は僕等も面白半分に何ふなる事かと傍觀して居たが、打捨置いては一大事と早速幹部へ駈け付け部長の某大尉に面會して事情を話した所が一應御目に掛つて話をするとのとに一旦兵站司令部を引上げて此度は幹部へ押し掛けた、（此の時にもう誰にも會ふ必要はない直ちに營口へ行く抔と云つた者もあつたが、兎に角同行する事にした）、部長が言に依れば許さぬと命令したのは實は旅行者の便宜を計つた次第で營口へ行かれても便乘すべき御用船がないのみか、汽車も昨日限り不通になつて鐵路が改造中である、それよりはダルニーへ行かるれば毎日必ず便船はあるし且つ汽車の便があるから諸君が

強いて行くと云ふならば敢て留めいはせねが、營口へは假令四里の短距離にもせよ徒歩なれば一日かゝる、而してダルニーへも一日なら樂に行けると懇々言はれたのでヤット得心がいつたらしい、何故外國記者が初め怒つたかと云ふに營口から打電するつもりはないのて實は各社共一軍、二軍へ各一人宛從軍して居るから其一人が前日馬を飛ばして營口を經て天津へ行き（或は芝罘より）夫れ〳〵思ふ存分に本社へ打電したのであるが、吾々一行は營口から便乘する積りて馬も馬車も大石橋で賣飛して仕舞ひ雇つてあつた清、韓人も悉く解雇して糧食は毫も携帶して居らぬ、それは營口へ行けばホテルもあるそして直ぐ便船を得られると豫想して居たに計らずも茲から百里もあるダルニーへ出よと言はれたから驚いたよりも寧ろ情なくなつて騷ぎ出したのであるが段々容子を聞いて見ると汽車全通しているとの事に漸と安心してそれなら別に營口へ行く必要もないからダルニーを見て歸へるも一興と評議一決して無事に濟んだか、憤り出した時の彼等の態度を今から考へて見るとイヤ紳士も何もあつたものではなかつた、

表裏ある米國紳士

今回我軍に從軍した外國通信員の中に所謂破落漢杯の居やう筈もないので我、人共に悉く立派な紳士の御揃ひだと思つて居たが、事實は吾人をして頗る失望せしめた、それは外でもない或る米國の記者、盛に博愛を唱へて、そして露兵の捕虜を見舞つたり或は途中で逢つたりした時分には一本何十錢とする高い葉卷莨を惜し氣もなく與へたり、時には金錢迄も惠んでやつたりする誠に博愛の主義に叶つて居るやうてあるが、さて其の平常を見ると驚かざるを得ない、第一自分が雇つて居る、清韓人には一文も給料を仕拂はないのみか、日本から連れに行つた通譯や從僕にも滿足に給料を拂はず、何んだ漢だと無理難題を吹き掛けて踏み倒して逃げた奴さへある、何んと立流な紳士方ではあるまいか。

▲舊人物　有磯逸郎

右は次號より號を逐うて掲載す、これ實に明治前半裏面の歴史也、當時隆々の名を馳せ、今野に隱れて靜かに其半生を送りつゝある偉人の再び紙上に躍如たるものあり



思潮

戰局の前途と滿洲問題

大石正巳氏

顧ふに戰局の前途は茫漠たり、前途の形勢は必らずしも樂天的ならず。我が國民は、堅忍不抜、更に非常なる決心を以て長期の戰爭を持續するの覺悟を要するに至れり。露國は最後の勝利を期せんとて、頻りに援兵の増發に努め、既に第二滿洲軍を編成し、今や本國より輸送を開始せり若し第二軍にして必勝を得ざらんか。彼は更に第三軍を編成し、兵力の多數を以て我軍を壓倒せんと揚言しつゝあり。其の意、蓋し連戰連勝の勢ひを以て北進しつゝある我軍を滿洲より擊攘して我軍の占領地を回復し、進んで朝鮮に侵入せんとの意氣込みなるべし。吾人は固より我軍が斯の如き不覺を取るものにあらざるを信ずと雖ども、然かも油斷大敵也。勝て兜の緒を締めざるべからず。殊に西伯利亞鐵道輸送力の意外に大なるは頗る注意に値ひするものたり。夫の貝加爾の廻湖鐵道も今や既に竣工開通し、而して冬期に至らば氷上鐵道若くは橇等をも利用するを得べく、従つて西伯利亞鐵道の運輸力は今後増加するとも、決して減少すること無かるべし。世人動もすれば、西伯利亞鐵道の輸送力を蔑視し、一條の鐵路何をか爲さんと云ふものなきにあらず。然り、西伯利亞鐵道の輸送力は固より無制限なるものにあらず、其の四十萬人以上の軍隊に供給する糧食を輸送するの力なしと云ふもの、根據ある說なるべし。然れども彼は非常なる注意を以て、其の輸送力の増加に力めつゝあるにあらずや。要するに露國は大兵を滿洲に派遣し、飽まで戰爭を繼續し、最後の必勝を期するものゝ如し、左れば我が國民も亦、之に對するの大決心を要すること勿論也。

滿洲を如何にすべき乎。之が處分策の細目は我軍勝利の程度に由て決せらるべきも、大躰の主義方針に至りては、開戰の當初も、戰爭最中の今日も、將た又戰爭終局の場合に於ても敢へて異なる所なかるべき也。我が政府當局者が如何なる方策を以て處分するかは、忖度するの限りにあらざれども、充分我國の權利を主張すべきは疑ひを容るゝに及ばず。昨年我か帝國が露國と時局の交渉を開始するや、我國の主張は、滿洲の主權を實際に於て淸國に還附し、而して世界貿易の爲めに滿洲の地を開放せんとするにありき。更に切言すれば、露國の主義は門戶閉鎖、利益壟斷にありき。我國の主義は門戶開放、利益分配にありき。我國は此主義を標榜とし、干戈を執りて露國と開戰したるが故に、終始一貫、此の主義の下に行動せざるべからざるは勿論なりとす。滿洲の領土を淸國の主權の下に措くも亦然り。淸國の如きは滿洲に於ける我國の態度を誤解し、我國が滿洲を押領して第二の露國たらざるなき乎を疑ふもの丶如し。然れども斯の如きは眞に杞憂たるに過ぎざるべし。何んとなれば我が國は今更世界の正義を欺きて滿洲を押領するが如き野心を毫も有せず、誠實に世界に向つて宣言したる所の主旨を履行せんとすれば也。

滿洲處分策の大方針は即ち以上の如くなれども、細目の條項に至りては容易に定め難く又言ひ難し。蓋し是れ戰局の發展如何によりて決せら

るべきものにして、前途の形勢未だ明かならざる今日に於ては、之を公言するの要なきを以てなり。東清鐵道は如何に之を處分して可なるべき乎。旅順口をば如何にすべき乎。抑も又如何なる程度まで滿洲に於て我國の權利を主張獲取し、而して露國の權利をば如何なる程度まで承認すべき乎。或は全然滿洲の野より露國の勢力を驅逐掃蕩すべき乎。或は滿洲處分問題に對する英、米との關係は如何にして、なる乎。此等の問題は大いに研究し、而して大いに主張せざるべからざるものなり。露國を滿洲より掃蕩したる曉には、領土保全、門戸開放と同時に、多くの犧牲を拂ひたる正當の權利として、我國たるもの滿洲に於ては其の優先權を占有すべきと是亦必要の條項たらずんばあらず。

滿洲處分策を講ずるに當りて、從來の行き掛り上、英、米兩國と相提携するを要すること、今更事新らしく云ふまでもなかるべし。抑も英、米の兩國は從來の行き掛り上、滿洲問題に多大の關係を有するのみならず、又實に具體的に利害の關係を有す。殊に米國は近來に至りて多大の商業的利害を有し、今後米國が亞細亞に於て求むる新市場は、滿洲を以て其最と爲すものゝ如し。現に米國の貨物は滿洲の中心にまで供給せられつゝあるにあらずや。英國は滿洲に於て米國の如くに商業的利害關係を有するにあらざれども、尙ほ關外鐵道(營口より山海關に到る)の重なる株主也。殊に政治上に於て多くの關係を有す。要するに滿洲に於ける利害關係は、我國最も大にして米國及び英國之に次ぐの有樣なり。左れば滿洲處分策を講ずるに當りては自然の順序として日、英、米の三國相提携することとなるべき歟。尙ほ吾人は他日、時機の到來を俟ちて、滿洲問題を具體的の方策によりて研究するの機あるべきを信ず。

今や戰爭の前途遼遠にして、終結の期を知るべからず。今日の策は唯だ長期の戰爭に堪へ、終局まで連戰連勝の名譽を持續するにあるのみ。且つ最近の戰捷……渾河附近に於ける兩軍の大會戰は、敵をして殆んど支離滅裂せしめたれは、遼陽の戰爭に遺憾を懷きたるものも、爲めに一時に溜飲を下げたるの感を生したるべし。然れども之に滿足すべからざるは勿論にして、却つて頑冥なる敵國をして倍々奮興せしむるの動機となるべきを豫期せざるべからず。

文部省と教育者

『教育學術界』

文部省と教育者とは敵にあらずして所謂同じ穴の狸なり、然るに兩者の間往々融和を缺くの觀あるは何等の原因に由るものなるか。法律的に解すれば、文部省とは教育行政長官たる文部大臣を指し、教育者とは各學校の教員を指す、故に各教員は文部大臣の統轄を受くるものにして階級上上下の關係をなす、換言すれば服從關係存するのみ平等のものにあらず、兩者の間往々相融和せざる觀あるもの或は文部省に於て此等の思想が事々に甚だ重く適用せらるゝに座するにあらずや。

凡て政治は單純に法令の適用のみに依て行はるゝものにあらず、政治上の方策と法律論とは自ら別路をなす。文部省の相手はかの内務省農商務省等の諸官省と違ひ直接人民に接するを甚だ稀に、主として教育者にあり、其交通は概ね教育者と各地方官との間に止る、隨つて如何なる法令の出づるも如何なる處分をせらるゝも甚しく爭ふこともなく、不當のものあるも大抵は泣き寐入りとなり、文部省獨りえらきものとなり了る。兩者の間の斯くの如き狀態は果して、教育行政を他の行政と同等若しくは同等以上の地位に上すに適當の方策なりや又教育の改良發達を企圖し且

つ秩序ある變化を來さしむる適當の方策なりや、吾人頗る疑なき能はず。

教育事業が内閣に於て兎角輕視せらるゝ傾きあるは必ずしも文部大臣の無能なるに依るにあらず、大なる後援を有せざること主なる原因なるべし。今日以後漸次元老てふもの死亡し、藩閥の弊去るや、之に代はるものは實に輿論の聲援によるに至る、これ必ずしも將來の事のみにあらず現在に於ても亦免るべからざることなり、若し文相の施設が、全國教育者の後援により、加ふるに在野教育關係者の聲援を有する事柄ならんか、其の勢力は決して侮るべからざるものあるを疑はず。何事も教育者に秘密にし、教育界の輿論に問ふことを忌みて教育者を疎外せんか、文部省は常に孤立に陷り、其の勢力は單に文部大臣一人の勢力に止りて甚だ薄弱なるを免かれざるべし。現文相は久しく野にありたるの人なれば此等の事情に精通せるか、就任後曾て文部省の忌み嫌ひし私立の教育團躰と握手し、其他勗めて在野の教育者若くは團躰と交らんとする傾向あるは吾人の甚だ喜ぶ所なり。吾人は更に文相が官紀の紊亂を來さゞる範圍内に於て益々教育者又は其團躰と和衷協同の實を擧ぐるに勗めんことを希望するものなり。之を以てかの教育を藩閥の紛擾に捲き込まんとするものと全一視すべからず、一に教育事業の擴張を計るの道として和衷協同の必要を述ぶるものなり。

教育上の法令を發して教育の主義方針方法等に變改を來さんとするに當り、從來は屢々ダシ拔けに發せらるゝあり、法令出でゝ始めて教育界に其の是非の論喧しきを生ずる等事理顚倒の例少なからず、教育の施設は多くは永久的のものにして、且つその結果の良非も數年若くは數十年を經ては知るべからざるもの、影響する處頗る廣く且つ深ければ、甚しき弊害なき以上は容易に變改すべきものにあらず、かの二三の顧問家の言に聞きて全國の教育を左右するの法令を發するが如きは頗る險呑の事なりと信ずるものなり、文部大臣も人なり文部省の屬僚も人なり、人なれば過ちもあるべく、考への足らぬ所もあるべく、且つや二人三人の考へよりも千人萬人の熟考を經たるものゝ危險なきは明瞭の事なり。すべての法令悉く然りといふにあらざるも、例之教科の增減、文字の增減變更、試驗制度、教材問題等の如く純粹なる教育事項の問題は、豫め之を天下に示して論議に上し、以て決定の資料に供するを可とす。現文相が學制改革の方針を示したるが如きは其の動機の如何を問はず吾人は斯の觀察點に本づきて之を贊成す。政略上反對を妨壓して强制實行を要する事項は秘密果斷を要すべきも、之と純粹なる教育事項とを混同せざらんことを望む。斯の如くにして始めてよく教育を重んじ、教育者を厚遇し、共に樂んで教育の整頓なる進歩發達を計るを得べし。只一年一回召集の高等教育會議に於て形式的に諮問するに止るが如きは親切の方法にあらず。

斯くの如く、吾人は教育行政の地位を上す點に於ても、教育の進歩發達を計る上に於ても、文部省は教育者若くは在野の教育關係者と成るべく其提携し、かの官民懇和會に於けるが如くしたらんには、その結果大に見るべきものあるべし。教育者はかの政黨の我利々々亡者と異なり、必ず和衷協同前述の効果を奏すべしと信ずるものなり。

所謂る個人主義の風潮

『時代思潮』

今日社會の一部特に靑年の間に一風潮をなせる個人主義に至りては、風趣全く之に異なり。彼等は徹頭徹尾自己の外に何等の教權をも規律をも認めず、從て何物をも信せず、何者をも愛せず獨り自ら標準となり、獨り自ら行はんとす。而も彼等の自ら標準たらんとするは必しも深く自ら

頼む所あるの結果にあらず。自ら行はんとするも而も勇猛一貫の大意志あるにもあらず。その上なる者は自己知識を頼み、自己の小天地を以て萬事を裁斷せんと擬し、その下なる者に至りては放埒不法を以て自ら高しとする者をすら生ずるに至れり。或はロマンテク風と稱し、或は煩悶を名として、天下只己れ一人の爲に存し、同胞皆自己の意の如くならん事を要求し、その意にして遂せざれば、憤激怒號して罪を社會に歸す。是の如きは個人主義の惡方面なり、而もこの惡風が今の社會に風潮の一をなせるは事實として認めざるべからず。彼等の或る者がニーチエを口にし、樗牛を崇拜すと稱し、天才を以て自ら居るが如きは、口を故人に籍るに過ぎず。彼等の中一人の眞にニーチエの意氣に同情し、その大文章を味識する者ありや、又眞に樗牛が短き一生の健鬪の跡を追ひ、その率直眞摯の性格を欣慕する者ありや。惡風潮の口實となりし故人こそ誠に迷惑の崇拜者を得たる者といふべし。

吾等は個人主義を以て直に惡風潮となす者にあらず、只眞摯の氣風を缺きて倘且つ個人の威厳を唱へ、勇健の氣力なくして煩悶を口にする者を以て惡風とするなり。個人主等なる者は個人に、自ら頼み自巳に忠實なるの眞摯ありて始めて個人心靈の奥に入り、その靈光の中より不屈の勇氣と率直の信仰とを發揮し來るべし。此の如くにして自己に忠なる者は決して獨り自ら高しとして、常操なき自己の思惑によりて徒に他を罵るの徒にあらず、必ずや自信の中に感應道交の甘味を味ひ來り、此に依て他の信賴すべき人に信賴し、渇仰すべき人に渇仰し、自己心靈の光明に一段の光輝を與ふべき偉人に接しては自己を投じて衷心の尊敬を捧ぐるを辭せず。ニーチエがショペンハウエルに於て眞哲人の意氣を發見して之を師父と仰ぎ樗牛が日蓮の光明に接しては一切の我執を投じてその中に流し遂きしが如き是れなり、一々の光線は各その處に從つて青色を放ち、赤色に照らす、その個人的獨立はこゝにあり、而もその個人的獨立は白光遍滿の源より出て又その本に復歸す。人間心靈の光は個人具象の心容に現はる。個人を離れて心靈の活動あるなし、而もその靈光の奥に入れば入るほど、その本源無量の大光明に入らずんば已まず。個人の心靈は個人を沒したる惡平等の團體主義の中に現はるゝ者にあらず、されど此と同時に孤立獨尊、本源の大光明に接しては其中に自己を沒し了ずるを敢てせざる者は終に惡差別の邪志たるを免れず、自ら頼む人は又人を信ず、自らを頼まずして自ら社會の中に沒する者は人格なきの人、而して人を信じ得ざる個人主義は終に眞に心靈の奥に入りたる個人主義にあらざるなり。

宗教家の恤兵

「時事新報」

今度の戰爭には各宗教家の從軍布教師として戰地に赴く者多し生死の境に臨める者に安心立命の道を與ふるは宗教の本務にして殊に戰地に於ける戰病死者の葬儀が宗教家の手に依りて行はるゝ時は死者遺族の滿足は申す迄もなく一般の軍氣にも一種の興奮劑たる効能ありとすれば宗教家の從軍は大に歡迎す可しと雖も是等從軍宗教家の事業は單に死者の葬儀陣中の説法のみに止まらずして此外にも更に心掛く可き者なきに非ず抑々社會普通の風習に慈善事業の如き多は宗教家の手に成るの常にして一は之を弘教の手段として効能の著しきと又一には宗教家の地位が他の煩雜なる人事に拘束せらるゝ者に比して是種の事に當るに容易なるが爲なる可し慈善事業と宗教家との關係斯の如しとすれば慈善の一種として見る可き恤兵の事も元來其道に慣れたる宗教家に於て相當の力を致す、、

そ其本分に協ふものなる可し固より宗教家の中には現に其邊の計畫なきに非ざるが如しと雖も今日に至る迄未だ他の注意を惹くに足るものを見ざるは遺憾なる次第にして此際特に其奮發を望むものなれども最適の恤兵もしくは遺族扶助の如きは公私の計畫、略ぼ其緒に就きたることなれば此上宗教家の事業として適當なるは自ら戰地に出張して直接に恤兵の事業に從ふの一事なる可し其方法として手近き一例は此頃一部の基督教徒の計畫に成りたる天幕倶樂部なるものあり同倶樂部は過般安東縣に設置せられ天幕内に書籍新聞雜誌樂器等を備へて軍人の出入を自由にし隨意に天幕内に就て讀書遊戲に陣中の勞苦を慰めしむるの仕組にして開始以來成績頗る宜しく大に軍隊の歡迎を受けたりと云へば僧侶其他の宗教家も之に倣ひ同種類の團體を組織して戰地の各方面に出張し軍人の娛樂慰藉と爲る可き各種の物品を備へて隨意に使用せしめ其傍ら時々宗教上の講話を試むるときは第一恤兵の目的を遂するに最有効の方法たると共に亦弘敎の一方便として頗る妙なるべし殊に我佛教諸派の中には資力の豐なる者少なからざれば其設備を大仕掛にして種々の新工風を應用するも難事に非ず今や戰地の氣候頓に一變し沙河遼陽の方面の如き溫度は氷點下四五度に下るの有樣なりと云ふ此間に在りて奮戰激闘する軍人の勞苦は想像するに餘あるに況していよ／＼嚴冬の期節に入り數十萬の將卒も其武を用ふるに由なき頃とも爲れば戰場の不快不便を感ずること一層切ならざるを得ず此際我宗教家が從來の布教師の如く說教葬儀を爲すに止まらずして軍人の無聊を慰めん爲めに種々の用意を整へ戰地に到らんには軍人一般の滿足一方ならざる可し我黨は世の宗教家に向て切に其實行を促すものなり

戰後經營の一策

農家の業務には尙ほ餘裕あり

農學士　恩田鐵彌氏

我農業組織は小農組織なり、勞力集約組織なり、之が組織を一變せんとは到底出來得べからざるとなり、都會熱流行して年々歲々農村より都會に移り、都會の繁昌を來すとも人口の增加は尙ほ之よりも長足の增加をなし、農村の人口は年每に增加しつゝある也、之れ事實の證明する所にして毫も疑を容るゝの餘地なし、只夫れ都會の壯大なるを見て何等の希望もなく漫然都會に轉すれば結構なりと云ふ考を抱きて都會に移るものゝ如きは大に戒むべきものなり、然れども世界の大勢より考へ又商工業發達の狀態より推考するに都會の勢年を逐ふて增大となるの傾きあるは數の免れざるものと覺悟せざるべからず然れども之が爲農村の勞力大に減少すべしとするは非なり、因つて止を得ず都會に移つるものは其儘とし、農村に殘れるものは擧つて實業に精勵し、其農村繁昌を圖ること肝要なり、全國到る處改良增殖の實を擧けつゝあるは農家が其業務に勵むの結果なるは勿論なりと雖も、人口增加即ち勞力の增加によれるとも亦疑ふべからざる事實なりとす。

又た農家勞働の程度は其地方により種々なるも、尙ほ幾多の餘裕あるを認むるものなり、農家は所謂朝に星を戴いて出て夕に月を踏んて歸り粒々辛苦するを昔も今も變ることなし、然れども終日絕間なく働きつゝあるか、又一年每日寸暇なく働きつゝあるかと言ふに、曰く然りと答ふると能はざる也。即ち仕事の遣繰をなせば尙ほ二割位の仕事增加したりとて間に合はすと云ふとなし、余は決して優遊時日を消却するものなり

と云ふにあらず、自己の爲になるべきものなれば尙ほ進んで之を成就する餘裕ありと言ふものなり、我農家は小農組織なり故に出來得る限り集約に副業を營むを最も利益ありとす、時間を有益に利用するには勉めて副業を營むにあり、今日養蠶を行ひつゝある地方は養蠶の進むに從ひ水田耕作を中止せしかと云ふに決して否らず、今迄通水田の耕作を行ひつゝあり、されば一年間なすべき仕事大に增加せしも自己の利益となるべきを以て時間の遣繰をなし少しも差支なき樣に勉强するもの也、製茶地方も亦然り、其他副業を行ふ地方到る處として然らざるはなし、而して單純なる農業を營む地方と種々の副業を營む地方と富の度を比較するに前者は極めて貧村にして、多くは土地兼併行はれ大地主跋扈の狀を呈す、後者は住宅園場能く整理せられ各戶豐にして土地兼併の如き極めて稀れなり、故に副業を興し農家の收入を增加するは農村改良上最も今の急務なりとす。

農家の行ふ所は概れ習慣による、此習慣たるや利害相伴ふものなり、從來より良法の普及して行はるゝは此習慣なるが爲なり、新たに良法あるも容易に之を採用せざるも亦此習慣あるが爲なり、故に此習慣を善用すれば大に農事改良の實を擧ぐることを得べし、從來行はざる事業を新たに副業として勸誘する場合其當初頗る困難なることあらんも、先つ數人實行し利益を占むるに至れは他の人々忽ち昨非を悟り之を行ひ自ら其地方の習慣となり、各戶必ず農家として之を行はればならぬものゝ如く思ふに至るべし。農家の無邪氣なる實に愛すべく憫むべきものありて存ずる也。

右の如き狀態なるを以て各地到る處進んで利益ある副業を營まざるべからず、而して其副業たる地方の狀況により區々一定すべからざるも果樹栽培は將來農家の副業として大に利益あるものなりと確信するもの也。即ち果樹の何たるを問はず其土地に恰適するものを撰み少きは一反前後多くは四五反位栽植せは勞力上左程差支を見ずして實行するを得べし、一反步の果樹園にても其利益たる尠小ならず、今假りに純益二三十圓とするも他の仕事に比すれば利益多く、而して此二三十圓は小農家の收益として中々小額と言ふべからず、害蟲の驅除、耕耘、剪定採取等に要する勞働は皆已れの收入となるべきもの故、事務增加により勞働の報酬も亦自ら增加したる計算となるべし。

右の如く各戶平均一反步前後の果樹園を設けたりとするも、農村戶數四百戶とし其半栽植するものとせば貳拾町となるべし、此反別あれば地方の產物として他に產出するを得べし、殊に年々歲々人口增加する有樣なれば或は其勞力を利用して尙ほより多くの反別を栽植し得るや知るべからず。

我農家の收入を增加するの道は其勞力を出來得る限り集約ならしむるにあり、果樹栽培の如き最も之に適したるものと言ふべし、且つ我農國は自ら園藝的なり、農民も知らずして行はざれば頗る頑冥なるも、知りて而して行へば頗る技術に長ずるの特性を有す、故に果樹栽培を副業とするは能く農家の特性に適合したるものと言ふて可なり

殊に戰勝後國富を增進せしむること愈出てゝ愈切なるの今日にありては農家宜しく此方針によりて邁まざるべからず。夫の山嶽丘陵に介在する農村にありては傾斜地を開墾し之に果樹を植栽すべし、思ふに十數年の後收益增加し其耕地價格騰貴し、農村經濟上利する所頗る大なるものあらん。

占領地開放

『東京朝日新聞』

戰線の推移に從ひ、東は鴨綠江畔より西は遼河岸に至り、北は煙臺よ



詞藻

少女の歌

里山生

迦毘羅釋種の儲君悉達太子、一日寢臺に横はりて、靜かに世相を觀じたまひける時、不圖、少女の低き調にて歌へるを聞きしに、(太子の感慨や深かりけん)忽ち其の顏色は蒼ざめ眼光曇れり、太子の胸中、自覺覺他の大願萌せしは、まさに此時にあらざるか、今其歌を譯出すべし、

人道の大なる柱　疾くこの都を去りて
古き聖　者の道に進め」。この裟婆世界にて
汝、正覺を成ぜし時　汝、全能を具せし時
普れく一切に甘露を灑げよ」。曾て汝は世界のために
汝の身と財とを抛てり　其生活の清き汝
禍ひより世の人々を救ひ出だせ」。謗りを忍べ、我の勝利者よ
使命を果たせ、人界の主よ　行け
行いて一切の邪と惡とを平げよ」。

＊　＊　＊　＊　＊

汝、世の光明よ　汝は前生に於てかく誓へり
「病と死の餌食たる人々のために　我れまさに其避難所たらん」と」。
ア丶、人界の主よ　使命を果たす時は來れり
菩提樹下に結跏趺坐して　無量壽位を廓然大悟し
そを普れく一切に施こせ」。汝曾て王たりし時
一人の臣來りて汝に乞へり　「王の領土を我れに與へよ」と
汝これを許して惑はざりき」。汝曾て德なき聖者たりし時
暴君汝の手足を斷てり　其時乳酪は汝の手足より流れ出でしよ」。
汝、聖者として山に住ひける時　王毒矢を放つて汝の體を射貫きしも
汝更に恨まざりき」。汝曾て羚羊の王たりし時
汝の敵たる獵師の　水に溺るゝを救はざりしか」。
汝象たりし時、そして獵師が汝を射し時
汝之を許し、剩へ汝の美はしき牙を與へたりき。」
汝曾て雌熊たりし時　雪の中に埋まれたる人を助け
草根果實を彼れに與へて再び蘇生せしめたりき
彼れ一命を得て其處を去り　再び來りて汝に刄を加へしも　汝疾く彼れを許したりき」。
汝曾て白馬たりし時　人の苦惱を除かんため
人の幸福を增さんため　惡魔の世界に駈け入りしよ」。
限りなき迫害　誹謗及び禁獄　死及び殺害
汝、愛と忍耐とを以て是等を甘受し　其の迫害者をも許して恨まざりき」。
世の人は汝を主と賴めり　彼等此の世を離るゝ時
梵天界に入らしめんため　梵天と十德の道に彼等を導びけよかし」。

歌

尾上柴舟選

○　　前田夕暮

聖堂のかねに暮れゆく野の岡に杖たてゝ見る古羅のあき

痛手負ひてゆふべさびしう母が手に歸る子に似て行くよ秋の水

はなれ來し柔手をしのぶ野の闇の樫の梢(こぬれ)に五位鷺なくも

溪川の水に喘ぎて小男鹿の岩くだるごときみにこそよれ

行く水や漂ふ雲や吹くかぜや秋はかなしきさだめに泣かる

なつかしき姉まつ小野のうそ月夜薄のかげにふとかくれみし

「銀鈴」のおとのさやけさ曉の野に詩のおん神の夢やぶるべう（以下四首師の詩集「銀鈴」を購ひて）

ほこりかに人に示してわれそゞろほゝゑまれぬる師の御集かな

はえおほき師の御集をば胸にいだきかへる夕べの月おもしろき

いくたびか胸に我手をさし入れてふれて見たりし師が歌の集

○　　若山牧水

山ゆけばわが身眞珠とまろがりて音(ね)をばなそごと秋は鳥なく

野の雨や野守の爺は柿とりに小さき簑着て萱わけてゆく

ほのじろうさ霧はれゆく草山やほがら山の日山雀啼くも

うらぶれの旅人森にきゝもせむちいさう撞けな秋鐘樓守

野はづれや草にうもるゝ朽橋を狐ゆく見ゆ水さむきあさ

見かはして思はば仰ぐ夕雲やあゝさびしみの秋よあね君

○　　米野町子

雨とのみ木の實軒うつ庇うつこよひも友はかべのわがかげ

君にとやさらばいのちもまゐらせむ法よ教よたゞ紙の文字

なさけしらず道說く君にさゝげてむ歌をいのちの人の

爪屑

板びさし音なき雨にゑみつるや栗の實おつるこの夜いねがて

○　本郷ひで子

まきこむる萩のしづくににじみにき劍とりますひとの御名の

寐みだれのわが影ほのかしら菊にしら菊かをるありあけの月

○　芳　外

君が趣(しゆう)は大きく深き井の水か綱みじかうてわれとどきえぬ(柴舟先生へ)

法を聞く靜座二時えたへぬよ達磨のをしへわれにふさはぬ

○　塚田柳虹

許しませ思出おほきこの秋のうたに一夜を君泣かせつる

冬の神の犧牲となるとも知らで咲くか名なし小草よわれに似たる草

草の香に醉ひてたゆたふ小羊のあゆみおそきに鞭あぐる世や

○　佐久間霧江

萬代に語りつぐべき名は問はずたゞ今日詩(うた)にほこりてあらむ

檜葉のかをり小百合のにほひ水の寂(さび)み山は夏のうたおほき地や

○　東　薫

なまじひにうらあたゝかきみ文得てまたも悶の子となりしはや

人の名にむねくるほしき歌を得ば罪なの戀と神ゆるしませ

○　岩村曲豆

龍姬が晝の宮居のつれづれに畫いて見しか墨繪おほ島

しづかなる秋の野ずゑのゆふばえや聖者臨終(いまは)の瞳(ひとみ)に似たり

○　林　碧血

秋の神の息吹はげしき闇の夜や枯れたる草に星ながれ落つ

木がらしに鳥の夢路やさむからむ魂よびもどせあけ方の鐘

このまゝに秘めむは惜しきあけ方の夢よ告げむの人いと遠き

闇をいでゝふと明るさに眼は盲ひぬ誇るに足らぬ人の世の才

○　　　　正富汪洋

君が袖の鈴に目覺めし歌の子のやさまみあからさそよ

新日の（以下二首「銀鈴」を讀みて）

わがどちは花草つみて冠つくり歌の王者が額に捧げむかな

質の帳に戀歌書きて家刀自にしからるゝ夜を雪のふるかな

罵の湖のなかにほゝゑみてわれかへりみて入れと云ふらし

前號正誤、待てしばし野の鐘撞くな秋しろう霧にまかれて夢さめぬ里、牧水、相逢うて語なきしばし何に落つる雫音あり暮秋の窓、高子

○歌募集　別に課題を置かず寄稿者の意に隨ふ　十二月十日限

布團

繞石選

丸うなつて嫗が寢ねたる布團かな　初聲

婚禮の送り荷美々し夜着布團　同

干し布團ぬくもりの猶ほ夜に殘る　同

釣り衾貰人日頃病あり　同

宵々や布團の中に伽斷　五湖

引きかぶる瑯き布團や浪る朝日　同

北風や布團の中に旅日記　同

木枕に布團をかこつ人數かな　同

脫殼の布團に猫の這入りけり　同

湯上りを仲びく〳〵と寢る布團哉　青龍

向きく〳〵に寢たる廣間の布團哉　同

寢たやうに工んで居らぬ布團かな　同

咳きて寒がる老の布團かな　同

いらへつゝ仲々起きぬ布團かな　五遷

歸省して悠々と寢る布團かな　同

宴席の坐布團並ぶ廣間かな　同

頰杖の布團の山の崩れけり　同

火事止んで又寢冷たき布團かな　白夢

甘酒に舌を燒かれし布團かな　同

老僕と布團に語る宿直かな　瘦村

一句二句布團の頃を三句かな　句仁王

長松が布團の中で返事かな　玄骨

輝にさはる布團の縫目かな　夕村

選者吟

絹布團銀屏半は引きまはす

幼きに起こされて布團かぶりけり

余が唯一の弟旅順口外なる某艇に在り過日布團を賴み來りしかば直ちに送りつかはしぬ

母君の手縫の布團ぬくからめ

一月分課題　新年雜詠　十二月十日限

二月分課題　寺（春季）　一月十八日限

俳句は東京市本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛の事

り南はダルニーに至る廣大の地面は今や全く吾軍の確實に占領する所となれり此時に當りて吾人の希望せざるを得ざる事は占領地の開放なり、勿論占領地の行政は軍事上の目的を主とすれども、差支なき限り私人に占領地に於る旅行又は居住營業の自由を與へて有形無形の利益を接受せしむるの法を講ずるも亦其必要あらずんばあらず。開戰後幾々の人々が目的を抱いて續々朝鮮に入り込みたるは世人の知るが如くなるが、之と同じく滿洲占領と共に占領地に赴きて或は視察し或は營業せんと欲するもの少からざるは事實なり。唯今日迄は占領地に一私人の渡來を許さず。是を以て特別の便宜を有するものゝ外、其希望を達すると能はざりき。是れは如何にも殘念なり。多數の渡航希望者の中には勿論歡迎すべからざる人物あり。又軍事上の都合が多數者の渡來を便とせざるともあるべし。されど之が爲に絶對に占領地の門戸を閉塞し、一般人民の渡航に由りて得べき利益を棄てゝ顧みざるは、得策といふべからず。歡迎すべからざる人物の渡航を防ぎ、又は開放の軍事上に及ぼす不便を除くには、自ら種々の取締法あるべきなり。而して此取締法の下に占領地の開放を斷行するの時機は既に到來せしなり。若し今後直に占領地内に於ける一般人民の住居營業を不便とするものあらば先つ旅行の自由だけにても早速に公許するを要す。聞く所によれば政府も亦全く其意なきに非ざるが如し、可なり、大に可なり、吾人は唯其速かに實行されんことを希望す。

占領地域内に既に外國貿易のために開かるべく定まりたるもの二箇所あり。一を安東縣とし、一を大東溝とす。外國貿易のために開くを以て便利とするものをダルニーとす。日本が我國民に對してすら未だ開放せざる此等の地方を、直に外國人に對して開放するは不可能の事なれども、滿洲の門戸開放は夙に吾國の動かすべからざる方針とせる所なるを以て、今後占領地の事情之を許すに至らば、或程度まで之を開放すべし。



評論

國民後援會に惜む所あり

松井柏軒

白璧に微瑕あるは太だ惜むべし。玲瓏として一點の曇なく。半點の疵なきは璧の最上なるものなり。假令夜光連城の珠にあらずと雖も斯の如きは太だ貴し。點翳微瑕以て白璧の價を下するには至らざるも。而かも人をして痛惜せしむるに足る

彼の國民後援會は。國民の意氣を代表し。政府及び軍人の後援たるを努めて以て征露の鴻業を完ふせんと

を期するもの也。其の國債募集の擧あるや。會の有志は京阪地方まで遊說して多くの應募者を奬勵したりき。出征軍人が滿洲原野の朔風に凍ゆるの虞ありと聞くや。檄を全都に傳へて毛布の寄贈を促がし。唯だ東京府下のみに於ても期月の間に十三萬餘枚を蒐集したりき。此の他新聞紙を以て輿論を興起し。或は屢々當局を叩きて功偲を致し。陰に陽に盡す所實に少からず。殊に其の國民の名を冠するに於て。外征將士の後援たるの効最も大なるものあり、現に天長節の佳辰を以て日比谷公園に大會を開き。廿世紀海陸軍に對して感謝の誠を表するや。當局大臣直ちに之を出征軍に電報したるに、時恰かも陣中に祝筵を開き。遙かに故國の大元帥陛下の壽を頌して盃を擧げつゝありし將卒は。此の電報に接して多大の感慨に打たれ。意氣益々旺盛を加へたりといはずや。國民後援會の價は正さしく白壁に喩ふべし。然り。白璧の上にあり

然るに唯た一點の微瑕あり。其の天長節に開きたる大會に於て。天皇陛下の萬歲を奉唱するに侯爵伊藤博文氏をして音頭を取らしめ。海陸軍の萬歲を唱ふるに伯爵大隈重信氏をして音頭取たらしめたると是れ也。此の二氏をして萬歲の音頭を取らしめたるは。岩谷松平なるものをして恣に萬歲の音頭取たらしめて折角の興を汚すと齊しく、國民後援會としては實に調子外れの仕方なれば也。調子外れよりも寧ろ恥辱に近き仕方なれば也

明白にいへば。伊藤氏と大隈氏とは。斯の如き名譽ある。而してシリアスなる公會に於て音頭取となるが如き資格なき人物也。伊藤氏の精力。明識。智慮。老熟は世に匹儔少く。余の傾倒する所なるも。其の公人たる資格に於て。紳士としての人格に於て。到底風上にも措けぬ人たるは。少しく眞面目なる人々の一致する所也。大隈氏の豪爽。磊落。勇邁なる亦一代の偉材たるべきも。其の人格に於ては伊藤氏と相距る五十步百步のみ。且つ二氏の人物たる。旣に過去の歷史となれり。今は唯だ一個古煤けたる骨董漢のみ。其の型や十八世紀式乃至十九世紀式にして。到底二十世紀式の

代物には非ず。而して其の骨董物たる。舊風の殿中に於て或は床之間の裝飾たるに適するか知らざるも。新式の室内には全く不適當のものなり。然り。日比谷公園に數萬の公衆が群至せる會合に於て。殊に率直に國民の意思を表示すべき新式の大會に於て。全く要なき骨董品なり

　思へ。伊藤氏は老齢六十を超えて尙ほ日夕醜業婦に巫山戯。淫酒度なく。大勳位侯爵の邸に白日公然藝妓。幇間。待合の女將と稱するが如き醜業者を出入せしめて恥なき人也。其の操行の野卑にして人格の下劣なる。到底正直なる人の交はるべからざる人たり。而して大隈氏の徒らに大言壯語して責任なき。時としては相場に手を出して豪奢の資を作るが如き。其の品格また淸廉を尙ぶものの歯列するだも恥づる所なり。之を侯爵伯爵といひ。大勳位勳一等といひ。從何位正何位といふは畢竟或る筋限りの沙汰のみ。人間としては實に卑むべき極の人々也。此の二氏をして萬歲の音頭を取たらしむると、彼の細君の葬式を廣告に利用し。幾多の妾を一室に併置して醜行を極むる岩谷松平をして音頭取たらしむると。果して何の逕庭かあらん。國民後援會の肝煎たりし人々若し岩谷松平をして當日の音頭を取たらしむる勇氣なくば。また伊藤氏大隈氏に請ふて音頭を取らしめざるべき筈也。肝煎たりし人々は。知らず松平をして此の任に當らしめて差支無しと謂ふ乎。巫山戯るとも大概にすべき也

　二氏に對して斯く評するも。或は苛酷嚴烈に過ぎたりとせん乎。現に國民後援會に名を列する人々と雖も。其の操行に於て純然たる小伊藤、小大隈たる人あるべし。唯り伊藤氏と大隈氏とを難ずる素より酷なるべし。然れども此を外にして尙ほ氏として國民後援會に於て斷じて萬歲の音頭取たらしむ可らざる理由あり。曰く二氏が侯爵伯爵たると也。曰く伊藤氏が樞密院議長にして純然たる官人たり。而して大隈氏も亦大臣禮遇を受けて。純粹たる國民の代表者たる資格なきと是れ也

　若し正當にいはゞ。當日國民に代りて　天皇陛下の萬歲を唱へ。出征海陸軍の萬歲を唱ふるの音頭を取る

べき人は。市長たる尾崎行雄氏を推さゞる可らず。然らずんば市會議長たる大岡育造氏にて可なり。然らずんば市助役たる中鉢美明氏若くは丸山名政氏にても可なり。之を聞く。始めは當日の會長たる千家尊福氏其の任に當る豫定なりしと。而して急激の間之を變更して伊藤氏に請ひ。大隈氏に求めたるは。來る可らずと豫期されし二氏が意外にも大禮服を纏ふて宮中よりの歸途來賓として出席したるを以て。俄かに音頭取に推選したるなりといふ。咄嗟の座興素より深く考へざるに出づべきも。亦以て國民後援會の肝煎たる人々が。心中何處ともなく尚ほ侯爵伯爵を崇拜し。大勳位勳一等を崇拜し。元老を崇拜する穢き根性の蟠まれるを窺ふべき乎。嗚呼是れ白壁の微瑕なり。其の國民の名義を冠して正當に。シリアヌに國民の意思を代表せんとする團體としては。實に痛惜すべき欠點也。汚點也。望むらくば純潔無垢なる國民の名を稱する後援會が。爾來半點でも斯の如き事を再びせざらんことを。

社會主義協會の解散に就いて

高山美中天

吾人は須らく寛容ならざるべからず、大國民的態度なかるべからず、同胞四千万、甚だ少しとせず、この中二三の非戰論者、社會主義者、國是に反對する者を出す、大火に注ぐ一滴の水の如きのみ、何ぞ齒牙にかくるを要すべけんや、宜しく之を放任して可也、許容して可也、とは或一派の論者が唱ふるところ也

頃日政府は彼の社會主義協會に向つて、斷々乎として其解散を命じたり、曰く治安に害ありと、而して或一派の論者が之に對して云々するところは、即ち其餘りに政府の狹量なりといふにあり、大國的寛容なしといふこと也

然り、政府の狹量なるは吾人も亦之を認むるに躊躇するものにあらず、若し日本國なる觀念の土臺を離れ、國籍を脫し、利害を斥け、此國土に對する愛をして全

然沒却せしめ、身を虛空に置いて而して瞰下すれば、吾人は彼等の唱ふるところを以て公平なりとするに憚らざるべし、然れども吾人の脚、未だ此土を離れず、此土を愛し、此土と利害を共にすれば、今日此國に取つて害ありと認め、吾人に取つて利あらずと見ば、たとへ其が大火に注ぐ一滴の水の如き微弱なるものにもせよ、之を排斥するに何の不可か是れあらんや、自己を保護するは萬物本來の性情也、生存競爭とは即ち其自己を保護するより起るものにあらずや、而して社會主義協會は今其生存競爭に敗れたる也

社會主義は、其學理、其理想は兎も角も、今日の我國是と背反する處多し、國家に對して多少の害なきを得ず、苟も害ありとせば國家は自家の生存上之を撲滅するに不思議あることなし、勿論吾人は非戰論者、社會主義者が爲めに一朝一夕に此國家の破壞せらるゝ虞れありとは信ずる能はざれども（また斯く信ぜらるゝに至らば、そは即ち社會主義の成功に近きなれど）國家安危の係る場合にあつては、要心の上にも要心し、石橋も叩いて見て後渡らざるべからず、勢ひ偏狹となるは自然の理也、吾人は寛容論者の爲めに例を引かん、君今千仭の谷に墜落せんとし、唯漸く一の巖角に縋りて攀ぢ登らんとしつゝありと思へ、而して又此念を作せ、君が縋れる巖の角を鼠の來りて覆へさんとしつゝありと、若し利害もなく、愛もなき他人より之を見れば、君が生命は鼠一疋の爲めに左右さるべからざるを信ぜん、而も君は此際一點不安の念を起さゞるべきか、能ふべくんば左手を伸べて其鼠を撲滅せんとは思はざるべきか、更らに寛大なる君が三思を乞ふべし

吾人は今たとへ社會主義を奉ずる一員として、其所謂理想的生活を望むとするも、未だ國民が社會主義熟の熟せざるに先ち、急劇に之を行はんとし、爲めに角を矯めんとして牛を殺すの愚を演じ、佛國革命の悲慘をして再び吾人の上に現ぜしめんとするは、生民の爲め忍び得ざるところなり、社會主義の理想を現ぜんとならば、宜しく漸を以つてせざる可らず、機運の至るを待たざる可らず、少くとも生存競爭に堪ふるだけ發

達するの時を期せざる可らず、此點より云へば彼の社會主義協會の解散の如き、社會主義者に取つて決して重き痛みにあらず、社會主義者の爲めに重症ならざると共に、またこれ國家の大幸也

偏狹、小量は忌むべし、寬大、雅量は尊ぶべし、併しながら社會主義協會に對する解散命令は、或は狹量の譏ありと雖も、吾人は之を以て時宜に適したる所置なりと信ぜざるを得ず

文藝時觀

文壇大體觀

緒方流水

▲何にか時文を書けとのとだ、時文を！時文とは時文とは文壇の評論を謂ふ、評論の價値あるものなくば時文も即ち已む、時文は空言にあらず、時文は時潮に觸れざる可らず、今や文壇は如何、不振、不景氣、平凡。平凡を忌めば何もない、其の癖私の書くことも平凡だが

▲先づ出版界を見よ、不景氣とは云ふもの丶新刊書日に一二を數ふ、月に四十五十を算す、不景氣？何の不景氣ぞ？盛んなる不景氣！濫出の不景氣！平凡の鉢合せする不景氣！不景氣も研究すれば面白い

▲新刊書日に一二、月に四十五十とは何を標準に云ふか、過去數ヶ月の實檢に依つて。或社の編輯局に寄せらる丶物、寄せられざるも廣告に見ゆる物、廣告に見えざるも現在書店に並べらる丶もの、これらを合算し、これらを割り出して

▲數としては不景氣とは云へぬ、これ程の物を受け入る丶胃の腑があるのだもの、購賣力があるのだもの

▲けれど注意せよ、毛色を分ければ幾色もある新刊書！唯だ大摑みの名だ、猶ほ人と云ふに同じ、人の中にはソレ歐羅巴人種、亞弗利加人種、マレイ人種、亞細亞人種、また其の亞細亞人種の中には日本人種、支那人種、朝鮮人種、其他色々ある、人が多いとて何にならう、人數の多い支那は弱い國だもの、出版物とても同じことだ、小粒て氣の利いた日本人は割に多くはない

▲月々に出る新刊書の中には、商工農書、生理衞

生書、科學書、教科書參考用書、實業書、宗教哲學書、料理、牧畜、政治、社會、教育、文學書類、其他いろ〳〵ある

▲種類は此の通りある、需用はさま〴〵、社會は廣し、月に四十五十、假しんば百も出たとて何で不思議だらう、不思議と云へば文學物の其の中で引立たぬはどんなものだ

▲雜誌は霜枯の此頃、文學雜誌の時文は一樣に倦んで、惡戯惡罵のみ流行し、五號活字はぼけて六號活字のみ腕白を極はむるを見る、恰も主人なき留守居に奴婢共の品定めを爲すに似て殺風景なること此上もない

▲敢て云ふ、文壇に時文はない、時潮に觸れぬ雜感を並べたとて、人の揚足を取り穴探しをしたとて時文とは云へぬ、雜感、揚足取、穴探しはあるが時文はない

▲看過さんにも看過されず、切實に感覺評論してこそ時文だ、創作の時潮に觸れ時潮を作る如く、時文も時潮に觸れ時潮を作る、時潮に觸れぬ創作はあつても、時潮に觸れぬ時文はない

▲看過せば看過さるる文、書かずとも好き文、空の空なる文、凡べて切實に感覺評論せざる文、これらのもの時文として雜誌に出て、甲論じ乙評す、或はこれを時文と云ふ、氣紛れ、てれかくし、仕樣事なしなど適當の名ならんに「時文」は好う過る

▲時文のみか、小說を見よ、書かずとも好き小說、讀んで益なき小說、作者其の人の外誰も興味なき小說、作意貫通せざる小說、邪路に陷りて誘惑する小說、神韻も技術もなき小說、これらは殆んど小說の十の八九に居る

▲尚一般の著作を見よ、思想徹底せざる著作、無暗に引き延ばせる著作、同じ思想の異體に假裝せる著作、衣裳のみ美しく體格備はらざる著作、麗語を並べたる著作、自惚を盡せる著作、要するに書かずとも可き著作、これまた十の八九に居る

▲或者は衣裳の美しきを喜ぶ、曰く、此文流麗誦すべしと、流麗！思想徹底せざる流麗！不健全なる流麗！讀んで頭に何にが殘るか、何にも殘らぬ、問ふて曰く、愉快でしたらう、答へて愉快でした、有益でしたらう、サア其れはと首を捻る、何う有益でした、否、有益だとは云ひませぬ、あゝさうでした、決して有益てはない、讀んで居る間面白いと感じただけ。けれど何か發明しましたらう。發明したやうなしないやうな、

讀んで仕舞つた跡には何も殘らぬ、あゝ、私は幻覺を見せられたのだ、チヨツ、忌ま〳〵しいと、誰も空文家の文を讀めば此の感を爲す

▲書を讀む、其の特色は如何、能く要領を得たりや、否や何程の見識、何程の創意其中にあるかを見よ、不得要領にして創見なくんば文章の華美も何するものぞ、讀んで面白し麗はしと見るものは一時の幻覺のみ、幻覺を生命とする著者、幻覺を樂む讀者は未だ云ふに足らぬ

▲著者の書を作る漫然、讀者の書を讀む漫然、破れ鍋にもどぢ蓋とやら、一方は濫作に失し、一方は濫讀に失す

▲今は著書の少きを患へぬ、寧ろ著書の多きを患ふ、百の駄作よりも寧ろ一の良著を待つ

▲カアライルがブラックに逢ふた時、ブラックは云ふた、我輩にはコレ〳〵著作があると、御當人余程得意であつたらしい、カライルは其の著書の名を聞き取りながら、うん〳〵頷いて、成程何れも好い、何れも結構、けれど何時君は苦心の作を出すのだと問ふた、ブラックはたうどう苦心の作は出さなかつた

▲人は思想の熟した時著作をすれば好い、一生に一つか二つ、一生思想が熟せねば一生著作をせぬも好い

▲徹底した思想なくして哲理を講ずるもの、人生の知識なくして小説を作るもの、彼等は皆な弦なき琴地を叩く

▲一道に達するには一道に達するの苦心を積む、琴、三味線の技に至るまで達人の苦心を聞けば人皆な感奮す、由來多くの苦心談を聞く、文士の苦心談ほど無雑作なものはない、文士は苦心をせぬのだらうか、事實は云ふ、然り、文士は苦もなく名聲を博すと、ただ大家にさへなれば好い！

▲利己主義の文士、著作は自己の利欲の爲にし、文は自己の名の爲にす、然り、凡べて皆な自己の爲めにす

▲自己の利欲の爲には一金にても多く攫得すれば足る、自己の名の爲には時好に投じて凡俗を眩惑すれば足る、緊肅は無用、超俗は野暮ときめ込んで世俗の歡功を急ぐ、今日は今日、明日は明日と、大抵の文士が此の思想に司配さるゝ、傑作のなきも、文壇の振はぬのも此の病弊の侵蝕に因る

▲利己主義今日主義と云へば韓人の話がある、此の春我が陸兵の堂々京城に入ると、悠々傍觀してゐた韓

人が、ヤレ〳〵貴君、何う云ふ譯ですと日本兵に聞くと、日本兵が、戰だ、露國を打懲らすのぢや、貴樣も手傳へと弄戯ふと、男は信じさうにもせず、貴君冗談を云ふ

▲無神經にも程がある、日露の何れが勝つも、韓國は蹂躙らるゝも、其の身さへ別狀がなければ好い、平氣の平左で、女房は今熊と挑み合ふて、どちらが勝つか分からぬ生命の瀨戸際にも、宿六は閑かに眺めて、あの熊が勝てば女房が死ぬ、女房が勝てば熊を羹(あつもの)にしやうと胸の中、何たる無神經の、何たる利己主義の宿六だらう、日露戰爭とても同じ此の胸で見る

▲けれど唯一つ無神經の韓人も氣配ふことがある、日本が勝てば大韓國は何うなるだらうと氣配ふのではない、大韓國の名を日本は變改するだらうか、何するだらうと、國よりも大韓國の名を氣配ふのだ、何うして〳〵、變改などするものか、日本は名などに頓着はせぬと云ふと、初めて愁眉を開く、日本勝手に戰さする宜しい、日本勝つ宜しいと、大韓國々々々、其の名に何の價値がある、大家々々、其の名に何の價値があると序でに云いたくなる

▲韓人には殆んど活潑に立廻はる商人を見受けぬ、彼等韓人は唯だ悠々閑々と暮らす、大事な住居でさへ碌々掃除をせぬ、彼等は互に云ふ、お靜かにお過しなさい、お靜かにお過してすか、お靜かにいらつしやい、お靜かにお歸りなさいと、呑氣に唯だ今日明日と過す

▲私は敢て文士が韓人其の儘だとは云はぬ、けれど何處か似た點はないか、差し當つて時局だ、戰爭は軍人ばかりでない、夫れ〳〵戰爭には義務がある、千載の一遇、實地を見たら斯道の利益にならうと、畫家、寫眞屋、講談師までが出掛けた、不思議なことには文士の半缺片も——新聞雜誌社の特派員の外は半缺片も戰地に出掛けなかつた

▲戰爭に關して小說家は何を書いたか、何も大したものは書かぬ、戰爭小說には美事落第した、事實に勝さる戰爭小說はないものにして仕舞はれた

▲何と形容したら好いか、多數の需用に應ずるでもなく、超然と世俗の上に立つてもなく、獨り好かりに物して能事終はれりとする態度を。名けて呑氣主義と云ふより外に言葉はない

▲新聞小說と云へば多數の讀者に讀まれる、雜誌や單行本の讀者よりは槪して多い、多數の需用に應じ多數の趣味を導くには恰好の手段だ、其の新聞小說をど

う彼等は見て居るのか、恰好の新聞小説家と云へば唯の一人もない、弦齋が流行るの、天外が受けるのと云ふても卑俗で話にならぬ

▲恰好な新聞小説家の一人位あつて欲しものだ、其れとも獨り好かりが矢張勝手で氣樂なのか知らん

▲イヤ色々と人事を云ふた、嘸お氣にさへたらう、お氣にさへたら出直しましやう、お静かにお過しなさい、お静かにお書きなさい、お静かにお儲けなさい、チヨツ、また怒られさうだ

傍若無人

孤村子

十一月の文壇は坪内逍遙氏の樂劇浦島て賑はされた。到る所文學者、批評家は此の作に就いて論じて居る。

『舞臺に上るてあらうか？いつ頃。』之は多くの作家や新らしい劇を見るのを樂んで居る人達の口から流れ出る。

『舞臺に顯はれるとすれば誰か演ずるてあらう？。』之は劇評家らしいのや氏の門下生等が早や取越苦勞して囁く言葉てあつた。然して此の作に就いて未だ誰からも評論らしい評論を聞いた事が無い。作者の坪内氏は今どんな心持て居らるゝてあらう。勿論强い自信力て創作せられたもの誰が如何なる評言を下すとも作者の地位からして見ても、動かされる樣な事は無からうが、あの若い作者が自分の初陣の作が世に公にせられた夕に持つ心を、今坪内氏は確に胸に持つて居らるゝてあらうと思ふと、自分は此の大家の姿を幻に描き出して面白い空想に耽けらるゝのてある。之迄云つて自分は此の作を評論せないのてある。今一度讀み直して讀者と新年の雑誌て見えやう。自分は例の通り比較的眞面目の作が公にせらるゝ小説雑誌に就いて評言を試み樣と思ふ。

○先づ新小説の未成年、小栗風葉氏の名が署せられて居る。讀んで面白く感じた。之丈けの觀察が風葉氏の頭腦に映ずる樣になつたかと思ふと。風葉氏に就いて祝聲を上げたくなつたが。側に人があつて曰く

『之はツルゲネーフの飜案さ！。』自分はガツカリして了つた。何の事つた、そんな事だらうと思つた。此の前も然うて平生立派な口を利いて居る帝文記者かへそ日記を擔ぎ上げて酷く面目玉を踏み潰したが、自分も迂濶に其の仲間入りする處だつたのてある。一體風葉と云ふ人は頭腦は空虚になつて了つたのか。此の間時事新報に掲載せられた長篇物も矢張飜案物ときいた。憐れぢやないか。描く事は其處等に轉がつて居る世態を見透す事が出來ず、然かも他人の作を自分の作の樣に誤魔化し――飜譯と書しあらず――て人目を繕ふなどゝ、作者として恥づ可き事だらうと思ふ。

○纖穗鷹千葉紫草氏の作てある。隨分新小説に掲載せらる可きものとしては長篇の方だ。此の人の名は今迄民友社に屬してゴルキーの飜譯のあつた時初めて其の名を聞いたのだが、美しい文章を書く人だと思つて居た。此の纖穗の鷹も穩に、美しう書かれて居るが、新進作家てあると特殊に書るされる樣な所はない。主人公の性格の研究も行屆いて居らず、恐らく作者の頭腦にも其の個性は明瞭に解せられて居なかつたのだらう、讀者には解し樣が無い。ある御話を聞いて、自分の文才のあるに任して

書下したのが大方此の作であらう。然ればロマンス派の文士が好んでする清新な感情、若しくはある概念を、豐富な想像力で書き顯はさうとする其れでもないのである。更に紫草君の猛省を促すとても云つて置かう。

○小山内八千代女史の縷紅、題からして難しい、此の女史は芝居道の方に懸けてはなか〱黒人の方とかで、歌舞伎新報に芹影女史と署名して盛んに劇評をして居られるさうだが、新小說に作を公にせらるゝのは初めてで千葉君と同じく初陣と云つていゝのだ。東京產れの方だから會話は仲々甘いものだ。田舍出の小說家はとても叶ふ事ではあるまい。全篇會話のみなので、一度ずつと讀んだ丈けでは話が頭腦に明瞭に這入らぬ繰回し讀んで解つたが、感心な諧家があつたもので、其の美しい精神に想止んで八千代女史は書かれたのだらう。性格が奈何の恁うのと云ふ作ぢやない。ほんのスケツチ。女として感心な方だ。折角勉强爲給へ。

○寂寞。飜譯家として名高い正宗白鳥君の作だ。隨分今迄に多くの作家の作に罵評を加えた事のある白鳥君としては餘り感心した作ではない。最初の書出しはありや何だと云つた一作家があつた。自分も然う思ふ。いくら省筆すると云つてもあれでは餘りひどいと思ふ。もつと書き樣があらう。だが面白い處を捕へて居る。少しは人生に觸れて居る所もあつて、云はゞ氣の利いた作品だが、如何にも技術が拙い、もう少し骨が折つて貰ひたかつた。格別主要な點ではないが個々の人物の上に配合せられた女性乙江の性格が頗る明瞭を缺いて居る。此の乙江が今一つ突込んで、はつきり書かれて居たならば、此の作は先づ成効した作であつたらうと思ふ。念を押すのは――小聲で――飜案で無いでしやうれ。

○久し振りで泣菫君の長篇の詩を拜見した。眞に之こそ隨分苦心せられたものであらうと思はれた。中絶えの卷、天降りの卷一二と、長く文界に聲を絕つて居たのは、此の作を公にする爲だつたのだらう。

あゝ生戀の鳴鏑
　黄昏月一重を射ぬき得て
仇矢ながれて自分の
　胸を篦深に傷けし
射手の熟練のほまれさや。

強く叫呼する身の胸に響く句であつた。一體泣菫君の作風であるが、之かれ少し前の句に

　譬へば皐月五月雨の

とあつて其からの譬喩がひどく近代風になつて居て。恁る神代の事を詠ずるに不適當な氣がした。ダンテは恁うした作風とやらだか、盛んに神代的の言葉が並べられてある中に豈い〱こんな句が目に閃くと、讀んで居る中に得らるゝ空想が、ふつ〱と掻消されるのである一事を煩はしたい。

○戀の火花。生田葵山氏の作だ。矢張り主觀的のものだ。主人公の勘二郎の個性は書かれて居たが副主人公の女性の性格は明瞭を缺いて居る。終りの金を女の父の紙屑屋に投付ける所が此の作の生命と思はるゝが今少し突込んで書いて貰ひたかつた。四ツ谷と千駄ヶ谷とは大分書いて貰つたから今度から少し外を書いて下さい。

○鶯鶯亭。喜劇と銘を打つて、太巨冠者作思案外史補となる。讀んで可なり面白く感じた。何處から何處迄も諧謔と云ふ事を押し擴げて全篇の結構が成立つて居るのだ。太巨冠者とは假の名、誠は英國へ往つて喜劇物のみを研究して來たある金持の息子さんの作ださうだ。息子さんと云つて卅四五ださうだが、其れにしても會話の熟達して居るのは感心なものだ。尤も之は思案氏の加筆もあるからであらう。無理と思はるゝものは鶯鶯亭で今輪加多志が前に宿つた部屋へ田舍者の名波梨太を又宿らす

事位である。而し終りの句、星影が七兩二分が五百兩とは…と云ふのは餘り氣が利きすぎる、もつと星影の性情に當てはまつた言葉があらうと思ふ。

○本年も之で濟んだ。新らしい年の文壇は甚麽態度をして諸君に見立るであらう。依然として何等の生命も無いものであらうか、多くの新聞は矢張りお家騷動的の小說や講談で紙面を埋めて置かねばならないであらうか、國に戰ひのある今、恐らく文壇は本年よりも隆盛であらうなど〻は何としても云はれないが、此の戰爭を經て、多くの人は今迄の樣に形骸に生きて滿足する事は出來ないのは事實なので、此間に何等か文學の新らしい生命の發芽があるのは爭ふ可からざる事であらう。然れば自分は本年の文壇を光榮あるものとして送り、來る可き文壇を大に望みあるものとして迎へるのである。

支那朝鮮に於て日本人の先づ最初に覺ゆる語はベカボン（馱目）といふことに候、又彼等の最もよく知れる日本語はヨロシイに候、されば我れは多く彼等に向つてベカボンを用ひ、彼等はまた何事にまれ我云ふ事に對してはヨロシイ〳〵を連呼いたし候、兩者の位置、御一考煩はしたく候



漫評

婦人と國贔負

血來山人

頭から惡く云へば、女は利己心の最も盛んな動物である、したが敢て女と云はね、男でもさうだ、男でもさうだが女はまた格別である、女といふものからマイナスの利己心は抑も何であらう、全くのところ等といひたい、此利己心が彼の長所で（よく言ふ奴だが）また短所である、此心が中心になつて八方へ其光線を發射する、利己心は原動力だ、善惡美醜の踊り出す傀儡師の人形箱だ。

然り再び言はう、女の原動力は利己心である、一寸言葉を綺麗にすれば自愛心、一歩廣くすれば家を思ふ情が强いので、細かく說けば我身贔負、良人贔負、家族贔負、更らに大きくすれば國贔負となる、國贔負とは體裁よくいへば即ち愛國心である。

これは善良な方面に發射した利己心の光線であるが、此理窟で押して行くと、其中心の熱が強いだけに、それだけ男よりも愛國心＝國贔負が從つて劇しくなければならぬ、玆て先づ斷つて置くが、利己と贔負とは理と情との差があるとは云へど、女の利己心は理窟から推した一定の考察を經てから出來るのではない、頭から感情的に打立つた利己である、故に贔負といふ、敢て差閊はなからう、だから動もすれば利己と情とが反對に走ることもある、併しこれは餘論に過ぎぬ。

兎に角、女にあつては利己心、身贔負が善良な方面に發達して、國贔負といふ女の愛國心が成立つのは事實である。

されば此利己心こそ、女に取つての一大事で、その發達の如何は以て其婦人の價踏みをするに足るのである、これは國贔負が薄い、駄目だ、これは中々國贔負だ、よろしい、かくて大は其國の一般婦人の程度が知れる。

然るときに、さる程に、日本婦人はどうであるか、勿論愛國心が盛んで國贔負で、上々吉と云ひたい、がまだ〳〵。悲しいが自分はさうは言ひ得ない、成程利己心は熾んである、贔負の引張り力は恐ろしく强い、或は千人力二千人力、滊車の機關車よりも甚しいかも知らぬ、併しそれは位取りが大に違ふ、コンマ以下に於てゞある、依然として自利己的である、家族的である、國は愚か村でも怪しい、近い例が、

「日本は善い國です、立派です、强いですな、」

と云はれるより、

「目鼻立から、お口許までお髮といひ、お樣子といひどうも云はれずお美しい、さて〳〵よいお娘ぢや」

と賞められる方が、何ぼう嬉しか知れぬではないか！

先づ歐米の婦人達と、國贔負の强弱を較べて見るが捷路である、これに就いての材料として、洋行歸りのさる先生が土產ばなし、未だに忘れぬ一事がある、それは尤も米國婦人の國自慢の强い例で、曰く

テキサス州は人も知る夥しい米の產地、併し其產額は夥しいが、其質の劣等なことは、日本米を口にした者には小糠と麴の感がある、而も米國の婦人達は、只其自國の產物といふ感情の上から、米そのものゝ味の外に、一種いふべからざる味を感じ、盛んに之を料理に採つて用ゐて居る、如何に之を日常の食膳に上さんかと苦心して居る、或はスープの浮かし等にも此無味な米を見ること度々である。

又ルイジアナの某處には、日本の錦光山を眞似て之と同樣の陶磁器製造所が出來て居る、ところで其品物は如何かといふに、到底錦光山出來の敵でない、擬物(まがひもの)は依然として擬物である、其價格はと問へば日本製の五倍とは實に驚くの外なしてある、然るに米國の婦人は一向頓着遊ばさない、これは苟もアメリカで出來た工藝品だ、アメリカの土でアメリカ人の手になつた品物だ、といつて珍重するのである。

このやうな思想は凡ての點に於て見得られると云ふてはないか、國贔負の如何、以つて推量するに餘りありて、これを我國の由來愛國心に富んでるてふ婦人と比較したら、如何てあらう、美い女だと云つて賞められるより嬉しき思ひのせない婦人と、較べやうにも初手から位取りが違ふてはあるまいか。

リボン一つ、香水一つ、石鹸おしろい、菓子類に至るまで、若しそれ品質の上等なのを求むれば、中にはジヤパン製の立優つたもの丶ないでもないに、舶來舶來と云つて崇拜する、日本人の氣が知れぬてはないか、ジヤパン／＼、成程耳に響きが惡い、併し巴里だとか倫敦だとかの音聲が、可愛く耳に響くやうでは、未だ以つて愛國心、國贔負を語るには足らぬのである、即ち利己心、身贔負の熱の發射が弱いのである。但し粗品は粗品、精品は精品と一口に言つて了ひ、ジヤパン製は粗(わる)いので、舶來は善いのと相場を定めて掛れば、自分も敢て一語なしだが、自國產といふ感情上の特別の旨味(うまみ)が知れぬうちは、矢張り愛國も贔負も解るものでないと、自分はいふ。

お叱りを蒙るか、但し利己心の最も盛んな動物といふ、勿體ない名號を奉らうか!?

ちり紅葉

杉の葉

◎小說家の勢力も次第々々に盛になる。德川時代の戲作者はいふまでもないが、明治になつても紅葉露伴が賣出した頃は、まだ小說が一の職業として、生活の道が得られやうとは思はれなかつた。ほんの道樂に過ぎなかつたものを、何時の間にか讀者が殖えて、今では一流の大家になるか、二流以下でも俗受の作家になると、隨分收入も多いやうだ。殊に小說家の人氣は日に月に盛になつて、婦女子に於ける評判は、まあ役者を除いて、外に類はあるまい。先づ男子中の人氣者は、藝者社會に於ける役者。女學生間に於ける青年小說家であらう。婦女子に同感の涙を灑がす作家になると、見ぬ戀にあ焦れてゐる女が少なくない。それて女學生が同盟間て、贔負作家の話に現(うつゝ)を抜かす有樣は、さながら藝者や町家の娘達が、羽左衛門高麗藏など贔負役者に夢中になると同じ事。

◎小說家でなくとも、文士は一躰に少しづゝは贔屓があるが其の隨一人は姉崎嘲風であらう。この人の書いた者は、どんな小六ヶ敷者でも賣れる。時代思潮とか復活の曙光とかいふ女などには分りさうにもない者も、姉崎さんの筆の跡となれば、女學生さん達が、無け無しの財布をはたいて買つて吳れる。又この人の演說となると、蝦茶袴が押かけるので、會場は常に賣切れの札をかけるに至る。其理由を尋ぬれば、嘲風先生は眉目清秀、文壇の業平樣であるからだ。美貌の力は單に俳優のみてはないわい。

◎批評家といふ者程下らない者はない。それも逍遙とか鷗外とか學殖識見一代を壓する人になると別だが、今日文壇にうろついてゐる美術文學演劇の評家になると只藝術家の道具に使はれる丈で、器量の惡い役廻りだ。それて提灯持もいやだから、思ふ存分やつつけると、四方から恨まれて、出世の邪魔になる。今の小說家とか畫家とか役者とか、皆度量の狹い、膽玉の小さい手合ばかりだから、一寸惡くいはうなら、其れが當を得ても得なくても、一晩位眠れないで氣にするし、少し褒めやうなら、いゝ氣になつて增長する。一躰作家が評家に對する態度は、何でも褒めさせて人氣を取り、一部でも澤山著書の賣れるやうに提灯持にしやうといふにあつて、二流以下の下品な作家になると、わざ〱自分の著書を持つて批評家を歷訪し、お世辭の二つ三つはいつて、お引立を願ふ。まさか明ら樣に男らしく、褒めて下さいとはいはぬが、底意はいはずとも知れ切つてゐる。こんな手段で、方々て褒めちらせた爲に、下らない小說の非常に賣れた例が澤山ある。殊にかゝる作家が新聞社にてもゐやうなら、一層其の運動の効目が多い。

◎新聞の勢力の加はると共に、新聞を惡用する者が次第に殖えて來る。「おれの書いた者を褒めぬと後の爲が惡いぞ」「おれの作を演ぜぬと新聞てぶつ叩くぞ」と底氣味の惡い嚇し文句を並べる者もあるさうだ。所で今の人間は利口だから、先々の事を考へて、新聞記者の御機嫌を取つて置く。新聞記者いよ〱增長して、惡く小說惡劇を作つて世の中を困らす。萬物一利一害は免かれぬ者て、新聞といふ文明の機關も有つてよいやら惡いやら。

◎俳優と文士との接近も次第に流行しだした。昔は役者は直ちに市井の徒を相手にして、輿論て自然の運命を定めてゐたが、今は文士の筆先て輿論を動かしたり、役者の價値を增減するやうになつて、役者が頻りに文士に叩頭平身して愛顧を願ふやうになつた。元來役者は何十年舞臺て苦勞してゐるし、多くの文士は月に一度か二度芝居を觀るに過ぎぬのだから。教を乞ふも何もあつたものぢやないが、例の人氣取の道具に使ふ爲に、頻りに媚を呈する。文士先生祝儀もやらぬのに、役者が伺候して先生々々と奉るので、大得意になり、臆面もなく技藝について彼此と敎へてやる。役者どもがお後て舌を出して笑つてゐるのも氣がつかぬお目出度さ。舊俳優ては市川高麗蔵、新俳優ては藤澤淺次郞などは最も先生樣に接することが多いので、大分學者仲間て評判がよい。其の實技藝に於ては大大根てあるのだが。

◎赤門稻門の文科を出て少し文章を書かうとなら、直ちに文士として人の口の端に上り雜誌などで囃々されるが、皆人生の經驗も乏しく、天才のある人も少く、多くは眞價のない者計り。却て新聞の雜報記者などに、中學校の門もくゞつたことのなくとも、中々名文を作り得る人がある。一躰今日は學者が馬鹿に威張つて、何ても彼ても無學者に勝る如くいふが書物から來た智識は皮相な者て、人世と苦鬪して來た人の考のやうな深刻な點はないのだ。又嘲風大家を例に引出しては、少し氣の毒だが、この人の書いた者はお目出度さの極てある。氏は大學を卒業して洋行し、

歸つて來ては大學教授といふ閑職にありて氣儘に日を暮らし、生活の困難とか人世の煩悶とかを、痛切に感じない。口先で煩悶とか何とかいへど要するに道樂に煩悶を弄んでる手合だ。だから世の中と戰つて來た苦勞人の目から見れば、丸で赤ん坊だ。釋迦や孔子の眞の解釋の出來る筈もなし、戀の味も分る者ぢやない。しかし活字で印刷した横文字の紙切を讀む者が跋扈する今日、姉崎博士の議論なども有難がられて、アグネルだの神秘だのと聞いた風な事を、言いたい丈云はして置いて、學者だの物知りだのと珍重するのは片腹痛い次第である。

◎藝者を泣かす小說と、蝦茶式部を泣かす者と、何れか演じ易き。帝國大學生を泣かす芝居と、魚河岸の兄貴を泣かすと何れか難き。本鄕座の書生芝居は男女學生に滿ちてゐる。彼等は高田藤澤に讃喜の涙をこぼせども、梅幸羽左衞門の藝は猫に小判の觀がある。蘆花の不如歸に再讀三讀して趣味とか何とかいへど、都新聞の續物に困惑する藝者娼妓と、何れか人生を深く知れる。趣味の深淺はどちらであろう。人生を經驗する一日多ければ其れだけ、學問の價が無くなる。

如是我聞

鶉紬子

▲大隈伯爵は老て益々壯に毎も變はらず雄辯高談、四筵を驚かし、聽者をして啞然たらしむるの慨あり、殊に近頃爲したる伯の養鷄談の如き、其算數の粗笨なる驚かさらんと欲するも得ざる也、伯曰く

人の慾望は妙なもので花や樹木に慾望を滿足しつゝある吾輩は今度鷄を養て動物に對する慾望を充たさうと思ふので既に邸內後方に養鷄場を作りつゝあるが、まだ雛の出來上らぬ先から鷄はセッセ卵を生んで居る凡てどんなものでも研究して見るとナカナカ趣味のあるものであるが、吾輩は此の鷄の雛を孵へすのに母鷄の體溫と人工的の溫度と兩方から遣て見たが、人工的で遣た方の雛が一層活潑である、凡そ人間でもあまり母親に依らぬ方が善いかも知れぬ。サテ此の養鷄事業は日本全國の人々にも勸めて遣らしたいと云ふは外でもない、鷄一匹の一年に生產する卵の高は凡そ三十圓に達すると云ふではないか、其處で吾輩思ふに全國の戶數を一千萬戶と見て一戶一羽の鷄を飼つたらドーダ、卽ち一年間に總計三億圓の生產がある道理だ、今日我國は戰時財政の爲に七千萬圓の增稅をすると云ふて喧聞しく騷て居るが、安んぞ知らんや一戶一鷄を飼養するとせば三億圓の軍費を支辨する亦易々たるに非ずやと

大隈伯は未だ鷄を知らざるの人なる可し、膽何ぞ夫れ容易にして無稽なる、養鷄事業は特に農家の副業として最も收益多きに相違なきも、到底伯の言の若き能はず、善泳者善溺る、善く談するの伯爵往々にして此の失言あり。

▲一日函嶺に遊び、塔の澤環翠樓に投ず、天下無雙の勝區、況んや秋高く氣澄み、滿山の紅葉黃葉、錯綜して其美觀名狀すべからず。環翠樓主人書畫を好み、來投するの客にして能書の者ある、乃ち揮毫せしめ、名流大家に在ては懇筆と雖も、復又然り求て而うして之

を額にし、懸物にす、其種類甚だ多し、余の眠りたる室は三層樓にして建築の材皆神代杉を以てし、所謂神代閣と稱するもの、額する處の額頗る多し試みに見んか

蘆荻無花秋水長、慘烟微雨似瀟湘
雁聲搖落孤舟遠、何處靑山是岳陽

とは西園寺陶庵の揮灑する處にして筆勢蒼硬、頗る可なり、詩は漁洋山人の作なれば惡き筈なし、而して是は懸物なり、伊藤春畝翁は乃ち

天晴嶺上白雲飛、山陰禪林人迹稀
老骨吾遂誇健脚、孤筇獨背夕陽歸

塔ヶ峰に上り、瓢酒盡て歸る、途上一絶を得たりと云ふもの之なり、詩は甚だ拙、奈何に翁に阿比するものと雖も、此の詩には恐らく稱賛の辭に究すべき也、翁の筆蹟に至ては近來大に見るべきものあり、是は翁の勳爵位記の餘澤と云ふてなり、凡て俗人は好て人爵を崇拜する處より翁の若き勳位高き人の斷簡零墨をも之を得て榮とす、即ち恭敬して揮毫を請ふ、驕傲心の强き翁は求めらるゝに從ひ、得意の拙筆を弄す、弄するに從ひ、筆勢自然に洗練し終に今日に至れり、翁の書札の巧は洵に之に由る、外に淸浦奎堂、榎本梁川等の筆墨弄せるもの其拙惡云ふに足らず、單り淸人梁啓超の『神山福地』と題する額あり、筆力遒勁、古人の筆札を見るが如し、卓如文を善くし、書を善くし、亦當今の務に通じ、賈宜再生の目あり、然り梁卓如一たび筆を揮へば萬言立ち處に成り、眞個賈宜の壘を摩するの慨あり、然れども卓如遂に文字の人のみ、近時杳として其消息を聞かず、何處に眠食する乎。

▲後藤棲霞(新平)詩を作り復た書を善くす、總督民政長官として聲望甚だ高く、平生未來の國務大臣を以て自から居る。臺灣の阿里山中に大森林あり、太古以來樵斧未だ曾て山に入らず、後藤棲霞の前任者にして未だ探査せしものなし、棲霞太だ遺憾とし一行結束して深山に入り終に目的を達して歸る、曰く年々八十萬圓の木材を閥り出て百五十年間繼續し得べしと、國家の好財源と云ふべき也棲霞歸來詩を賦して曰く

阿里山與新高山隣接、拔海八千尺、森林地帶分爲二、其在六千尺之地者、爲廣葉樹、則樫櫸也、其在七千尺之地者、爲針葉樹、則檜也大抵長百二十尺、徑二十尺、其數不知幾萬、嘗讀趙甌北樹海歌、竊以爲文人誇張之言、今見此森林、始知歐北不誇張、尤未盡形容、蓋自勘驗以來、實環地球所罕見者

跋涉高山又大河、巡行不暇惱詩魔
無詩恐被騷人笑、吟斷雲菘樹海歌」
眼前風物動吟情、詩料過多句不成
一片心期何處寫、筆鋒甌北自縱橫」
甌北歌成有幾年、爾來樹海豈無緣
欲全天意隨人意、莫怪開山我着鞭」

鬼面魔語

酔美生

▲己れの女房は堅氣にして他人とは口も利かざることを願ひ、他人の妻君は浮氣にして己には横目の一つも與へんことを欲す。人は何處までも横着なるものかな。

▲世に自然自棄の人程恐るべきなし、己に望を現世に絶ち、又救を未來に求めず、故に彼れ爲さんと欲して爲し得ざるものなく、彼れ爲さゞらんと欲して爲さゞるを得ざるものなし。故に基督も曰く、爾等身を殺して魂を殺すこと能はざるものを懼るゝ勿れ、唯なんぢら身と魂とを地獄に滅ほし得る者を懼れよと。

▲學生にしてかゝることをなするは宜しからずと一小些事を捉へて嚴しく叱するの人が、社會に立てる紳士に向ては十倍廿倍の惡事をなすも當然の事として何の怪しむ所なきが如し、由來學生に向て酷に失し、紳士に對して寛に過ぐるは我社會の通弊なり、かるが故に久しく束縛の下にありし學生が、一旦紳士として自由に行動し得るに至れば、あらゆる不善不德のことをなして恬として恥づるなし。予は寧ろ學生には多少の過失を恕するも紳士には嚴格なる操行を求むべきものなるを思ふ。

▲文學博士坪井九馬三氏は今の學者中にあつて最も異彩を放てる人物なり、其說く所の歷史は趣味ある談話と奇拔なる論斷とに富み、大勢の推移、局面の轉換明かに解せられざることなく、人物の性情、事件の眞相詳かに知られざることなし。其露國の形勢を地理學上より說き、以て將來の運命を論じたるもの頗る聞くべきものあり、即ち露國は其歐洲の本部より西は獨逸まで、東は太平洋岸まで地勢槪ね平坦、山と稱すべき程の山は殆んとあることなし、(烏剌拉の如き地圖にて見れば蜿蜒たる大山脈の如きも實際旅行すれは何時之を超えたるかを覺えぬ程なり)故に露國にして大野心を起し、積極的大行動をなせば獨逸、支那の如き亦其併呑範圍にあり、滿洲、朝鮮の如きは論ずるに足らず、我日本の如き亦知るべきのみ、只露國をしてかゝる行動をなさしむると否とは、我國を始め他列國の同心協力其勢力を挫折し得るや否やにあるべきなりと。

▲宗教にとつて尼の布教程効力あるものなかるべし、宗教とは元來感情的のものなり、女性も亦感情的のものなり、其感情的の女性が世を果敢なむが如き悲慘の事情ありて尼となり、(悲慘の事なくして眞に尼となるものなし)全く感情其物の一塊と化して、而して感情的の宗教を說く、其感情の激甚なる如何なる木石男子をも動かさずんは止まざるなり、これ故に古來布教にとつて尼の効力最も大いなりしとは坪井博士の說なり。

▲詩歌又は戯曲等の如き韻文的のものは總て音讀すべし、蓋し韻文は音樂的にして文意の外に一種耳に快き諧調をなせばなり。

▲今の青年男女が描く所の思想は彼等が世に立ち、又は人の妻となれば直ちに消え失する割にして深く憂とするに足らず、吾は寧ろ苦き現實界に入るの前暫らく此甘き夢想境に遊ばしむる事の功德なるべきを思ふ。

▲法學博士和田垣謙三氏は極めて多趣味なる人にして其談論常に他人の及ぶべからざる色彩を帶ぶ。頃者三氣哲學なるものを説じ、氏獨得の論の如何なる者なるかを示せり、其説に曰く、世界幾億の人其性情個々相異るが如きも之を大別すれば終に陰氣、陽氣、平氣の三氣に歸せざるものなし、而して日本人の性情は多く陰氣的にして其風貌概ね華厳瀧に赴かんとするが如し、かるが故に總ての事物を悲觀し易く、絶えて積極的の大業をなすものなし、陽氣又動もすれば浮華狼狂に失するの嫌あり、獨り平氣に至つては山嶽前に聳へ、江海後に躍るも自若として動ずるなく、進むべきに進み、退くべきに退き、決して自己の確信、主義を忘るゝことなし、我國民亦此平氣の風を養ひ、以て所謂大國民たるの道を講ぜざるべからず。

▲古川市兵衛氏が運氣、鈍氣、根氣を以て三氣となしたる、守田寶丹氏が三脈一致の論ある又夫々一種の趣味を備へたりといふべし。

▲米國より歸來せる人の話を聞くに彼地に於ける妙齡の女子は皆髪に黑きリボンを用ひ、頗る意氣なるものありと、我國にも遠からずしてかゝる流行を見ることあらんか。

▲野口米次郎氏の米國日記は聰明なるものが無邪氣なる記述を作らんと勉めたる跡ありて、文に天眞の流露を缺く恨みあり、主人公朝顔孃は徹頭徹尾ハイカラ式の女子にして、憖ひに無邪氣を裝はず露骨に批評的觀察をなしたる部分に却て鋭利勁拔の見解少からず。

▲魚市に入つて鮑魚の臭を忘るゝが如く、總ての事物は馴るれば感覺力微弱となるを常とす、醜女交つて醜ならず、美女親しみて美ならずの評あるも亦此理に外ならざるなり。

▲女子は一般に肉交後に至つて愛情の熾盛を見るといふは、一は確かに其社會的境遇より養成せられたる自然の結果なるべし、蓋し女子一度肉交的關係を生ずれば容易に他人と婚すること能はざるに至る社會の風習なれば、女子は肉交ありし其人に必ず身を任せざるべからずとの心情勃然として起るものならん。

▲東京座に於ける高麗藏ののつそり十兵衛は近來になき上出來なり、不如歸の武夫を見て失望せる予は、柄にもなき大役をせんとの惡野心を起せるものかなと彼の爲めに惜しみつゝありしに其實際を見るに及び、其科白廻しといひ、其仕種、表情といひ、殆んど十兵衛其人を見るの思ひありしは、其苦心決して尋常一様にあらず、十兵衛其人の精神にもをさく劣らざりしを思はずんばあらず。

▲又密かに思ふに高麗藏の十兵衛は高田の馬鹿蝶次より得たる所少からざりし如く見えしは僻目か。

▲新作とあれば其價値の如何を問はず、爭うて此れを演せんとするは當俳優一般の惡風潮なる時、獨り歌舞伎座が舊劇の粹の粹なる假名手本を一番目となし、中幕、二番目亦近松物、所作物を出して舊劇の美を發揮せんとするは殊勝なりといふべし次興行には伊賀越にても出しては如何。

▲相當の名を賣りて、而かも予の好まざる俳優は訥升と藤澤なり、されど訥升は踊に於てまだしもなれ、藤澤に至つては一點の特長あるを見ず。

▲一寸歌舞伎座の短評を記せんに羽左衛門の勘平は近來の上出來、怒て起つ兩士を止めての科白廻し、他人の及ばざる妙味あり。平右衛門は中、判官は失敗。蓋し判官を餘りに立派にせんとして力足らず、おとなし過ぎて大にダレ氣味、あれにては「元より短氣なお生付」といふ判官の性格を知らぬやり方なり。

▲松助の善六のうまいことはいふたけ野暮、片市の師直は碎け過ぎ、藥師寺は丸本に頓着せざるやり方感服せず、梅幸の七段目のおかるよし。菊五郎の若狹之助は大出來。八百藏は何れも中。



婦人と犯罪

横山天涯

一　緒言

婦人と犯罪、好個の研究問題である、社會學者は固より其の他人事に關係ある有らゆる學者は悉く趣味を以て迎ひてゐる問題て、特に詩人小說家の如きは、此の婦人の犯罪を巧みに鹽梅して、其の詩想を傾けて、悲哀文字を作つてゐる、現に日淸戰役後の小說界の如き、悲慘小說の名稱の下に、婦人の犯罪を捉へて、之れを材料に取ることが、一時非常に行はれたともあつた、今日でもちやきく二三君手の中には、常に婦人の犯罪問題を材料とし、其の消息を描寫するを以て、得意としてゐる者もある、啻に詩人小說家のみならず、苟も人生或は社會を硏究してゐる者は、其の方面の如何を問はず、孰れも無限の趣味を以て之に注意を置いてゐる。

婦人の犯罪、といつても、男子の犯罪に數十の種類あるが如く、隨分と種類が多い、例へば重罪犯の中にも、婦人の身に似げなく、聞くも恐ろしき、八百屋お七の演じた放火犯者も有る、鬼神お松のやうな殺人犯者も有る、然かも之は少數で無い、重罪犯者は、全體に一年間男子二千八百三十四人の、女子は三百四十一人といふ小統計て有るが、內男子の殺人犯者四百三十八人に對して、女子は實に百九十二人、男子の殺人犯者は重罪犯人の一割五分なるに、女子の殺人犯者は、重罪犯全體の五割六分を占めてゐる。

輕罪犯者に至れば、更らに其の種類が多い、窃盜あり、詐欺取財あり、受寄物費消あり、男子の犯す犯罪は大抵婦人も、其の犯罪を犯してゐる、外面如菩薩、內心如夜叉、有り觸れた言葉て有るが、自分は婦人の犯罪問題を想起する每に、常に頭上に此の言葉を思ひ浮ぶ、が、深く婦人其れ自身に同情を置き、其の犯罪

柳句合

(紐)細君は紐の算段斗する　久良岐
(同)他所行の下〆平常の下〆で苦心也　同
(同)襷には長し下〆にして置かう　政女
(同)紐の中で一番下等が虱紐　久良岐
(同)舊式の親治紐足袋論者なり　同
(同)因果な紐首ッ縊に借かれる　同
(同)あの紐は時計ぢやなくッて財布なのよ　豊子
(同)元結の節倹紐で間に合はせ　同
(同)女の胴體三分の二は紐でしめ　久良岐
(手袋)手袋をとれば汚ないお指なり　豊子
(同)ハイカラの手袋金具ひかつかせ　同
(同)細君の手袋はめて叱られる　久良岐
(同)毛糸の手袋どうも盲礫臭い也　同
(同)手袋は脱ぐ時に口に手傳はせ　同
(同)編んだのはアイツの手さと高襟　政女
(同)手袋の指は四本で半があり　同
(同)手袋の白い内から黒い指　同
(同)オヽ寒い抔と手袋類へあて　久良岐
(同)袴のおかげで女學生と見え　同
(同)女學生清方式で澄まし込　同
(同)もう海老茶でも有まいと紫紺也　政女
(同)大磯巻とれてお色が眞ッ黒け　同
(同)二ッ櫛三ッ四ッいつか女學生　同
(同)櫛の問屋は此所と云ひそうな頭　豊子
(同)女學生額の上に山を乗せ　同
(同)女學生いづれを見ても山家なり　久良岐
(盆栽)盆栽が三つあつたて出世をし　政女
(同)ヒヨツトコロで盆栽へ水を吹き　久良岐
(同)盆栽へホコリの肥しいつもかけ　同
(同)奥方御安堵盆栽好きの殿　政女
(同)細君は知らず秘藏の枝を折り　同
(同)盆栽家ためつすがめつ腰かゞめ　久良岐
(同)盆栽家縁日式に飾り立て　同
(同)盆栽の蜜柑いつしか紛失し　同
(琴)和琴では洒落も出ねえと半可通　政女
(同)姫い樣然と琴ひく指はおさんどん　豊子
(同)檢校は兎角按摩に成たがり　久良岐
(同)お嬢樣初手は三段などを彈き　政女

(同)アリヤ貴様松風ダワと謠曲家　同
(同)恐れ入る飯屋の奥で琴の音　豊子
(同)奥樣の得手はちん琴斗りなり　政女
(同)琴のお稽古三年にして啞なり　久良岐
(同)お客は聾彈手多くは啞なり　同
(同)琴といや皆六段と心得る　同
(同)樂隊で聞いたアレサと連れにいひ　同
(同)忘れたで琴押へつけ顏をあて　京都篝火
(同)江の島が住吉へ飛ぶ胴忘れ　久良岐
(菓子)赤いのへどうも手の出る菓子の皿　同
(同)アリヤ菓子屋廿めえものだと上戸云ひ　政女
(摺鉢)摺鉢が隱居をすると松が生へ　久良岐
(同)鉢摺と共に毀はれた夫婦中　政女
(山葵卸)アイチッチ鐵條網だと指を甜め　久良岐
(同)猫の舌わさびおろしと子は覺え　政女
(菜箸)菜箸をなめたてこんなお喋舌さ　同
(同)菜箸て素麵ニユッと揚げて見る　久良岐
(火鉢)瀨戸物の火鉢每々燒とをし　同
(同)火鉢では云ひ寄る術もなかりけり　政女
(札)書く時に標札一寸化粧され　久良岐
(同)牛札を貰らッてシブ／＼木戸を出る　同

ベースボール十句　京都篝火

珍らし／＼打てばファヲルを受取られ
狼狽者第一壘へ走り込み
[illegible]
過ぎたるは及ばず外野が進みすぎ
外野では寒氣にクシャミ欠伸をし
バッターの人相で審者は位置を替へ
フォワーボール外野頻りにじれッたい
攻者曰くォンリーッーアウト
三度ぶりなさけ少々走らせて
ゴロの珠美事股倉潜ってゐ

吾嬬筝譜襍句の中　久良岐

出征に弓八幡を孃かなで
布袋どん竹の箸などで召上がれ
夏痩は式部黨には眥って無し
侯爵は今樣朝妻舟が好き
お芝居は浦島が子の管なれや
時鳥エ、喧ましいと山でいひ
千箱の玉章消印の忙がしさ
吾妻の花水道以來ケチに咲き
花のかゞみなど、裸體畫題を付け
花暦奉齋會から告訴され
蓬萊は僅かに豆に名を留め
芙蓉の峰お茶の名らしいと川柳家
(同)

の徑路を辿れは、其處に注意すべき「無言の事實」を見ることが出來る。理屈は暫らく措き、自分は爰に中央公論の讀者に婦人の犯罪として一の意味を含んでゐる一犯罪――姦通の一ッを擇んで、婦人の犯罪が、如何なる消息を示してゐるかを示す、因に、文中出だす所の統計は、嘗て司法省で刑事統計を扱ひ、今は某監獄の看守長を勤めてゐる郷支黒田源太郎氏が、特に自分の爲に調査せるものであるから、世間に出てゐる統計に比べると、先づ精確に近ひ方である。

二　姦通婦人の數

此の日本の社會に、年々姦通婦人は幾何ありや、試みに讀者の前に、最近十年平均の姦通犯者の人員を擧ぐれは、毎年、對席裁判の言渡を受けた者は、男子は二百七人の、女子は二百六人、其の他姦夫、姦婦が、互に手に手を取りて踪跡を隱まし、又は病氣等の爲めに欠席裁判を受けた者は、男子は百十六人、女子は百十七人、即ち合計、男女各三百二十三人宛ある勘定で有る、試みに之を數字にすると

		被告人員	無罪	免訴	重禁錮	棄却	消滅
對席裁判	男	二〇七	二五	一八	一二一	五	三八
	女	二〇六	二三	一九	一二一	五	三八
闕席裁判	男	一一六	四	八	九五	一	八
	女	一一七	五	八	九五	二	七
計	男	三二三	二九	二六	二一六	六	四六
	女	三二三	二八	二七	二一六	七	四五

即ち姦通の名義を受け、近隣郷黨の物笑と爲り、繩目の耻辱を受けた男女は、此の日本には、男は三百二十三人の、女は三百二十三人、合計六百四十六人有る、我國夫婦の數幾百万ある中に、一年僅に六百幾十人其の數甚だ尠ひ樣に覺ゆるが、姦通罪といふ犯罪は、極めて煙滅し易い犯罪であつて、特に其の關係者は、之を表面にするのを避くる者の多ひ、犯罪であるから、其の實際は、固より斯んな少數の者であるまい。

更に最近十年間、其の犯罪數は如何なる增減あるやを見るのも一興て有らう、之を統計に徵せは、

年次		姦通犯者	割合
二十五年	男	二五〇	一〇〇
	女	二四六	一〇〇
二十六年	男	三一二	一二五
	女	三一〇	一二六
二十七年	男	二六六	一〇六
	女	二七四	一一一
二十八年	男	二九五	一一八
	女	三〇一	一二二
二十九年	男	三二八	一三一
	女	三三二	一三五

三十年	男	三四九	一三九
	女	三四七	一四一
三十一年	男	三二九	一三二
	女	三三四	一三六
三十二年	男	二七三	一〇九
	女	二七二	一一一
三十三年	男	二三九	九六
	女	二三八	九七
三十四年	男	二三二	九三
	女	二三五	九六
平均	男	二八七	一一五
	女	二八九	一一七

といふ成績を示してゐる、右の如く姦通犯者は、景氣立つてゐた三十年前後には、著しく増加したるに、近年は幾分か減少してゐるのは一寸注目すべき現象て、姦通といふが如き犯罪も、世の景氣と伴ふものと見ゆる、知らず、日露戰爭役後は如何なる事實を示すて有らうか。

三　姦通者の再犯

姦通者は、曾て罪を犯せし者に多きや、或は初犯者に多きや、即ち姦通と前料者とは、何等の關係なきや、『如何て姦通でもする不貞腐れだ、詰らない婦に違いない』といへは其の言葉の中には、自づから前科者が多い樣に意味取らるが、此の犯罪は、他の犯罪と打つて變はて、案外再犯者が尠いのは、日本女子の殊勝を示す事實と見るべき歟、罪質其れ自身の然らしむる所で有らう歟、姦通者とへは、道學先生ならぬ自分の如きも、一聞、嘔吐を催ふすので有るが、再犯の少い一事丈は聊か溜飲が下がる、今之を數字に出せは、

犯罪度數	對席裁判中受刑人員 男	女	仝上百分比例 男	女
初犯	九四	一一六	七八	九六
再犯	一六	四	一三	三
三犯	六	一	五	一
四犯	三	｜	二	｜
五犯以上	二	｜	二	｜
計	一二一	一二一	一〇〇	一〇〇

右表に依り、百分比例より見れは、毎一年、初犯者男子七十八人の、女子は九十六人、女子は男子より十八人多いが、再犯以下に至ると、女子は僅に四人!、即ち男子は幾分か再犯者は多いが、女子は殆ど無い、といふ事は言へ得らるゝ、然れは其の少數の前科は、如何なる罪名を負ふた婦人て有るか、參考の爲に、左に數字を示せは

前罪／年	私印盜用	賭博	姦通	竊盜	遺失物隱匿	詐僞取財	諸規則違犯	違警罪	計
卌四年	一	二	一	／	一	／	／	一	六
卌三年	／	一	四	一	一	／	一	／	八
卌二年	／	二	一	二	一	一	／	／	七

といふ成蹟を示してゐる、比較的に多いのは、姦通其れは自身の再犯と、賭博者で有る、其は兎も角も、アンナカレニナを書いたトルストイ的觀察眼を以て見れば、此の再犯者の尠い一事は、大に參考と爲るで有らう。

四　姦通者と敎育の有無

敎育の有無は、犯罪に關係の多いといふとは、刑法學者或は社會學者の能く稱ふる所で有るが、實際は、六勝其樣ばかりとも言へぬ、犯罪の性質によりては、無敎育より寧ろ敎育ある者に多い場合もある、姦通者の如きも、男子は敎育の有無に餘り關係は無いやうに思はれる、之を統計に徵するに、

年次／程度		中學卒業及之と同等の敎育ある人	小學全科卒業及之と同等の敎育ある人	文學の讀み書きを爲し得る人	全く無學の者	合計
三十四年	男	／	八	五四	一〇六	一六八
	女	／	／	一三	九五	一〇八
三十三年	男	／	一二	七二	九三	一七七
	女	／	一	一四	一〇六	一二一
三十二年	男	二	二〇	五八	一〇二	一八二
	女	／	四	一〇	一〇九	一二三
百分比例	男	一	七	三五	五七	一〇〇
	女	／	二	一〇	八八	一〇〇

右表に依れば、男子は敎育ある者と、無き者と殆ど相半はしてゐるではないか、併し乍ら女子に至れば、敎育の有無が大に犯罪に關係あり、即ち無敎育者八十人に對し、稍々敎育ある者は、僅に十二人、此處に至ると、犯罪の上より言へば、男子は兎も角も、女子には敎育の普及が大に望ましく爲る。

五　姦通者と貧富の程度

前項に敎育の有無と、犯罪の關係を見た、續ひて貧富の程度は、此の姦通者に幾何の關係有りや、と見るに、社會主義の如きは、犯罪の根原を生活の不如意に歸し、有らゆる犯罪は「貧」に在り、といつてゐるらしいが、之は實際とは、幾分齟齬つてゐる、直接財産に關係ある竊盜、詐欺取財の如きも其れてあるが、姦通の如きも同じく此の傾向がほの見へてゐる、論より證據に、左の表を見れば、思半ばに過ぐるで有らう。

年次／貧富の度		資産ある者	稍資産ある者	資産なき者	赤貧者	合計
三十四年	男	二	二四	一〇二	四〇	一六八
	女	／	一二	六五	三一	一〇八
三十三年	男	二	二九	一〇三	四三	一七七
	女	四	一三	七五	二九	一二一
三十二年	男	五	二二	一〇七	四八	一八二
	女	五	一三	七五	三〇	一二三
百分比例	男	二	一四	五九	二五	一〇〇
	女	三	一一	六一	二五	一〇〇

之で見ると、最も犯罪に陷り易い赤貧者には、案外

尠なくして、單に資產なき者と稱せらるゝ階級に多い、爾うして此の姦通罪の表面に現はれるのは、概ね中等以下で、中流の以上は、實は世間に現はれぬ勝の者であるに、右表に依れは、「資產ある者」、「稍資產ある者」の兩者を合せて、百人に對し十五人の割合を現はしてゐる、之を以て見れは、犯罪の原因を「貧」の一事に歸する譯に行かなくなる、ヽヽヽヽといふのは、一般論て、赤貧者の稍々上なる「資產なき者」は、百人に對し六十人有るのを見れは、犯罪は、「貧」と全く關係無い、といふ事を明言し兼ぬる、唯、自分は犯罪の原因を貧の一事に歸するを不可とする迄て有る。

六　姦通に原因する犯罪

姦通者其れ自身は社會の一大罪惡て有る、之を家庭の上より言へば、各自の幸福を破る事は、放火殺人等の重罪を犯すと、大した相違がない、加之、此の姦通罪が、因と爲り緣と爲りて、他の犯罪を誘致する、姦通は或意味にては、一の戀愛であるから、其の結果、失戀となり、嫉妬となり、怨恨となる、のは寧ろ自明の理て、彼の本夫が、妻の姦通を憤り、謀故殺、毆打致死、毆打創傷等の大罪を犯し、或は放火犯者となるが如きは、其の結果て、情實を酌めは、實に憐むべきものあるが、危害の度に於ては、主因たる姦通に讓らぬ。

一體本夫が刄物三昧を振舞ふて、姦夫姦婦を殺害するの風習は、幕府時代より因襲して來た風習であるので、公事法定書に、「密通之男女共に夫殺候はゝ紛れ無きに於ては無構」とあるのを見ても、當時の模樣が判るので、爾うして舊幕府時代にては、斯くの如きは本夫が姦夫姦婦に對する正當防衛と認められてゐたらしい、次に、姦夫姦婦が其の慾情の爲に、本夫を殺害するが如きも、隨分多い例であるが、又姦夫姦婦間に於ける嫉妬、失戀の爲にも、如上の罪を演ずる例もある、左に最近十年間、姦通に原因する犯罪中、最も著しき者を累計して、讀者の參考に供へる。

本夫が姦夫の家に放火せし者	一七
姦夫が姦婦の家に放火せし者	一四
姦夫が本夫の家に放火せし者	五
姦婦が姦夫の家に放火せし者	六
姦婦が本夫の家に放火せし者	四
本夫が姦夫を殺せし者	三九
本夫が姦婦を殺せし者	四一
本夫が姦夫姦婦を殺せし者	一八
姦夫が本夫を殺せし者	三八
姦夫が姦婦を殺せし者	二三

姦夫姦婦共に謀りて本夫を殺せし者	姦夫	四
	姦婦	三
姦婦が本夫を殺せし者		一四
姦婦が姦夫を殺せし者		三
本夫が姦夫姦婦を殴打し因て死に至らしめたる者		一二
本夫が姦夫姦婦を殴打創傷せし者		七三

右表に依つて見れば、姦通に原因する犯罪の中、大多數を占むるのは本夫の犯罪で、若し姦通といふ不祥の事がなかつたならば、恐くは如上の犯罪は犯されなかつたので有らう、亦姦夫姦婦が本夫に對する犯罪、姦夫姦婦相互間に於ける犯罪の如きも、同じく其れて有る、之を以て之を觀るに、世に姦通の一事ほど、忌むべくも亦忌むべきものは有るまい。爾して如何にして、世に此の不貞の事多き乎、原因は種々あるて有らうが、自分は今日我國に於ける婚姻制度の不完全を以て、其の重もなる原因であらうと考へてゐる、後日機を見て、讀者と共に、之を研究するを約して、爰に暫らく筆を擱く。

支那人眉を昂げて申し候やう、倭奴の強きは中國も尚ほ破らるゝ所に候、曷んぞ獨國强の敵に候はんや！

學生の經濟

（五）

小室白也

前には專ら女學生に就て一と通り書いた、最も眞面目な儉約な處て、下宿料から鼻紙代までを通計すると、少くとも毎月十五六圓から二十圓位はかゝる、ハイカラ式部に至りては實に二十五六圓を費すもの決して少くない、此の如にして五年乃至八年を經て、束髮丸髷に替へた時、不幸にも氣位ばかり高くなつて屁理窟ばかり達者になり、四海波目出度納まりそこなうもの亦少なからざるは實に寒心すべき事てはないか、奈何てす、

扨てあまり長くなるから此度は男學生だ

下宿料と月謝とは男も女も大差はないから、最早改めて云ふにはあたらない

眞面目類の通常眞面目屬は、これは親御様からのお指圖通り、右せよと云はゝ右、左せよと云はゝ左と云つたやうな、極めておとなしい處だから、大抵十五圓乃至二十圓位づゝ送つて貰らつて毎月ちやんと一切をやつて行く雜費は女學生の芋喰式部と同じやうなもの

だ、尤も男であるからリボン花簪も、ヘーヤピンもサイドコムもいらないが、その替りカラとかカフスとか帽子とか云ふのがあるから、差引つまり經濟には大差はないのだ、

特別屬は牛乳配達新聞配達、或は人力引などと夫々勞働をして其報酬を以て學費に當てるのだが、とても每月十五圓も二十圓も收入があるわけのものではない、故に普通の人と膝組の生活は出來ない、極端に云へば喰ふや喰はずであるから六圓でも七圓でゝもやつて行く、

この二屬はどちらもものになる人達だが、普通眞面目屬はやゝともすると不眞面目類の方へ籍を移したがるし、特別眞面目屬はその心配はない替りにやゝともすると人物が卑窟になり易いぞ

ハイカラ屬はこれ亦た女學生のそれと等しく、大にめかし費がかゝる、即ちこの屬は女黨と男黨とに分れて、互にめかし競爭をするやうなものだと見て差支はない、凡そ何の競爭でも競爭者自身は必ず利益を得るものではない尤も競爭の目的は利益を得んが爲めには相違ないが當て事と何とかは向ふからはずれん、結果は概ね馬鹿を見るものさ、例へば代議士の競爭で財產を棒にふる、理髮所の競爭で兩つぶれになると云つたやうなわけのものだこの兩黨の競爭でうまい汁を吸ふのは西洋小間物商ばかりさ

先づ眞面目類以外の費用を擧ぐれば

洋服——學校の制服だけで十分であるのに、折襟でなくちや人中へ出られんなどゝ云ふのでこの價十八九圓、

ホワイトシャツ上等のものを撰ぶからこの價三圓位

カザリボタン——咽の佛樣の處へつけるやつと合せて凡そ壹圓五十錢位

カフス——この價三十錢位

カフスボタン——七寶が可愛いの形はハートがよいのとあつて、銀で壹圓五十錢位

カラ——制服なら立襟だから、この價も六錢乃至十三錢位であるのに折襟を着るから勢ひハイカラを附けなければならず、而かもダブルを好むのでこの價三十錢位、お蔭で洗濯代も倍取られる

ネクタイ——流行だ〳〵と云つてやたらに買ひ込む、不經濟な事だ、この價六十錢位、

コスミチッタ——ヴァイオレット入てなきやなどゝ贅を云つて、この價七十錢位

バンドリン――頭へなびりつける油だ、この價三十五錢、

クリーム――これも頭へなびる、御丁寧な事だこの價四十錢

ブラシ――これは頭をこする、髮の艶がよくなるッさ、この價四十錢位、

帽子――ハンテングが旅行用との御意で一圓二三十錢位ソフトが散歩用との仰てこの價が三圓位、これに加ふるに制帽を以てす、この位二圓位、一個の頭の爲めに三個の帽子を用ゆ、安んぞよく女子が一個の頭に三個の櫛を加ふるを咎むるを得んだよ、

ステッキ太いのは野蠻なりと細きを撰んでこの價七十錢、位

其の外、理髪代が十五錢、香水が二圓、洗濯代が六十錢位、それに煙草代が月に二圓位は正に請合申上る玉突をする、ビルーを飲む、洋食を食ふ、女にリボンを買つてやると云ふに至りてはこれ亦己の窺ひ知る處でないわ、

（六）

飢饉類は或意味から云ふと寧ろ愛すべきものだ何故ならば彼等が愛する所のものは、唯口一とつのみてあつて、粗衣も驚かず、粗服もかまわず、唯口一ぱいにつめ込んで舌鼓うつ事が出來れば、彼等は慊々して樂んでゐる、而かも八百膳の何植半の何を語るに非ず、蕎麥は麻布の更科がいゝの、池の端の蓮玉がおつだの、京橋の千歳のおかめは格別だの、てんぷらなら銀座の天金かさもなくは二丁目の大新はどうですとか、鰻は靈岸島の大黒屋に限るの、座敷のいゝのは竹葉だとか、和田平の甘いのが忘れられないとか、牛肉は四谷の三河屋に行けの。霞町の今濱に出掛ろとか、鳥なら日本橋のきぬたにしろの、若かず去つて芝口の今朝に行けの酢なら與平、毛拔は更なり日本橋の帆掛の伊達卷はたどものではないの。下戸は梅園の汁粉にすべしの、うんにや神明の太々たるべしの、栗饅頭は風月で、藤村は煉羊羹、最中は壺屋で鹽瀬の濱納豆、甘納豆なら榮太樓でカルカンなら翁屋に限るのと敢て通がつた事を云ふにもあらず、いろはは固より米久結構、今分賛成鮫サンクス、常盤有りがたい、福本萬歳て、家の上下も品のよしあしも全く問題以外である、之れを要するにとなると、ちと法學生的の口吻だが、全くの處唯食ひさへすればそれてよいのであるから比較的怪我は少ない方だが、而し生肉が一人前十錢のロースが十二錢

として、二人にゴブにシンコに飯に御酒とでもなると圓助だ、餘り度び重なると月末の算盤がとれなくなるぞ、

エンダラ屬はこれと云ふ道樂もしなければ、これと目立つて金も使はないが、終日のそり／＼かなて、牛のよだれのやうな種屬だ、浮草や今日は向ふの友達を訪ひ、稻妻や昨日は東の友達を尋ね、類を以て集つて唄つたり笑つたり、まるで明日は明日の風が吹くと大悟徹底したやうな人達だ、大抵は月謝の使ひ込みが基でこの屬に組するやうになるものだぞ一ヶ月の月謝位、どんなひどい苦面をしても濟ましてさへ置けば、來月分の學費が來た時何んとでも方法はつくのであるのに、折角翌月の分が來ると徒らに費して了つて學校の方は依然そのまゝだ、其内無屆欠席が長過ぎるので學校は除名を頂戴すると、少し自棄氣味になつて、今度は下宿料まで喰ひ込む樣になる、

此の如くにしてエンダラ屬は何日しか鹿屬となる、いくら寄席が安いからと云つてまさかに毎晩も行くまいが、木戸が八錢乃至十五錢中が四錢、中入に茶を取るを合せて十五錢乃至廿五錢はかゝる、この寄席は平民の娯樂場として最も適當なものてはあるが、目今の處では奈何しても放蕩に入るの門たるを免かれない、其筋でも色々と八ヶ間敷く云ふし、藝人の内にも多少文字のあるものは改良を唱へてはゐるやうなものゝ、盲目千人の彼等社會の改良は倒底一朝一夕の業でない、猶今日依然として舊幕的頭腦で、聞くに堪えないやうな事を高座の上から平氣でしやべつて居るもの決して少くない、

こんな處へ通つてゐる内に、知らず識らずオはじけた事を覺えて、異變な聲をしたり妙來な手つきをしたり、いよ／＼人格を下げて愈下卑てくる、終には女を見るとエレキが起つたり赤いしかけに現をぬかすやうになるぞよ、エンダラ屬から鹿屬になるとは前にも云つたが反對に鹿屬からエンダラ屬になるのもある、これは眞面目類の人間が全く寄席と云ふものゝ爲めに惡習慣と惡感化を被つたからだ、吁平民の娯樂場たるべき寄席は終にノラクラ青年の製造所であるとは實にはや嘆かはしいわけだ、

義太科に至りては猶甚だしい、近松の粹を味うのであるならば己だつて何の異存があるものか、處が中々そうでない、眞面目な昔氣質なお國の親御樣達にこんな話をしたら、嘸かし驚くだらうが奈何も仕方がない、

何んと女義太夫の後を追かけ回るのですよ、中には何之助の爲めなら命もいらぬなど丶云つて、何之助のか丶る處へは何處までも出張する、のみならず、誰が彼女を罵つたからと云つて自分のことよりも腹をたて、遂に決鬪をするなど丶云ふのも在つたものだ、然し流石に今日はそれ程の馬鹿者もないやうだ、昔時はこの科を又ドースルレンとも云つた、餘りに外國語的な名の爲めと云ふのでもあるまいが、今はこの名稱も漸く衰へた、この人達は女義太の家へ出這入をするから、お茶菓子だよとばかりに五圓位投り出す、時にはビラを送つたり幕を送つたりする、尤もこれは五六名位連合で作るのか多いが、それにしても其費用は決して少くない、親御達が汗水たらして得た金を都の悴殿はこんなことに使ふのであると聞いたら、親御樣達も愛憎が盡きるだらうね、

この義太科が警察から注目されるやうになつた時、源氏節科とでも云ふべきものが出來上つた、これは源氏節語りの後を追ふのだ、然し女義太と源氏節の差だけて内容經濟全く同一類と見做して差支はない、

鹿屬出身者(?)は色々の方面に向つて化る、ハイカラ屬になるのもあるしエンダラ屬になるのもある、が其多數は烏頂天屬となるやうだ、

（七）

烏頂天屬の費用は勿論無制限だ、衣紋坂から大門でこれから先きが仲の町、花舞の菩薩の君たちのウと鬚顔(ひげつら)が眼をむいて、きつい䇿當さへした處、誠や天女天降りと眼尻を下げた日にはたまつた者でないぞ、一刻千金と昔の馬鹿がほざき居つた位、たつた一晩に五圓十圓を費すのは香々てお茶漬を食ふより容易(たやす)い、如何な親御樣でも、そんな費用までお送りなさる筈はないから數月の内に質屋と懇意になつて先づ書籍がなくなる、次に時計が姿を隠す、追次萬の中へ手がか丶つて纏て赤裸々の身となる不義の借金も段々と出來てくるぞ、それでも貸人のある内はまだよい部で終には半錢の苦面も出來なくなる、甚だしい哉湯錢もなく、自ら垢旦那と稱して火鉢の中をかき廻し卷煙草の吸殼をほぢり出して、たたきつぶした煙管に押詰めて顎をこすつて悵然たり、お氣の毒樣、五圓あれば七八人はつれて行くよなど丶のたまう人々は、それまでになるには一度は矢張り裸々になつたためしのある方々だよ

こんな人々はよく云ふ、親と云ふものは馬鹿なものだ病氣だなんて云つてやれば直に受けて送つてくる、己

もこの位道樂をして置けば自分の倅にはだまされないよ、などと哄然大笑、何ともはや呆れたものだぞ、この人たちの月の經濟はまるで滅茶だよ、とても計算にはなりはしない

以上の如き莫大の金を費して、假りに某の學校を出たとする處で、人足が多過ぎて職業の少ない日本では、幾年たつて今迄費した金を取り返す事が出來るのであるか、實に心細い話ではないか、それでもいくらか取れるからだに成つてくれゝばよいが、失敗又失敗を重ねて學業まんまと出來そくなつた曉には、如何に發心しても百姓にはなれず、奈何地だんだを踏んでも米の代は取れずと云ふ所謂帶にや短く襷にや長い、中ぶらりんの人間が出來上つて、今迄の大金を徒らに棒に振つた上に飛んだ厄介者を製造したわけになる、孫を養ふよりは犬を養へかね

吁世上の親御樣がた、この人達を見せしめに餘分の金を送るなど、必ず〱遊ばすなえ……ほえこれしたり、默つてろ〱

（終）

釣堀の側面觀

正面より觀た釣堀業

樋口二葉

紅葉の更紗地上にまいて、脚下にふみ躙ることの惜しまれ、公孫樹の裸百貫さびしさうに、ニヨッキリと冬樹立を魁する今日此頃、釣堀沙汰はあまりに季節はづれ、氷屋の看板を見る心地さるゝと冷笑する人もあらむが、それは釣堀の四季を通じた營業たることを御存じない方の、曰く屁理窟である。嚴寒になれば客數の減ずるは云ふまでもない、けれども閑人のとんだ太公望は、一竿の垂綸に日南ぼつこをする氣て、天氣さへよくば釣堀の池邊に蹲踞て、浮標と睨みッくらをして居るものもある。併しその盛時と云つたら夏場にあること勿論て、冬日氷を割つて糸をたるゝには、又靈るゝだけの娯樂以外に慾張もあるのてある。

釣堀と云つても近來は大抵鯉のみて、七八年前までの如く鯉、鮒、小鯔等をごつたに入れぬやうになつたて、其營業振にも目方釣と云つて自己の釣あげた魚の目方に因つて、其日の計算を立て支拂ひをするものと又一日を幾金、半日を幾干と定めて釣魚は客の自由に

任せ、釣れやうが釣れまいがそんな事に關せず、一定の料金を營業者に收める手段とがある。また一定の料金を拂つて釣つても、何百目とか何貫目以下とか、釣魚の目方に制限を附けた營業法もある。これ等は制限以外の目方に達すれば、其鯉は持歸ることを許さず、目方外の鯉を持歸らんとするときは、百目幾干といふ相場で、制限外の目方だけの分を支拂はねばならぬのである。

そこで、來客があると、一日なら三十五錢、半日なら二十五錢、これが普通釣堀の釣料である。而してこの外に蒲團料、餌等に二錢より三錢までを徴收する、蒲團料とは池邊に二尺四方程の揚板を置き、其上へ敷くべくいかゝな座蒲團を貸與する損料、猶それに附屬する物品があつて、共に陣取る前へ持運れて來る、それがマッチと餌箱である、餌は勿論いれてあるが、俗にネリと稱する團子に炒糠を煉り交たものだ。又客の求めに應じて釣竿をも貸すが、これも一本一錢ぐらゐの損料をとる、けれども釣堀へ出懸けるほどの客なれば、大方は釣竿や釣具は用意して往くものであるから此貸竿といふものは餘りに必要がないが、其備附は充分にして置かねばならぬ。それから午後の三時ともなると、客へ一杯づゝの澁茶を持運びて喫さしめる、此茶碗が何れの釣堀でも先づ筒切の稍大形なものに極つてゐるやうである。

釣堀業の資本

資本と云へば、釣堀に使用する池の損料或は家屋も共に附屬して居る處の借料、若し己れの所有權を得んとすれば、其買入れ料であるが家屋地面まで買入れて釣堀營業を開くものは、殆んどないのが目下の現狀であるから、先づ借入料を拂つて營業するものが多い。其借入料は格別の手入れをせずして釣堀營業の出來得るだけの池がある處で、一ヶ月の支出が十圓以上十七八圓までゞある。けれども此營業者に適する土地は重に場末で、根津とか深川の片隅とか、或は向ふ島、牛込、小石川、またズヽト離れた郡部等に屬してゐるので、家賃池などの借料は十圓も出せば可なりな處がある。

池の廣狹によつて放魚の多少をも圖らねばならぬ、小さな池に多くの鯉を放すときは、釣人は喜びて多く引揚げ得らるゝが、營業主の方では餘り澤山釣られては商法にもならず、然りとて廣い池に僅少の魚を放ちおいては、釣れ方に大關係を及ぼし、殊に秋の末より

冬季にかけて、鯉は餌に親まざる際となつては、猶更その邊の注意は肝要のことてある。で、放魚は素より一定の極りがないから營業主の適宜な計らひにあるのだ。而して放魚する鯉は何れも貫目で買入れるが例て百目の價平均八九錢が相場てある。又この放魚切々買入れなければ客を引くことが難く、普通客のある釣堀ては先づ一週間に一度位づゝの割てあつて、それも中々十貫目とは放たないものだ、斯くして二三月も營業してゐるうちに、池の鯉は平均五六十貫目から百貫目近くまては、始終收容して置く割合になつて居るさうだから、客の釣あげる處は甚だ僅少なものとなる。けれども一週間に一度づゝ十貫目の鯉を放つとすれば、一ヶ月に平均四十圓前後の魚を買入れねばならぬ。又新規に營業するには營業に必要なる器具の買入れ準備にも殆んど二十圓は要る、そこで資本金の額は七十圓以上百圓位は持つて懸らねばならぬ。

側面より觀た釣堀業

資本を要すること斯くの如く、イザ開業するとなれば客を引く手段を講ずるが唯一の策て、専心客の企望を充さんとするには、勢ひ鯉魚を澤山に放たねばならず、盛んに放魚をせんか、資本金に追立られて收支の計算立ものにあらず。此處尤も臨機應變の處置を要するのてある。其手段には何商業にも必要なる愛嬌と着實が、釣魚の多寡よりも營業の盛衰に大關係を來たす傾向がある、これが非常な困難てあるのだ。而して釣堀の客と云ふと、隱居さん連の閑人がホンの慰みに來るを相手にするのならば、又仕易きところもあり扱ひにも骨が折れぬが、客の多數は慰み釣りよりも、寧ろ商業にするもの多く、中には釣堀を荒しあるいて自己の利益を圖る惡漢さへもある。で、それ等の客に對しては優遇するにあらず、優遇せざるにあらず、頗ふる曖昧な態度を以て扱ひ、實は充分に敬遠主義をとつて成るべく寄せ付けざるやうに仕向けざれば、肝腎の客に感情を害さしめて愛顧を殺ぐ虞れがある。この呼吸が中々困難てあつて、素人釣堀の失敗に歸するは多く是等の客の爲めに、妨害されて折角の營業を棒に振るに至るのてある。殊に彼等惡漢は甘言蜜の如く營業主にもお客にも口當りよく、巧みて籠絡を擅にして賭博をすゝめ、自己の利益を敢てする。それを營業主より嚴重に拒絶せんか、忽ち犬糞的復讐を以て營業を妨害され、一夜の中に堀中の魚族をして死せしむる如き惡戯をする、故に釣堀業者にして第一の注意は釣堀破落

漢の防禦策にある。

さて營業者の收入はと云へば、一人の客に附いて一定の釣魚料の外、蒲團代と餌代である。けれども客が釣りあげた鯉を持歸るものゝみなれば、其點に於ては何等の面倒もないが、多くは鯉を營業主に引取らすものだ。それが慰み釣りを專らとしない一例で、此取引の弊が近來では一般に蔓延して、假令慰み釣に來るものでも鯉を毎日持歸つても仕方がない、寧ろ引取らして其日の出錢を少なくするに若ずと、皆引取りを爲さしめて居る。之れは營業主の方でも損はいかぬ、鯉を買入れるには前にも申した通り、百目八九錢の割合であるが、この客より引取るには百目四錢の割であるから、池の魚を釣あげられて更に新規に放つより安く、客もまた便利であるので近頃は何處でも行つて居る。而して假りに一貫目の釣魚があるとすれば、其引取り額は四十錢となり、一日の釣魚料と餌代を差引ても猶客へ釣堀より出金せねばならぬことになるが、それには又約規があつて、蒲團や餌代はいかなる場合でも現金で支拂ひ、引取りの鯉の價が釣魚料より登るときは次の日の釣料のうちより差引いて受取る定めである。

て、彼の商業にする釣客には釣堀へ一圓かしたとか二圓貸しがあるとか云つて、威張つてゐるものもある。其外客が食物でも注文する際幾分のハネ錢でもする迄で、釣堀業なるものは至極單純な商法で、利益も決して多いものでなく、殊に其位置が地質の低い處にあるので、淋雨等に逢へば池がひらき、可惜商業物の鯉魚を逸失せしむることもある。兎も角この營業は餘り利益のあるものでなく、腕ッ節の強い稼人がやる營業には適せず、隱居、家内等が家賃でもとりあげる位の考へでやるが小釣堀の常である、大仕掛にやるは無論例外で利益もあるときは、相應にあるであらうが、秋の季より冬がれに向つては大仕掛の釣堀はダメで、却つて小釣堀に勝利がある。併し霰だばしる冬の日に一竿の風月を友とする物好者は、マア普通の客にはないけれど、釣を稼ぎとする客は却つて釣堀に寄るもので、一尾の鯉に一日も二日もの日當を得る魔術がある。それ等の秘密は見て見ぬふりにせねば、到底釣堀營業の成立つものでなく、夏季ならばマグレ客のあることも有れど、裏のついた衣類を着るやうになつては、三度の飯より好なものとか、所謂商業人が相手である。商業人ならば必らず魔術が行はれるもので、これを禁止したなら全然客を玉なしにするのだ、營業の消長に關

せず、頭腦には何等の痛痒も關ぜざることだから、客のする儘に任してあるのであらう。けれども釣堀業者は清潔なるが多く、大抵利益が薄い遊び營業に均しい又ある二三ヶ所の同業の如く不潔分子を含み、醜聲の洩るゝものは殆んど例外と見ても宜いのである。

正面から觀た釣堀の客

眞ツ正面から觀たときは、釣堀の客は一日なり半日なりの釣料を拂つて、三四本の釣竿を下ろし浮標の動くに瞬きもせずして根氣よく睨み、ピクリとすれば胸をドキリとさせて、喫みかけた煙草も投り出して竿を手に把り、只管に呼吸を圖つて今度は〱て夢中になり、幸ひにギクリと手耐へしてピリ〱と來るや、鬼の首根ツこでも抑へたやうに、竿を滿月の如くにさせつゝ、占めた〱と喜色滿面に溢るゝ無邪氣さ加減、實に罪のない態度の愛らしいものである。多くは釣あげるまでにポカリと逃げられて、ロアングリ一尺もあつた鯉をバラしたやうに吹聽するものだ。斯くの如くして終日を樂み保養するので、釣好は確かに十年ぐらゐは長生をするだらうと思はるほど暢氣だ。正面からの觀察では只だこんなもので、更に奇なことも妙なこともないのである。

側面から觀た釣堀の客

處で、何事でも樂屋に飛込めば、とんだ襤褸の出るもので、この釣堀の客ほど表裏の甚しいものはない。先づこれを二樣に區別して紹介せねばならぬことゝなる。二樣あると云ふは普通客と商法にする客とあつて普通客とは全くの慰みに來るものである。此等の客は只だ魚を釣るのが面白い、それが何よりの娛樂であるのである。けれども商法釣りをするものは、單に魚を釣るのみでなく、魚を釣りつゝ傍らに商法をするのである。

魚を釣りつゝ商法をするとは頗ぶる訝しい、が、そこには又身もあれば蓋もあることとて、是れが釣堀營業者にとつては、甚だ困るのであるけれども、公然と拒絕するときは客がなくなる、客がなくなると營業にならぬので、知つて知らぬ顏の半兵衞を氣取つて居る。此間に種々の秘密が籠められて居て、側から見ると奇妙頂來の現象があるのだ。秘密とは何であるか、改めて說くまでもない賭博である。然らば其賭博は何うしてする、これには種々の手段があつて、根津あたりで流行るものと、深川方面に於て行はるゝものと、行り方に於て幾分の相違はあるが、歸する處は金錢の受授

にあるのである。彼等の商法釣者はヒーローで一番いからぢやないかとか、又はオールド、菊世界などゝ煙草の名を並べてゐる。假令ばヒーローで往かうと云へば、彼等五人なり六人なりが其契約をしてより。第一番に鯉を釣あげしものが、他の四人なり五人なりより三錢づゝを徴收して利益とする賭博である。オールドとは四錢、菊世界とは五錢の符牒であること前に異らないのだ。咋今はまた官煙の名によつて賭けをやる、それが特り煙草のみでない、總べて物品の名に擬して表面だけを奇麗にみせかけ、而して之れが價を標準に金錢の受授を專らとする。それより大きいのになると鰻丼、どぜう鍋等があつて、鰻丼とは大抵廿五錢、どぜう鍋とは十五錢が普通相場となつて居る。其上になると小店（五十錢）中店（一圓）大店（一圓五十錢）などの大袈裟なのもある。蓋し小店と云ひ大店と云ふは貸座敷の娼妓揚代金を標準にした價格である。

又源平釣りと稱する競爭をもやる事がある、假令へば十人の釣人があつて、双方五人づゝに分れ、釣魚の數の多き方を勝と定め、其日の支拂ひを負けた方が負擔する方法もある。單にそれのみならば座興として面白いが、斯かることを遣るものは、中々にそんな事位に甘んじては居らぬ。其競爭釣りの中にまた公然たる賭博をやるので、釣堀業者に於てヒヤ／＼する事が往々ある。

こんな有樣であるから、釣人の一般は甚だ野卑に流れ、狡黠なること言語に絶し、只だ慰みを專務とするものは、何となく彼等と共に垂綸して終日を樂しく送らんとすること、懶き心地のさるゝものあり、心あるものは成るべく釣堀を避けて陸釣りの清淨にして且つ趣味あるものを撰び、中流以上の遊山場として來たるは甚だ稀れになつたやうである。故に偶々かゝる消息を知らずして來るものも、側の殺風景に驚きて再び足を向けざる傾きになつた。從つて商法釣人の跋扈跳梁すること近頃の釣堀ほど甚だしきはなく、漸次惡風は東も西も押撫て吹き荒み、いよ／＼否な心持がする如く思はれる。

既に樂しみなどゝ云ふ境は通り越して、最う利慾にばかり流れて了ひ、何でも他より早く魚を釣りあげて賭錢を得んと急せる處から、鯉をつる餌に苦心するものます／＼多く、從來用ひし團子、ネリ、蒸し芋、淺蜊の剝身等にて堪能せるもの無く、飴粕を用ひて奇利を博せんとするものあれば、飴粕に炒糠を交へて一層

魚を寄せんと試み、現今にてはそれも有り觸れたる餌として、又一ッ工夫するものゝ出來、飴粕に炒糠と孑孑を交せて用ひ出したる者あり。一時この餌は大に鯉魚の嗜好に適し、非常に釣れたるより我も／＼との秘法を聞傳へ、各釣堀は大凶荒を來たすまでに魚を釣りあげられたので、共同してこの餌を禁制することになつた。けれども近來はまた是より一層驚くべく鯉の好む餌を發明せしものゝ出で、商法的人は、競ふてそれを用ひんとする傾きありと云ふことだ。

何にしても釣堀なるものは、今にして充分の警戒を加へ、賭博釣りに就て制裁を施さねば、遂には警察の干渉をうけて奇禍を招くに至るは明らかてある。（完）

Small debts are like small shot, they are rattling on every side, and can scarcely be escaped without a wound; great debts are like cannon of loud noise, but little danger.—*Johnson.*

小なる負債は小銃の彈丸の如し、彼等は八方に飛び散りて多少人を傷けざるはなし、大なる負債は大砲の彈丸の如し、其音は大なりと雖も、而も危險は至つて少し…………ジヨンソン

社會側面觀

●奇警なる觀察の投書を歡迎す●二百字以内葉書に限る●締切は毎月十八日

▲物價暴落　　四谷　迷亭

近來價の頓と下つたものは先第一露國のクロパトキンとコサツク騎兵を初めとして日本ては第一、洋行歸り、次が學士、これは今に小學校敎員にもなれなくなるかも知れない、次が奥様、今ては女房てさへあれば八百屋の女ても奥様だ、次が髯、電車　運轉手は更なり屑屋の髯を貯へたのもよく見受ける、

▲宇宙虐待　　本鄕　天雨生

動物虐待の說が盛になつたのは誠に喜ぶべき事てあるが近頃ては植物虐待を主張する學者もあるさうだ差當り植木屋は迷惑するだらうこの有樣て進歩して行くと今に鑛物虐待氣體虐待の說も出るかも知れない一層のこと宇宙虐待を唱て了へ

▲自殺的招待狀　　無名氏

先月諸處にあつた運動會の内或女學校ては其招待狀に青年男子の入場を謝絶する旨を書いたのがあつた、奈何云ふ深慮があつたのか知らないがまさか青年男子に見せたからとて運動會々場て風俗壞亂を演じもすまい、萬一青年の顏を見た位て、危險だからと云ふなら實に生徒の品行の亂れて居るのを證するものてあつて其改善の法がつかぬとなら實に敎員の無能を自白して居るやうなものだこれを前號泡沫氏の自殺的廣告に對して自殺的招　　と稱す、

▲高い鼻　神田　天月

お手柄をすると鼻が高いと云ふが、眞に高いのはよいけれど低いやつを得意になつてふくらませてゐるのは餘り見つともよいものではない、と云つて徒らに高いのも可笑しい所謂鼻高きが故に尊からずだ、

▲支那人の眼鏡　獨眼龍

萬朝報に近來女學生が金鍍金やアルミ縁のいやにぴか〳〵する近眼鏡を掛けて濟まして居ると書いて有たが、それにも増して一層眼鏡を用ふるのは本邦へ來てる支那の留學生だ、しかもそれは近眼鏡にあらず、老眼鏡にあらず、只の素通しを掛けて一かど風采の上がつた積りで得意然たる所は、まあ時事漫畫中の代物だね、

▲廿世紀の紺屋　淺草　淺黄の助

流石は二十世紀式の紺屋の明後日を凌ぐ大々的の明後屋こそ現れたり、しかもこは自ら文明の指導者とか社會の耳目とか高く標持してかゝる惡習慣は進んで之を打破すべき新聞紙なるこそ一層面白し、曰く讀賣新聞が露伴の「天打つ浪」を近日より掲げんとの豫告を出してより諸君驚くなかれ既に三個月、

▲新派廣告　神田　不產坊

書肆富山房の軍國畫報の廣告こそ一種凡想の文字を用ひて中々に面白けれ、新聞廣告の口繪の目次には第一軍名將四大將閣下とあり、店頭の看板には畫報の巨魁とあり何れも人目を引く新奇なる文字、岩谷天狗の煙草の廣告と雖も及ばざる事遠しだ、

▲命令的菓子商　京都　田中白水

近頃軍人らしく服裝せる男が大砲形なる菓子車引きて市中を練り歩き時々「五厘持つて集れ」の號令をかけ、喇叭吹き鳴らし、一二の舉動をかくれば又かと計り愛らしき小兒等の馳せ至りて菓子買ふ様のいとも無邪氣なる、さても命令的商買とは、世は倒さまにもなればなるものかな

▲花月卷　番町　昆布卷生

近來女學生の束髮の前髮益々大に益々ふくれ、形をよくせんとして髢を入れ、形の崩るゝを恐れてコスメチツクにて塗り固む、派出なる淺黄色のリボンは芝翫の浪子を氣取り、安香水を振り掛けたる艷なる造花、之に添ひ、名付けて花月卷と云ふ、斯くの如くして自らは美人になり濟まして大道を濶歩す、落語家小遊三唄ふて曰く「御出額かくそと束髮結ふたら額の御出額が猶目立つ」

▲原稿締切　十二月に限り十日終の便迄



讀者之文壇

與細君志願者之書

茶人

細君志願者諸姫閣下

年頃のお方々は迂なり、未だ母様の乳房をさぐつて他手人形を弄ぶお孃樣と雖ども、苟も女たる以上は終に人の妻たるべき性質を有す、

卿等容色の上らざるを憂ひて罪を鏡の惡しきに歸し、或は風姿の妙ならざるを怒つて罪を衣裳の不可なるに歸し、白粉を加へ臙脂を含み、香料を注ぎ金銀を纒ひ、衣の紫裳の紅、苟も其身を裝ふに足るものあらば、たゞちに取つて以てこれを身邊に掛く、此くの如く一意専心美をして益美に、艶をして益艶たらしめんと勉むる所以のものは、一は女の先天的性質たる虚榮心に基因すと雖ども究竟するに一日も早く銀鞍白馬の貴公子の我を見出して、車駕以て我を迎ふるもの丶あれかしと冀ふに外ならざるなり、將又女學生となりて海老茶の袴を穿つて、日々學校に通ふ所以のものはこの勉勵とこの苦學とによりて得たる智識と才知とを以て、出來得る丈け良い處に嫁して出來得る丈けよい細君たらんことを願へばなり、男子の學を修むるはよき生活とよき地位とを得んが爲めなり、極言すればパンの爲めなり、女子の學を修むるは良妻たらんが爲めなり、極言すれば結婚の爲めなり、豈他あらんや。

これに於てこれを見るに女子の一擧手一投足は終に結婚てふ目的地に向つて進まんが爲めのみ、卿等は終に徹頭徹尾細君志願者たるに外ならざるなり。

故に今余が云ふ所の妻君志願者とは一般の未婚女子を云ふなり、然らば即ち細君とは如何」

如是我聞

常に家に在つて其子女を撫育し、貞操柔順を以て夫に仕へ、家事を整理して夫をして内顧の憂なからしむ、これをこれ細君といふなりと。

其名稱は其地位によりて一樣ならず、上つかたにては奥方と云ひ、町人はお神さんと云ひ下流社會にありては山の神と云ふ而かも其義務と責任とに至りては毫も異なる處なし。されど余は今お神さん以上の志願者に對してのみ書を奉らんと欲す、否寧ろ專ら海老茶袴を穿てる志願者諸姫にのみ書を奉らんと欲するなり。

抑も女は最も女らしきが最もよき女なるなり、其骨格の繊弱にして風姿の優にやさしき、或は其音聲の細く美にして艶になまめかしき、凡て先天的にやさしくみやびやかなるべく作られたり、然るに近來歐米の風俗漸く我國に入るに及び、諸事歐洲の風を崇拜するの結果、遂に女子の心にまで波及して、藍より出でゝ藍より濃く、極端に歐洲の風をてらひて細君の定則も亦一變するに至れるかの感なき能はず。

曰く日本の女子は古來深窓の下に坐して、管弦詩歌これ事となす、故に擧動甚だ不活潑にして體骨甚だ纎弱殆んど病者と撰ぶ處なし、廿世紀に生れたるもの安んぞかゝる病的の女子たるべけんや、宜しく運動を盛にし體育を屑進せしむべしと、たゞちに裳の纏るは不完全なる衣服なりと稱して艶麗優美なる古來の日本服を廢して改良服と稱する異樣のものを案出し、坐すれば起き上り小法師の如く尻のふくらむものを穿ち、襦袢とシャツとを一處にして更紗の袢天の如きものを纏ひ、兩の袖口を巾着の如くひもでくゝり、宛然西洋と日本と唐と天竺と、袿袴と股引と日曜と祭日を一とまとめにしたるが如き姿をなし、且つ躍り且つはね且つ走り、閑雅優艶のをとなしい乙女の美徳を蹂躙し畢つて頗る得意の色あり、此の如にして年頃となり、幸に出雲の神の宣下りて、眉上を下して丸髷を結ひし時、聲言して曰く、男女同權なり安ぞ妻は其夫に盲從せざるべからざるの理あらんやと、良人一をなせば妻は二をなし、良人右すれば妻は左して、茲に男女同權は進んで夫婦同權とも云ふべき異樣の現象を呈し、更に進んでは亭主を敷物に爲して苟も我が意の儘たらしめざれば止まず、遂に男女同權の名詞は再び化して女尊男卑となる、豈にまげざるべけんや。

これを西洋の國々に見るに彼等が其社會に對するや明かに男女同權なりと雖ども、一家に於ける夫婦は決して同權に非ず、妻はよく夫に從ひてよく夫を助けよく夫と親睦するなり、夫唱ふれば婦は隨ふなり。

然るに生學問の我女子たちは、やゝともすれば即ち

曰く米國は如何英國は如何と、而かも與に米國の如何英國の如何を知るもの罕なり借問す米國は果して如何英國は果して如何。乞ふ失敬な事をおつしやるなと云ふ勿れ、卿等これを失敬となさば余は寧ろそを滑稽となさんのみ、若し夫れ女子を侮辱したとの給ふに至りては蓋し沙汰の限りにして寧ろ大笑ひたらずんば非らざるなり。

卿も亭主の其妻を養ふや、祖先の遺德に坐食するの徒は知らず、然らずんば日を夜に續ぎてあくせくと働き、骨を碎き肉を削り、其額に流せし汗の報酬として若干の金を得て、以て糧を其妻に食はしめ衣を其妻に被らしむるに非らずや、一片の肉一尺の衣之れを得るの勞畝に僅小の事に非らず、妻たるものは之れを大に德として粉骨夫を助け專心夫を慰め、一意夫に使ふべきに非らずや、徒らに安閑として坐食し、白粉をぬる事と贅澤をする事と我儘と屁埋窟とを云ふの外雜巾のさしかたも知らずと云ふに至りては、之れ六十年の不作者たるのみならず、實に良人の血をすゝり肉を食ふ最も惡むべきものたらずや。

余は屢々かゝる言を聞く、曰くあすこへ嫁くのは共逆きだからいやなことだと、吁何ぞや、然らば遊んで食を貪らんと欲するものか、

何處の何人か閑々として遊び暮す無爲の徒に食と衣とを與ふるの馬鹿者あらんや、此の如きの言をなす者の心事を思へば余は唯其陋劣にして且つづうづうしきに呆れざるを得ざるなり。

乞ふ極言するの無禮をゆるし玉へ。

乞ふ徒らに戀を說くを止めよ、卿等が主張するピュ――アラヴは米一粒を得るの用にも立たざることを知らざるか、安ぞ卿等の戀愛論に感心して帳面に棒を引く八百屋と魚屋とあらんや。

徒らに余が言を怒ることを止めて靜かに先づ一と通りを聞き玉へ、余は敢て卿等の總てを捕てたゞちにかゝる生學問のおてんばのお饒舌の坐食黨なりと云ふには非らず、されど卿等の間に於て遺憾ながら甚だ多く此の如きの人を見るを如何せん。

余に一知人あり、緣ありて某女學校出身の細君志願者を入て妻となす、然るに其令夫人は不幸にも余が所謂坐食黨の一人なりき、雨が降れば朝寐をなし、風が吹けば早寐をなす晴るれば即ち運動に出御して亭主は何時も留守居番を命ぜらる、其御歸館せらるゝや常にお車に召し給ひて而かも大抵夜に入る、亭主は空腹を

抱て細君のお歸りを待ち、車輪の音高く玄關に止まれば即ち亭主燭を取つて出でてお迎ひ申上げ奉る、特に雨の日などにありてぬれてお歸り遊さるゝ節には倉皇としてお召替の衣を奉らざれば御機嫌麗しからず、此の如くにして漸くにありつきたる夕飯は、料理の事には何等の智識も經驗もなければ固より風味の宜しかるべき道理なし、亭主若し苟も不平の半口ももらすあらんかたゞちに柳眉を逆立てゝブリ〳〵頬をふくらますこと宛も河豚の提灯の如く、ブン〳〵すること芋蟲の如くにして三日も四日も亭主と言葉を交へざるに至る、終には亭主我を折りて平身低頭其罪を謝し以て漸く御機嫌を直して貰ふを常とす、之れを以て亭主甚だ持て餘ませり、終にお氣の毒だが止むを得ず、三行半を與へて去らしむ、亭主胸をさすつて曰く嗚呼實に命が伸びたやうだと。

甚だしい哉余はこの事を聞いて寧ろ戰慄せり、

此の如きは實に細君の何物たるを知らず、良人の何物たるを知らず引いては女子の何物たるかを知らざるものなり、よし幾卷の横文字を讀み得るとも何かせん、其學問其智慧は誠にこれ猫に小判のそれよりも無用の者たらずや。

勿謂妾たちの理想程には世は進んで居らないと、卿等の理想のやうな世になつてたまるものに非らず、又幾百萬年を經るとも世の識者は決して卿等の理想のやうなとんでもなき世は作らざるべし。

余は又屢々新聞の紹介欄に於て求婚の廣告なるものを見る、而して其文中に女學生は御免被るの句あるもの少數ならざるを見て、卿等の前途のために甚だ寒心せり、今の如くにして進み行かば理窟に長けて實際に暗く理想に長じて事務に明かならざる卿等の或者は、終に細君志願者の不合格者たるに至るの悲運に陷るなきなからんか、況んや目下の男女率は遙かに男子の少數にして女子の多數なるを示せるに於てをや。

乞ふ己惚と空想とを離れて眞面目に一考せよ、

若し卿等にして余が知れる友の妻の如からばたゞちに三行半を抱きて出もどりの手傷を被るべきは實に火を見るよりも明白なる事なりとす。

細君志願者諸姬閣下、特に海老茶袴を穿てる志願者諸姬閣下、若し良妻良母たちんことを欲せば宜しく自己の務むべき義務と盡すべき責任とを考察せよ、若し苟も安閑として食を貪らんとするが如きあらば、其心事の卑むべき實に情を賣つて食を得る彼の醜業婦と何

の撰ぶ處かこれあらん、卿等以て如何となす。

寒い朝の記

本郷の下宿屋にて　渡邊柳外

まだ覺めやらぬ昨夜の夢を噛みしめつゝ、蒲團の中より大根のやうなる二の腕ウンと計り宙に舞へば
「貴郎、新聞でございますよ」
とまだ薄暗き枕許に眠ぶさうなる寢亂れ髮の、いとはしたなげなる下女が、新聞片手に、火杓子携げて立てる、氣の弱きは幽靈とも思ふべし。

窓の障子の二處ばかり小さき硝子の入りたるより、外面の冷たき思ひやれば、ほの〴〵と白みたる空近く、黒き瓦屋根の霜に凍りて、冬枯れの隣の家の柿の木に明け烏二羽三羽とまれるが見ゆ、寒ければ起きも上らず。

俥の音や、耳に響き、梯子段を踏む足音の大きなるは彼の九州の豪傑なるべし、嗽口するこゑ、痰吐くおと、上草履のバタ〳〵漸くしげく、鼻すゝるも交りて、彼方此方より人の動く氣勢、何となう騷がし。

「おい地理か」
「今日のレッスンは」
「調べたか」
「昨夜の火事は何處だ」
「こら起きんか」

味噌汁の香紛として、茶碗の音聞ゆるは、哀しい哉、我れ貧しうて臺所に近きため也、お客といふ格にて同じ下宿せる海老茶の式部、靜々と立出で給へば、氣取り屋の尾崎が特に障子隙を開け放ちて眞面目に拜見するをクス〳〵と笑ふは隣の室の愛嬌男なり。

表には早や新聞配達のチン〳〵、豆腐屋のリン〳〵に交りて一群の學生、白き呼息を吐きながら二階に向つて呼び立つるあり、朝歸りの罵り冷嘲さるゝもあり、朝日さし込みて、四疊半の隅々まばゆきばかり、喰ひ荒したる密柑皮、雜誌書物のだらしなき、机の埃堆きまで、さては我着たる蒲團の燒穴、天鵞絨の汚染みたるまで、あり〳〵と見ゆるに我ながら氣持あしく、跳ね起きて寢卷脱ぎ捨つれば、ぞつとばかり膚を襲ふ寒さ。

時に表戸の開け閉ち、ベルの頻りに鳴るは早やぞろ〳〵と出て行くなるべし。

九時より十時まで、バタ〳〵と打拂の音一としきり。下女が紫色の頬べたも、稍々人らしくなる頃なり。

新刊批評

新曲浦島及新樂劇論

坪内博士著
早稲田大學出版

冬枯れのいと淋し氣なる文壇に、時ならぬ花を咲かしつゝあるは即ち此作なり、これに對する色々の批評は、文壇のあちらこちらにて漸く盛んならんとするやうなれど、いまだ身を入れて評せしものを見ず、されど今の文壇に於て此の如く大問題として注意さるゝものは他になし、博士曰く、これ予が樂劇論の一例を示せしに過ぎず、大方の批難は喜んで受くる處なり、また之を舞臺に上すと否とは未決の問題也、たとへ舞臺に上すとするも、七日や十日の稽古にて無責任に演ぜらるゝは眞平御免なりと、吾人も亦此大作に對しては、今輕々しく批評するの禮にあらざるか信ずれば、熟讀翫味の後に意見を述ぶべし、今は只これが紹介に止め置かん表紙といひ印刷紙質といひ近來になき金のかゝつたものにて定價は八十五錢、新樂劇論は百頁の小册子にて定價二十錢也、併せ讀むべし。

セーラ、クルー物語

若松賤子女史譯
内外出版協會發行

セーラクルーといへる小女が、遠く故郷を離れてロンドンなる一女塾に入り、間もなく父を失ひて孤獨となり、該女塾の虐待を受けしも、堅固なる意志と、或る想像力とによりて健全なるを得（此邊の叙述最も面白し）後、曾て父の財産を失ひしと誤解されし父の親友に探し出されたりともいふ筋、原書は彼の小公子の著者バーネット女史にして、譯者は同じ若松賤子なり、英和對譯なれば英語を學ぶものには最も趣味あるべく、また其文章の如き、何れも流暢にして平易なり（定價三十錢）

希臘勇士譚

文學士皆川正禧氏譯
内外出版協會發行

こも亦英和對譯にて、セーラクルーよりも原文は倘一層平易なり、而して原著者はキングスレーなれば、讀みもて行くに措くに忍びざる程面白し、されど原文が平易なるに似ず、譯文の六ヶ敷は子供の讀み物として價値を損じ、特にその文章等遠く若松女史に及はす、

（定價これも三十錢也）

對照英米名家詩抄

文學士小野竹三氏編
内外出版協會出版

十九世紀英米大家の短篇を譯したるもの、重に中學生が英詩研究に資するものなるべし、

（定價二十錢）

銀鈴

尾上柴舟氏纂
行

柴舟氏の和歌二百餘首及び新體詩數千篇を集めたる小册子なり氏の咏歌西歐の新趣味あつて而かも敢て氣取らず、敢て高ぶらず、著者の氣高品きを見る。其歌風雄々しき姿に乏しきも、やさしき趣に富み、斯界の勇將たる資なきも君子たるの質あり。正しく和歌壇上美しく咲ける一本の名花にも譬ひつべし。たゞ新體詩中には翻譯のもの多々ありて、而かも譯とも記さず又原作者の名をも署せず、爲めに著者の原作と誤解せらるゝ恐れあるは著者の爲めに甚だ惜む所なり、一二の類を引いて其歌風を示さんに

菩提樹のかげゆたかなる故郷の
　牧場の道をけふもゆめみつ
わが棹に今日も搖すよ湖の
　水にさやけき戀人の城
ともすれば波にまぎるゝ小さき帆の
　ゆくへに似たるわが希望(のぞみ)かな
草に寐て藍の雲見る丘山の
　松に來て鳴け山ほとゝぎす

の如き皆誦するに足る。又「暮れて行く春の雨夜を老武者の鎧つくろふかゞり火のまへ」の如き若武者と改むる方却て暮れて行く春の雨の寂しき中にも艶なる姿態れるとよく調和するにあらずやと思はるゝ如何、兎に角詩歌の趣味を有する人の一讀する價値あるものなり。(定價廿五錢)

▲文豪小泉八雲

帝國文學臨時增刊
大日本圖書株式會社

帝國文學第十卷第十一號にして小泉八雲氏の紀念の爲め特に小泉號として發行せるものなり。八雲氏及び其遺兒の肖像並びに氏の書簡原稿等を挿み、又文學士數名の氏に關する記事十餘篇を揭げたり開卷揭ぐる所の「誕生より來朝までの小泉八雲先生」は内ヶ崎文學士の筆にして氏の生涯を叙すること詳かに又大谷文學士の記事趣味饒かり、我國に歸化して文名西歐に高く、よく我國情民風に關する同情深き記事を世界に傳へたる氏の一生は等しく我國人の知らんことを欲する所なるべし、(定價廿五錢)

▲日露海戰史

博文館發行

太陽の臨時増刊なり花々しき海戰に全世界の耳目を聳動したる壯絕快絕の記事は、よく此一冊子の中に收められ、數百里の遠き內地にありて海上波濤荒れ、雪中砲彈飛ふを目睹するの感あり。(定價三十錢)

▲世界お伽噺第六十三篇 熊娘

巖谷小波氏編
博文館發行

お馴染の伯父さんの面白きお話し、何時でも聞て厭くことなし、本號は今我國の兵隊が居る所よりも遙か北の西比利亞の話を簡易に燒直したるものなり。(定價八錢)

▲少年日露戰爭史第六編 摩天嶺の卷

仝上

得利寺の役後大石橋の戰の起るの前摩天嶺に開かれたる激戰は我陸軍の行動實に他國に比を見ざるものあるを示し、獨り少年の讀本としてのみならず、又該戰の實際を知らんと欲するものゝ一見すべきものなり附錄軍國讀本又大に見るべし。(定價十二錢)

▲英學生

小石川區小日向臺町三
東西社發行

アーネストルース、斯波貞吉、山縣五十雄三氏の手によりて新に發刊されし英文雜誌也、其廉價なると、記事の趣味あると、英學生にとりて英文研究の好指針なると、多く字書によらずして讀み得べき平易なる雜誌なるとによりて、近來此種の雜誌中最も發行部數の多きもの也、特に其價の廉なる一事は、吾人の貧學生の爲め、三氏に向つて多とする處なり(每月二回定價二錢五厘)

家庭雜誌

婦人

本邦唯一の家庭雜誌

平易簡明の婦人雜誌

第一卷第二號（毎月一回發行）

發刊の辭

男子は今や戰場に出で、辛苦艱難を嘗め盡し、骨身を碎いて君國の爲めに竭して居る、婦人は内に在つて只徒らに其日を送つても可いものでせうか

同じ大君の惠に潤ひ、同じ國土に育つた我々は、男女に差別はない、皆それ／＼の勤がある。此度露國との戰は、我國前古未曾有の大事にして、實に國產安危の係るところ、力あるもの力、金あるものは金、弱ければ弱いだけ、貧しければ貧しいだけ、それ相應に働かねばならぬ、唯一人として安閑として居ることは出來ないのである、況して日頃有り難き敎を受けて居る我々は、尙一入その心懸けがなくてはならぬ

此春我本派本願寺の裏方が身自ら諸國遊說の途に上られたのも、全く此心を全國の婦人に傳へられんが爲であつた、裏方が其時の御諭示には、先づ其行を正しくして心に佛陀の慈悲を持ち、み國の爲めに働いて居る兵士を慰めるやう、勤儉を主として家を治め、軍國の費を助けるやう、御國の爲めに勵めよとの事であつた、たゞ戰爭の場合だからといふのではない、我大日本帝國の臣民たる以上、たとへ平時でも此心掛がなくてはならぬ、實に裏方の此御諭示は婦人として一日も忘れてはならぬ事である

茲に今「婦人」といふ雜誌の生れたのは何の爲めであるか、いふまでもなく此精神を我婦人諸姉にすゝめる爲めである、即ち婦人として婦人たるの義務を竭すへき道を唱導せんが爲めである、而も婦人として婦人たるの義務を竭すには、また一通りの學問も要る、技藝も要る、子供を育てる法も知らねばならぬ、家の經濟を整理する法も知らねばならぬ、要するに心と手とが伴はねばならぬ、本誌は即ち此精神と活動とに就いて諸姉の爲めに此道を講ずるのであります

定價一部郵稅共五錢五厘
六部參拾壹錢十二部六拾錢

發行所　東京本鄉區駒込西片町十番地　婦人社

投稿規定 毎月十八日を以て編輯總締切日と致し候に就き何卒それまでに着する樣願上候猶投稿諸君は**住所記入**を御忘れ無き樣被成下度候宛名は東京市本鄉區駒込西片町拾番地反省社

書籍の取次 愛讀者諸君の便宜を計りて今後本社にて取次を致し候東京市内にて發行の書籍は總て正確迅速に取次可仕候に就き申込の諸君は書名著者發行所等を認め代金及び遞送料を前金にて御送り被下度候

中央公論定價表

		郵税共
一册	金拾貳錢	金拾參錢
六册	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二册	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論廣告料

一行(五號文字二十四字詰)	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし

一郵劵代用の場合は必す壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下 一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下 一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町 東京堂
神田裏神保町 上田屋
本鄉四丁目 文明堂

明治三十七年十一月三十日印刷
明治三十七年十二月一日發行

發行兼編輯人 武田福松
印刷人 清水金右衛門

發行所(電話下谷九一九) 東京市本鄉區駒込西片町十番地 反省社

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

中央公論

前號概目

其他評論、文藝時觀社會研究、海外新潮漫評ポンチ書口繪等凡てこれ必讀の文字中央公論の名に耻ぢず實に論壇の重鎭なり

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
明治三十七年十二月一日發行(毎月一回)　(定價一部十二錢)

發行所　東京本郷區西片町十番地
電話下谷九一九番
反省社

中央公論
NO. 189.